

宮城学院女子大学日本文学会

日本文学ノート

二〇二一年七月
第五十六号(通卷七十八号)

二〇二一年七月
第五十六号(通卷七十八号)

宫城学院女子大学日本文学会

日本文学ノート

蜻蛉卷における宮の君の出仕

山口一樹

はじめに

『源氏物語』の蜻蛉巻では浮舟失踪後の動静が語られているが、巻の後半に至ると物語の舞台は都に移る。ここでは式部卿宮の姫君が父を亡くして出仕し、宮の君と呼ばれるようになったことが語られている。

この春亡せたまひぬる式部卿宮の御むすめを、継母の北の方ことにあひ思はで、兄の馬頭にて人柄もことなることなき心かけたるを、いとほしうなども思ひたらで、さるべきさまになん契ると聞こしめすたよりありて、「いとほしう。父宮のいみじくかしづきたまひける女君を、いたづらなるやうにもてなさんこと」などのたまはせければ、「略」このころ迎へとらせたまひてけり。「略」限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けたまふぞ、いとあはれなりける。
(蜻蛉⑥二六三頁)

宮の君は継母の兄弟である馬頭との不相応な縁談を強いられたものの、事情を知った明石中宮に迎えられて女一宮に仕えることになったのであった。この出仕にはじまる宮の君の挿話について、先行研究では浮舟を物語の舞台に呼び戻す機能を果たしていることが論じられてきた。蜻蛉巻は前半部より浮舟の再登場を促していることが指摘されている^①、宮の君については藤井貞和氏が非在の浮舟を想起させる一因として言及したほか、吉井美弥子氏は宮の君と浮舟との重なりから物語が浮舟なしで新たな状況を切り開けずにいることを見て取り、野村倫子氏は女房になった宮の君との対比により浮舟の「女君性」が保証され薫の追慕の対象になると説いた。^④このように作品構成上の意義が論じられる一方、宮の君の出仕は物語成立期の出仕の実態を反映したものであるとも考えられてきた。藤原道長が娘の格上げを図り高貴な女房を召し集めた等の事情により、物語成立期には出自の高い女性の出仕が増加していた。それゆえ野村倫子氏は宮

の君の出仕について「現実社会を反映するもの」としており、高橋由記氏も道長政権確立後の出仕の実態が宮の君の設定を可能にしたとして「特定の一族にだけ権力が集中した時代様相を色濃く表している」と説く。^⑦ 両氏と共通する見解は近時の諸論に散見され、ほぼ通説になっていようである。

宮の君は式部卿宮の娘であるから、高貴な出自の人物が女房になる、という点において物語成立期の出仕の実態と接点を持つのは確かであろう。しかしそれだけの理解で十分といえるのだろうか。従来諸説では史実との関係に焦点があてられる一方、先行物語との関係についてはあまり論じられてこなかった。^⑧ とくに宮の君が出仕するに至った経緯に継母が関わっていることは看過すべきでないように思う。宮の君は継母によって馬頭と結婚させられそうになっているが、この点については池田和臣氏が『源氏物語』中の継子いじめ譚を瞥見するなかで既存の発想を踏まえたものであることに触れている。^⑩ とくに『落窪物語』において落窪の君は継母から典薬助との関係を強いられており、宮の君との共通性が確認できる。本稿で注目したいのは、落窪の君が女房としての扱いも受けており、『源氏物語』中にもそれに類する事例が見出せる点である。宮の君が継母から不当な縁談を強いられただけでなく、その境遇をきっかけに女房に身を落としているのも、既存の継子譚に着想を得たものと考えられるのではなからうか。

以上より、本稿では宮の君の出仕について落窪の君を中心に継子譚の女君と比較することで、特徴をとらえ直すことを目指す。宮の君の出仕が物語成立期の社会状況と接点を持つだけでなく、継子譚の発想の系譜に位置づけられるものでもあることを確認したうえで、男君が女君を女房の立場から救い出さない、という類型から逸脱した新たな展開を辿ることで手習巻以後の物語が導き出されていることをみていきたい。

(一) 女房扱いを受ける女君

まず落窪の君が継母から女房としての扱いを受けていたことを確認したい。

一 箏の琴を世にをかしく弾きたまひければ、当腹の三郎君、十ばかりなるに、琴心にいれたりとて、「これに習はせ」

と北の方のたまへば、時々教ふ。

(卷之一、一八一―九頁)

二 二人の婿の装束、いささかなるひまなく、かきあひ縫はせたまへば、しばしこそ物いそがしかりしか、夜も寝も寝ず縫はず。

(卷之一、一九頁)

本文一において、継母は落窪の君に命じて三郎君に琴を教えさせている。このち落窪の君の手紙を継母が得て道頼との関係を知った際には、落窪の君が男に迎え取られるのを危惧して「よき吾子たちの使ひ人と見置きたりつるものを」(卷之一、七九頁)と思つている。落窪の君が三郎君に琴を教えているのは、この「よき吾子たちの使ひ人」としての役割に含まれるものであつたと考えられる。また本文二において、継母は大君と中の君の婿に贈る装束を落窪の君に寝る間もなく縫わせている。落窪の君が道頼と逢つたことで裁縫の進行が遅れた際、継母は女房である少納言に手伝わせており(卷之一、八七頁)、落窪の君が道頼に迎え取られた後には落窪の君に代わる女房を召し集めてもいる(卷之二、一四七頁)。婿の装束を縫うのは本来女房の役目であつたと考えられ、それを継母は落窪の君に押し付けていたのだと理解できる。なおあこぎが落窪の君に道頼を頼るよう諭す場面でも継母について「使ひたてまつりたまはむの心のいと深くて」(卷之一、四六頁)と述べており、あこぎの認識に即しても継母が落窪の君を女房として使役していたことが確かめられる。

落窪の君は「わかうどほり腹」(卷之一、一七頁)であり、皇室の血統をひく女君である。しかし実母を亡くしたことで継母から虐待を受けており、女房が担うべき仕事を強いられるのであつた。後ろ盾を失つて継母から虐待を受けるなか、皇統でありながら女房の立場に身を落とす、という推移を辿っている点には宮の君との共通性が見出せる。

ただし宮の君の場合は、父宮の死後、継母から不相应な縁談を強いられるところを明石中宮に迎えられて女一宮の女房になつたのであつた。継母の虐待が間接的に女房に身を落とすことにつながっている点は、継母から直接使役されてる落窪の君と相違する。そこから宮の君の出仕を先行物語の発想とは切り離して捉える立場もあろうか。

しかし『源氏物語』中の継子譚の枠組みを持つ物語は、既存の発想を踏襲しながらも変化させて織りなされていた点

に留意したい。⁽¹⁾ こうした傾向は皇統の女君が女房扱いを受ける危機にさらされる事態についても見て取れる場合がある。まず兵部卿宮の娘である紫の上の場合は、姫君の失踪を知った継母の心情が「わが心にまかせつべう思しける」(若紫①二六〇頁)と語られており、陣野英則氏によって継母が紫の上を女房として使役しようとしていたことが読み取られている。⁽²⁾ 継母に使役される可能性が示されることで、光源氏が紫の上を連れ去ることに救済としての意味が付与され、合理化されているのだと考えられる。一方、常陸宮の娘である末摘花に対し、叔母が「この君をわがむすめどもの使ひ人になしてしがな」(蓬生②三三三頁)と娘の女房にしようとしているのも、畑恵理子氏によって『落窪物語』の継母の造型を継ぐものであることが指摘されているが、この場合は継母の役どころを継母でない人物が担う体であるといえる。受領の妻になった末摘花の叔母は、姉妹である末摘花の母に侮辱されていたとして(蓬生②三三三頁)、姫の末摘花に恨みを転化している。継子譚に由来する虐遇の形を踏襲しながらも、継母ではなく叔母であるという設定によってその必然性を生じさせ、受領層ゆえの自意識をも掘り下げているといえる。継子譚の枠組みを持つ物語において、女房として扱われる事態は皇統の女君が陥る逆境の一つの典型であったと考えられるが、『源氏物語』ではときにそれが状況に変化を加えた形であられるのである。⁽³⁾

以上のような事例を思い返せば、宮の君が継母の虐遇をきっかけに女房に身を落としているのも、先行する継子譚に着想を得ながら変化を加えた形であると考えられるのではなからうか。女君の身边に継母が存在しながら、その人物から直接使役されるのでない事例は先に見いだせないのであるが、ここでは継母の虐遇と皇統の女君が女房に身を落とす事態とが連なっている点を重視して、宮の君の出仕は継子譚を変奏させていく物語が蜻蛉巻に至って新たに編み出した女君の零落の形であったと考えたい。そしてそのように先行する物語との関係を視野に入れると、宮の君の出仕について高貴な女性の出仕が増加した現実を取り入れたものとする従来の理解は、やや物語成立期の史実に力点を置きすぎた見方であったといえるのではなからうか。むしろ高貴な女性が女房に身を落とす事態は現実が増加する以前から物語の世界では描かれていたといえ、⁽⁴⁾ 宮の君の場合はその発想の系譜に連なることが現実の社会状況と接点を持つことにもつながったのだと考えられる。

(二) 宮の君の待遇と薫の失望

次に宮の君の特徴について、出仕後の待遇に注目して検討を進めたい。紫の上や末摘花の場合は女房として扱われる事態が未然に回避されてしまうため、ここでも落窪の君との比較を中心に行う。以下、継母から直接女房扱いを受ける落窪の君の場合と異なり、宮の君は異例の高待遇で女一宮方に迎えられていることに注目したい。そうした出仕後のあり方は宮の君が他の女房とは別格の存在であることを印象付け、既存の継子譚とは異なる物語展開を導き出しているのではなからうか。宮の君の呼称や装束、居所のあり方に焦点をあてて検討する。

一 限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けたまふぞ、いとあはれなりける。

(蜻蛉⑥二六三頁)

二 宮の君は、この西の対にぞ御方したりける。若き人々のけはひあまたして、月めであへり。

(蜻蛉⑥二七三頁)

本文一は、はじめに引用した宮の君が出仕した直後の箇所を一部再掲したものである。「限りあれば」とあるため「宮の君」という呼称は女房としての呼び名であると解釈できるが、高橋由記氏が論中で取り上げた脩子内親王付き章明親王女も「一品宮々君」と呼ばれていることから、⁽¹⁶⁾宮家の姫君であることに由来する呼称でもあったと考えられる。またそうした名で呼ぶことについても、宮の君の場合は「うち言ひて」とあり周囲から気遣われていたことが表れている。⁽¹⁷⁾これに対し落窪の君の場合は継母が邸の者たちに「落窪の君と言へ」（巻之一、一七頁）と命じたことから、居住する「落窪」に由来する蔑称で呼ばれており、宮の君のような血統への配慮は何えない。

また宮の君は「裳ばかりひき懸けたまふぞ」とあるように、裳を着用する一方、唐衣の着用は免除されている。この点は『新潮日本古典集成』が「主人の前では女房は裳、唐衣着用の正装が決りである」とするように、式部卿宮の姫君であることによる特別措置であったと考えられる。落窪の君の装束については父の中納言が「白き袷一つをこそ着てゐたりつれ」と言及しており（巻之一、二六頁）、袷の袷一枚の着用しか許されていないことが女君の過酷な状況を象徴

していた。

本文二は薫が宮の君のもとを訪れる場面であるが、宮の君は対の屋を居所としているほか多数の女房を付き従えていることも確認できる。『栄花物語』で関白藤原道兼の娘が藤原威子のもとに出仕した際も「大人十人、童女二人、下仕」(あさみどり②一四三頁)が付き添っていたと語られており、高貴な女性が女房になるとき、その女性に仕える女房が同行する場合もあったことが想定される。宮の君が出仕する際も多数の女房が同行しており、そうするのに十分な住まいが与えられたのだと考えられる。一方の落窪の君は「落窪」に住まわせられているほか、典薬助との関係を強いられるときは「柩戸の廂二間ある部屋の酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋」(巻之一、一〇三頁)と悪臭ただよう部屋に幽閉されていた。

落窪の君に対する継母の態度は「つかうまつる御達の数にだに思さず」(巻之一、一七頁)とも語られている。呼称や装束、居所のあり方に即して確認されるように、落窪の君は並の女房以下の劣悪な環境を強いられていたのであった。それに対し、宮の君は式部卿宮鍾愛の姫君という高い出自に配慮した待遇で迎えられている。このような両者の相違は、継母から直接女房扱いを受けているか否か、という点に基づくものといえる。宮の君の場合は継母の虐待からの救済措置として出仕が選び取られたのであり、それゆえこうした高待遇も実現したのであった。

『落窪物語』において落窪の君が並の女房以下の過酷な状況に置かれていることは、男君によって救い出される展開を促すものと思しい。道頼はとくに「落窪の君」と呼ばれていることから女君が継母や父親から冷遇されているのを確かめ、「いかで、よくてみせてしがな」(巻之一、八七頁)と姫君を幸福にし、継母方に復讐を果たすことを決意するのである。また女君を女房扱いから救い出すのに類する行為は光源氏にもしばしばみられ、物語展開や主人公像の類型になつていたと考えられる。先述のとおり、光源氏は紫の上を連れ去ったことで継母に女房として扱われる危機から意図せずとも救い出しており、叔母の筑紫行きの勧誘を末摘花が拒んだ後も女君を邸に迎え入れ生活を援助している。このほか玉鬘を迎える際も、男たちの興味を集める存在にしようとするねらいと表裏するが、秋好中宮の女房として認識されないよう配慮して居所を選んでいた(玉鬘③一二五頁)。

一方、宮の君の場合はその出自にふさわしい待遇を受けているため、落窪の君の場合と比べれば女房の立場が持つ遊境としての意味合いは弱いといえる。¹⁵⁾むしろその待遇のあり方は、宮の君が並の女房とは一線を画す存在であることを印象付けていると考えられる。¹⁶⁾女一宮方の女房は「やむごとなき人の御むすめなどいとも多かり」（総角⑤三〇五頁）と出自の高い者ばかりであることが語られていたが、それらとも別格の存在であることを示しているよう。そしてそうした宮の君の出仕のあり方は、男君が女君を救い出さない、という既存の型から外れた独自の展開を導いているのではないのか。宮の君の格の高さが印象付けられるなかで、薫は宮の君に宮家の姫君としてふさわしい振舞いを期待し、それゆえ失望するのである。薫が宮の君に対面した場面を引用する。

人づてともなく言ひなしたまへる声、いと若やかに愛敬づき、やさしきところ添ひたり。ただ、なべてのかかる住み処の人と思はば、いとをかしかるべきを、ただ今は、いかで、かばかりも、人に声聞かすべきものとならひたまひけんとなまうしろめたし〔略〕これこそは、限りなき人のかしづき生ほしたたまへる姫君、また、かばかりぞ多くはあるべき、あやしかりけることは、さる聖の御あたりに、山のふところより出で来たる人々の、かたほなるはなかりけるこそ、この、はかなしや、軽々しやなど思ひなす人も、かやうのうち見る気色は、いみじうこそをかきかりしか

（蜻蛉⑥二七四―五頁）

自ら求めたにも拘わらず、宮の君が声を聞かせたとき薫は宮の君に失望する。先立つ場面で小宰相の君が声を聞かせて話した際は「見し人よりも、これは心にくき気添ひてもあるかな」（蜻蛉⑥二四六頁）と、浮舟より嗜み深い者と好意的に受け取っていた。宮の君に対して薫が失望したのは「なべてのかかる住み処の人と思はば、いとをかしかるべきを」ともあるように、女房としてではなく、宮家の姫君としてふさわしい振舞いを期待していたためと理解できる。そうした宮の君に対する薫の期待は、宮の君が他の女房とは別格の存在であることが印象づけられていたことで、必然のものとして導かれていると考えられる。宮の君に失望してしまう薫の姿は、女君を女房の立場から救い出す男君など物語の理想に過ぎなかったことを照らし返すようでもある。薫は宮の君とは対照的に大君や中の君が鄙の地で出家者に育

てられていながら魅力的であつたことを想起し、次いで浮舟の可憐さについても思い返している。

以上のように宮の君が継母の虐待をきつかけに女房の立場に身を落とし、しかし手厚い待遇で迎えられていることはその格の高さを印象づけ、男君が女君に失望し見放すという既存の型から逸脱した新たな展開を導いていたのである。

(三) 宮の君の物語の意義

宮の君の物語は型から外れた展開を辿ることで何を描き出し、宇治十帖の構成上いかなる機能を果たしたのか。宮の君に失望した薫の心情に検討を加えることで考察を深めたい。ここでは宮の君登場以前にも、薫が宇治の女君との関係を喪失したとき、女房の立場にある女性たちとの関係が繰り返し語られていたことに注目する⁽²⁾。都を舞台とするこれらの場面では、女房との関係が組上に載せられることで、宇治の女君が薫にとつていかなる存在であつたかが表されている。とくに宿木巻の按察の君との関連は従来論じられてこなかったが、こうした一連の叙述との脈絡を検討する必要があるのではなからうか。宮の君に失望した際の薫の心情については、宇治の女君たちへの執着がより強固なものになっていることともに、浮舟を大君の代替として捉える認識も持続していることをみていきたい。

以下本文一は大君死後、按察の君との関係が語られる場面、本文二は浮舟失踪後、小宰相の君との関係が語られる場面である。

一 例の、寝ざめがちなるつれづれなれば、按察の君とて、人よりはすこし思ひましたまへるが局におはして、その夜は明かしたまひつ。
(宿木⑤四一八頁)

二 見し人よりも、これは心にくき気添ひてもあるかな、などでかく出で立ちけん、さるものにて、我も置いたらましのものを、と思す。人知れぬ筋はかけても見せたまはず。

(蜻蛉⑥二四六―七頁)

まずこれらの女房たちに対する薫の関わり方に注目したい。大君を亡くしたのち薫は按察の君と一夜を共にしており、

その心情は「寝ざめがちなるつれづれなれば」と語られていることから、大君を亡くした喪失感を慰めるためであったことが伺える。また小宰相の君と対面した際は「さるものにて、我も置いたらましもを」とあり、実際に行動に移るわけではないものの、邸に迎えとつてよいほどの相手だと好感を抱いている。これらに対し宮の君の場合は、女房の立場への転落に同情してはいたが（蜻蛉⑥二六四頁）、対面後即座に失望し、宇治の女君たちを想起するばかりであった。

すなわち薫は宇治の女君との関係を喪失するたび、都の女房たちと交渉を重ねて実事に至るなり魅力を感じるなりしてきたのだが、宮の君に対しては何の進展も見られないうちに関係を断念しているのである。とくに按察の君を大君の喪失感を慰める相手としていたのに注目すれば、宮の君との関係を早々に断念したことには、薫の想いが宇治の女君以外に転化し得なくなつたことが表れていると考えられる。按察の君との逢瀬のち薫が中の君に「紛るることもやあらんなど思ひよるをりをりはべれど、さらに外ざまにはなびくべくもはべらざりけり」（宿木④四四七頁）と述べていたように、薫にとつて宇治の女君が唯一無二の存在であることは宿木巻の段階ですでに表れていたのだが、この事實は宮の君との関係を通してより揺るぎないものとして確かめられているといえる。宮の君は八の宮の兄弟を父に持ち、宇治の女君たちと血縁上連なる存在であるから、按察の君の場合とは異なり、交流を深めるなかで薫の喪失感が慰められる可能性も想定し得るように思われる。しかしそうはならずむしろ即座に関係が絶たれることで、大君や中の君、浮舟に対する執着の強さが証されるのである。八の宮の娘でない女性が新たに現れても薫との仲は進展し得ないことが確認され、それでもなお物語が書き続けられようとするとき、浮舟の再登場が要請されるのだと考えられる。

次に女房たちとの関係を経て薫が抱く宇治の女君たちへの想いに注目したい。先述のとおり、薫は按察の君と逢瀬を交わした後、大君について何者にも代えがたい存在であったとしている。これに対し小宰相の君と対面した際には「見し人よりも、これは心にくき気添ひてもあるかな」と、小宰相の君を浮舟より嗜みがあると評している。この評価について、すでに原陽子氏は薫にとつて浮舟が大君の形代に過ぎない存在であったことが表れていると指摘しているが、こうした薫にとつての浮舟の存在の軽さは、按察の君と大君を思い比べたときとの落差に注目することで、より明確にみてとることができる。

このち宮の君と対面した際には「かやうのうち見る気色は、いみじうこそをかしかりしか」と、浮舟の魅力を捉え直しているようではある。しかしここでも浮舟を大君の代替と捉える意識は通底していると考えるべきであろう。⁽²⁾それは浮舟に対する評価が「さる聖の御あたりに、山のふところより出で来たる人々の、かたほなるはなかりけるこそ、この、はかなしや、軽々しやなど思ひなす人も」と、大君や中の君の存在を想起するなかで導かれているためである。こうした薫の心情の推移は女一宮との恋を断念した後にもみられる。薫は「昔の人ものしたまはましかば、いかにもいかにも外ざまに心を分けまじや(略)また宮の上にとりかかりて、恋しうもつらくも、わりなきことぞ、をがまじきまて悔しき」(蜻蛉⑥二六〇頁)と大君や中の君との過去を回想したうえで、「これに思ひわびてさしつぎには、あさましくて亡せにし人の(略)ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を」(蜻蛉⑥二六〇―一頁)と浮舟の魅力を思い返していた。すなわち蜻蛉巻後半部において、薫は大君や中の君に連なる存在として意識したときのみ浮舟の魅力を見出しているのである。この点には薫が未だ一個人として浮舟と向き合っていないことが表れている。

こうしてみると宮の君に失望した際の薫の心情には、宇治の女君に対する執着の強さとともに、浮舟に対する認識の皮相さが同時に表れていると考えられる。薫の浮舟に対する扱いの軽さや入水に至った苦悩を理解できていないことは蜻蛉巻の随所で示唆されているが、宮の君との関係によつて導かれた薫の心情にもそうした一面が見て取れるのである。手習巻以後の物語では浮舟が生存していたことが明らかになるが、いまだ浮舟の抱えていた苦悩に思い至らない薫の姿も捉えられている。薫は明石中宮に対し浮舟の性格について「心とおどろおどろしうもて離るることははべらずやと思ひわたりはべる人のありさま」(手習⑥三六七頁)と述べ、小野に小君を遣わしたのち返書がないときは「人の隠しすゑたるにやあらん」(夢浮橋⑥三九五頁)と邪推する。こうした浮舟に対する認識の甘さは、宮の君の物語でも予示されていたといえる。はじめに述べたとおり、先行研究では宮の君の物語について浮舟を再登場させる意義が論じられてきたが、薫が浮舟と再会するとき女君の心の深層に思い至ることはできるのか、といった問題が同時に投げかけられていることにも留意すべきではなからうか。

以上、宮の君の出仕は、皇統の女君が女房扱いを受ける継子譚の発想を変化させながら引き継ぎ、男君が女君に失望するという新たな展開を導いていたのであるが、それによって宇治の女君たちへの薫の執着の強さと浮舟に対する皮相な認識が浮き彫りにされ、浮舟を物語の舞台に呼び戻すとともに、薫との関係が孕む問題をも示唆していくのであった。

※『源氏物語』『落窪物語』『栄花物語』の引用は『新編日本古典文学全集』に拠る。

(注)

- 1 菊田茂男氏「東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋」(山岸徳平・岡一男監修『源氏物語講座 第四卷 各巻と人物Ⅱ』有精堂、一九七一年)、小林正明氏「宇治十帖の招魂」(『むらさき』第二十一輯、紫式部学会、一九八四年七月)、安藤徹氏「隠すことと顕わすこと」(『源氏物語と物語社会』森話社、二〇〇六年、初出一九九四年)等
- 2 藤井貞和氏「王権・救済・沈黙」(『デイヴィニタス叢書 三 源氏物語の始原と現在』砂子屋書房、一九九〇年、初出一九七二年)
- 3 吉井美弥子氏「蜻蛉巻試論——浮舟の「四十九日」」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社、二〇〇八年、初出一九八九年)。宮の君と浮舟、あるいは女一宮との重なりについては宗雪修三氏「世づかぬ」薫——蜻蛉の巻の独詠歌と主題」(『物語研究会編『物語研究——特集・語りそして引用』新時代社、一九八六年)、原陽子氏「女一の宮物語のゆくえ」(今井卓爾・鬼塚隆昭・後藤祥子・中野幸一編『源氏物語講座 第四卷 京と宇治の物語 物語作家の世界』勉誠社、一九九二年)、池田和臣氏「浮舟物語の方法——二つの挿話をめぐって——」(『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院、二〇〇一年、初出一九九七年)にも言及があり、宮の君の存在は大君の魅力を想起させるとする三角洋一氏「蜻蛉巻の宮の君」(『むらさき』第四十八輯、紫式部学会、二〇一一年二月)もある。

4 野村倫子氏「蜻蛉」の宮の君——薫の浮舟評を対女房意識よりみる——」(『源氏物語』宇治十帖の継承と展開 女君流離の物

- 語』和泉書院、二〇一一年、初出一九九九年・二〇〇六年)
- 5 阿部秋生氏「作者の環境」(『源氏物語研究序説』東京大学出版会、一九八四年)、吉川真司氏「平安時代における女房の存在形態」(『律令官僚制の研究』塙書房、一九九八年、初出一九九五年)
- 6 注4野村倫子氏
- 7 高橋由記氏「『源氏物語』「蜻蛉」巻の宮の君」(『平安文学の人物と史的世界——随筆・私家集・物語——』武蔵野書院、二〇一九年、初出二〇〇一年)
- 8 宮の君の出仕について久下裕利氏は「現実に取り得る事例の反映であった可能性」があるとし(『宇治十帖の表現位相——作者の時代との交差——』『源氏物語の記憶——時代との交差』武蔵野書院、二〇一七年、初出二〇一〇年)、廣田収氏は「歴史の現実による物語への「浸食」とする(『式部卿宮の姫君の出仕』横井孝・久下裕利編『宇治十帖の新世界』武蔵野書院、二〇一八年)。
- 9 千野裕子氏は『うつほ物語』中の高貴な女房たちについて論じるなかで宮の君との相違に言及している(『うつほ物語』の女房たち)『女房たちの王朝物語論』『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』青土社、二〇一七年、初出二〇一三年)。本論では宮の君の出仕経緯に継母が関わっていることを重視し継子譚との関係を分析する。
- 10 池田和臣氏「『源氏物語』における継子譚の形態分析——玉鬘物語の解析のために——」(『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院、二〇〇一年、初出一九九七年)。上坂信男氏も継母が宮の君に「ことにあひ思はで」と冷淡であることについて既存の継母像を踏まえたものと言及する(『源氏物語の思惟とその超克——継母子物語のばあい——』『平安文学研究』第五十四卷、平安文学研究会、一九七五年)。
- 11 注10池田和臣氏や上坂信男氏の論考のほか石川徹氏「継子ものとその周辺——落窪物語をめぐる——」(『平安時代物語文学論』笠間書院、一九七九年、初出一九六七年)、日向一雅氏「源氏物語と継子譚」(『源氏物語の主題「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社、一九八三年)、高木和子氏「『源氏物語』における継子譚の位相」(『源氏物語の思考』風間書房、二〇〇二年、初出二〇〇一年)など参照。

- 12 陣野英則氏「主人格の女性と女房たちとの間」〔源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用〕勉誠出版、二〇一六年、初出二〇〇五年
- 13 畑恵里子氏「蓬生」巻の末摘花と『落窪物語』——「わがむすめどもの使ひ人」考——〔王朝継子物語と力——落窪物語からの視座——〕新典社、二〇一〇年、初出二〇〇八年。なお畑氏は「叔母」とは「母」へと繋がり、「継母」とも連鎖する多義的な存在」と末摘花の叔母を継母に連なる存在としているが、ここでは本文のうえで「叔母」（蓬生②三三三頁）とされていることに力点を置き、あくまでも継母ではない存在として理解したい。
- 14 このほか継子譚の枠組みを持つことが指摘されている浮舟の物語でも女君が匂宮から女房としての扱いを受けており（浮舟⑥一五五頁）、継母ではなく男君によって使役される点の特徴であると思われる。
- 15 本稿では継子譚との関係に焦点をあてたが、注9千野氏に指摘されるとおり『うつほ物語』にも高貴な出自の女房は複数登場している。
- 16 注7高橋由記氏。資料の引用は『天祚禮祀職掌録』（塙保己一編『群書類従 第三輯 帝王部』訂正三版、続群書類従完成会、一九五九年）に拠る。
- 17 『源氏物語大成』によれば別本の陽明家本と保坂本では「うち言ひて」を「いひて」とするが、ほかに目立った写本間の異同はみられない。
- 18 この点は女房に身を落としたことについて、宮の君の葛藤や苦悩が掘り下げられないことから確かめられる。先の本文一で語り手が「あはれ」と評していることから、宮の君の出仕が零落の意味を持つことは見て取れるが、女君の内面には焦点があてられておらず、以後もその胸中が語られる場面は見出せない。一方、落窪の君の場合は継母から酷使されるなかで「いかでなほ消えうせぬるわざもがな」（巻之一、一九頁）等と絶望した心中が語られており、男君による救済が必然化されていると考えられる。
- 19 先の本文二で宮の君の居所は「御方」と語られていたが、同じ女一宮付き女房の小宰相の君の場合は「局」（蜻蛉⑥二四六頁）と語られ、主人である女一宮の居所が「御方」と語られている（蜻蛉⑥二四五頁）。こうした語られ方に即せば、宮の君は他の女房と一線を画すとともに主人格の一面すら持つ者として位置づけられていると考えられる。なお『源氏物語大成』によればこれら

の表現に写本間の異同はみられない。

- 20 夙に三田村雅子氏は『源氏物語』において女主人公の死後、その形代として召人が登場することを指摘している（『源氏物語における〈形代〉』（『源氏物語 感覚の論理』有精堂出版、一九九六年、初出一九七〇年）

21 注3原陽子氏

- 22 すでに注8廣田収氏は薫が宮の君と女一宮を「同じ人」と捉えている点に注目して「薫は、「ゆかり」とみる人物は同じだという人間の類同の認識に囚われている」と論じている。本稿の論旨も廣田氏の理解に重なる面はあるが、着眼点が異なり、浮舟に対する薫の認識に焦点をあてている。

- 23 秋山虔「薫大将の人間像」（『源氏物語の世界』東京大学出版会、一九六四年、初出一九五七年）、藤本勝義氏「浮舟失踪の波紋」（秋山虔・木村正中・清水好子編『講座 源氏物語の世界 第九集』有斐閣、一九八四年）等

〔付記〕 本稿は日本文学協会第三十八回研究発表大会（於金沢大学）における口頭発表の内容に加筆修正を加えたものである。席上および発表後に、教示を賜った先生方に心より御礼申し上げます。

吾輩も猫である —— 日本文学史の中のネコたち（その一）

深 澤 昌 夫

はじめに

二月二日は「猫の日」だという。誰が決めたのか。猫の日実行委員会であるという。いつ決まったのか。一九八七年だという。では、「犬の日」はどうだろう（戌の日ではない。念のため）。こちらは一月一日であるという。なるほど。やはり一九八七年に制定されている。いずれの場合も、関わっているのは一般社団法人ペットフード協会である。

ペットフード協会の前身は、一九六九年に設立された日本ドッグフード工業会である。その後、ペットの多様化、ことに猫を飼う家庭が増えたことでキャットフード市場が拡大。日本ドッグフード工業会は一九七五年にペットフード工業会に名称変更を行い、二〇〇九年には一般社団法人化され、名称もペットフード協会に改められた。⁽¹⁾

ペットフード業界がそうであったように、かつて日本でペットといえば犬であった。二〇〇七年三月に行われたNHKの世論調査でも、日本人が好きな動物のトップは犬で、当時、犬は第二位の猫の倍近いポイントを獲得していた。⁽²⁾だが、はつきり

言って、今トレンドは猫である。

そういえば、NHKで「岩合光昭の世界ネコ歩き」が単発の特番からレギュラー番組に昇格したのは二〇一三年のことである。もうその頃には十分な手応えがあったのだろう。二〇一五年ごろには猫関連のニーズの高まりから「アペノミクス」ならぬ「ネコノミクス」（猫の経済効果）などということが言われ始め⁽³⁾、それからほどなく、猫の飼育頭数はついに犬のそれを上回った⁽⁴⁾。犬雑誌、猫雑誌の発行部数も同様であり、今や「空前の猫ブーム」といわれている。⁽⁵⁾

いったい、ブームというものがどのようにして発生するのか、その理由・条件・背景・プロセスには様々な社会的要因が絡み合っていて、分析は必ずしも容易ではないが、一九八〇年代初頭の「なめ猫」がそうであったように、ブームというものは往々にして数年程度で終息することが多く、たいいはいはある特定の時代・社会、あるいは特定の世代や集団等のなかで起きる「一過性の出来事」とみなされている。だからこそ「流行」であり、「ブーム」なのである。だがしかし、それがある臨界点を突破して、広く社会に認知、受容されていくと、発生当時は新

奇な「流行」であったものも、いつしか「普通」の出来事になり、新たな「常識」、新たな「スタンダード」となる。

その意味で言うと、ブームなるものがいかにして発生するか、という問題もさることながら、ブームが一過性のブームに終わらず、それがいかにして社会のスタンダードになつていくのか、という問題もまた、非常に興味深いものがある。

ちなみに、以前であれば、関連業界やマスコミが意図的にブームを「作り出す」ということも十分ありえたが、昨今の猫ブームはそれとは異なり、インターネットの普及と、それに伴う動画共有サイトや誰でも容易に情報発信可能な各種SNSの隆盛によつて支えられている、という指摘がある。⁷⁾

たしかに、ユーチューブの日本語版サービス開始が二〇〇七年、フェイスブック、ツイッターの日本語版が二〇〇八年、ラインは二〇一一年、インスタグラムが二〇一四年と、日本国内におけるSNSの普及は目覚ましいものがある。こうしたネットワークサービスを通じて、日々膨大な量の「猫」動画、「猫」画像が電腦空間にあふれ、とりわけパーソナルなレベルでの交流と交歓、癒しと触れ合いを促していることは、まず間違いない。⁸⁾

他方、リアルなところでは、こうした「癒しと触れ合い」をビジネスにした猫カフェがある。ウイキペディアによれば、猫カフェは台湾発祥で、日本では二〇〇四年大阪に誕生した「猫の時間」が国内初の猫カフェであるとされている。⁹⁾その後、猫カフェは急激に増加し、環境省の調査によれば「2005年に

3店舗だったものが、2015年末時点では約300店舗が全国に展開している。」という。¹⁰⁾

いや、電腦空間における「猫」動画や「猫」画像の爆発的感染拡大(ただし現状では日本国内に限られている)に比べれば、猫カフェの実店舗など物の数ではない、という見方もありうるだろう。しかし、猫カフェであれ何であれ、小規模ながら、実際に店舗を構え、人を雇い、猫を養い、多額のコストをかけながら経営を維持していく、ということは、それほどたやすいことではない。その意味で、わずか十年で店舗数が百倍という増え方は、やはり驚異的と言わざるを得ない。

ところで、猫カフェじたいは近年流行の新業態であるが、朝倉無声『見世物研究』によると、珍しい動物たちの見世物興行はすでに江戸時代初期(寛永ごろ、一七世紀前半)から行われており、その後、將軍綱吉の時代(一七世紀末―一八世紀初)に生類見世物禁止令が出されたりしたこともあったが、一八世紀末の「寛政年代から江戸の浅草と両国とに、孔雀茶屋を初め鹿茶屋や珍物茶屋、又大阪の下寺町と名古屋の末広町とに、孔雀茶屋を開場した。(中略) 其中でも江戸の孔雀茶屋は、最も好評を得たので、化程度(引用者注:一九世紀初頭)に花鳥茶屋と改称すると同時に、大いに規模を拡張して、多くの珍禽獣を見せた」とある。¹¹⁾あるいは、若尾謙二「動物園革命」もまた、「江戸時代の初期には、京都の四条河原で珍獣の見世物の興行が行われていた。(中略) 江戸堺町や大坂の道頓堀などでも、動物の見世物興行は活況を呈していた。江戸時代後期になり、都市

の人口もふえると、都市に設けられた茶屋に動物が配されるようになり、定着した園地で動物を展示する施設として、大坂の孔雀茶屋、江戸の花鳥茶屋などの民営の園地が登場したと述べており、日本では一八世紀末の寛政年間に「孔雀茶屋」「花鳥茶屋」「名鳥茶屋」など、美しい鳥や珍しい動物を客寄せに使った茶屋が存在していたことが知られている。

朝倉無声は「これらの茶屋は、動物園の先駆をなすもので」とあると記すが、動物の展示（見世物）と喫茶の取り合わせは、動物園というより、まさに猫カフェの先駆形態といつてよく、さすれば二一世紀初頭の猫カフェの登場、あるいは全国各地を巡回する「ふれあいねこ展」等のイベントは、たとえその発祥が海外であろうとなかろうと、いずれ日本に出現して何らおかしくない代物であった、ということもできるだろう。

以上は主として「生きた猫」「生身の猫」たちの話だが、近年の猫カフェの隆盛やネット上の写真や動画の氾濫もさることながら、この間、美術界でも盛んに「猫展」が開催されるようになったことは注目に値しよう（むろんこれも日本国内の話である）。

たとえば、日頃から猫をモチーフに作品を創作している現代のアーティストたちが一堂に会し、丸善丸の内本店ギャラリーで作品を展示即売する「CAT ART フェスタ」が始まったのは二〇〇五年のことであった。その翌年には、平木浮世絵美術館 UKIYO TOKYO 開館記念『にゃんとも猫だらけ』えどのねこ展 CATS OF MANY VARIETIES が開催され（二〇〇六

年一〇月五日～二月一七日）、二〇〇九年には江戸東京博物館で「江戸東京ねこづくし展」（二〇〇九年八月一三日～九月二七日）、二〇一二年には太田記念美術館の「浮世絵猫百景―国芳一門ネコづくし展」（二〇一二年六月一日～七月二六日）、二〇一五年には名古屋市博物館「いつだって猫展」（二〇一五年四月二五日～六月七日）等があり、さらにこれらの巡回展を含めれば、二〇〇〇年代初頭、すなわち平成の後半は、日本全国「猫だらけ」「ねこづくし」「猫がいっぱい」「猫まみれ」「いつだって猫」等々、とうてい数えきれないほどの「猫展」がいつもどこかで開かれている、といったような状況が出来していたのである。

こうした「猫展」でよくお目にかかるのは、江戸時代の浮世絵、それも当代きつての人気絵師だった歌川国芳（一七九八～一八六一）とその弟子たちの作品であろう。国芳が無類の猫好きであったことはあまりに有名な話だが、かといって、さすがの国芳も猫の絵ばかり描いていたわけではない。武者絵、役者絵、美人画、風俗画、戯画、春画等々、当時の絵師たちがそうだったように、国芳も求めに応じてどのようなジャンルでも描いた。中でも国芳が最も得意としていたのは、そして当時最も人気があったのは、やはり大胆な構図と躍動感に満ちた武者絵であろう。国芳は一九九六年の生誕二〇〇年、さらにまた二〇一一年の没後一五〇年と、比較的近い時期に国内外で大規模な展覧会が開催され、これまでになく認知度・注目度が高まっているところだが、中には各種「猫展」によって、はじめて国芳を知った、

あるいは浮世絵の魅力に目覚めた、という人たちも少なくないのではなからうか。いずれにしても、国芳ファン、浮世絵ファン、あるいは美術愛好家の裾野拡大に、こうした「猫展」が大なり小なり寄与していることは間違いないものと思われる。¹⁵⁾

さて、二〇一九年一月一日と二〇日の両日、本学で大学祭が行われた。同年は、五月に今上天皇の即位・改元が行われ、かつ本学としても四年制大学になって開学七十周年という節目の年であった。我が日本文学科ではこの記念すべき年の大学祭に、学科の特別企画として「にちぶん猫展だヨ！全員集合」という展示を行った。

筆者もかつて猫を飼っていた、それゆえ猫という存在に、犬よりは親近感があり、かつまたことなく心魅かれるものを感じていた、とはいうものの、学問的なテーマとしてはあまり意識していなかった。しかし、たまたま同年、仙台市博物館で東日本初となる「いつだって猫展」(二〇一九年四月一日～六月九日)が開催され、連日大勢の来場者を集めていたこともあって、「見る」だけではない、「読む」猫展があってもいいのではないか、あるいは、これほど多くの人に愛されている「猫」たちを案内人にすれば、文学、ことに一般にはなじみが薄く、小難しくハードルが高いと思われるがちな古典文学の世界に親しんでもらうきっかけ作りができるのではないかと考え、この企画展に取り組んだのであった。¹⁶⁾

二〇一九年の「にちぶん猫展」は、古代から近世までの古典文学(歌舞伎や浄瑠璃等、古典芸能を含む)の中に登場する猫

たちを時代順に並べ、これらを一般来場者や学生向けに、あるものは原文、あるいは現代語訳と、硬軟取り混ぜて、わかりやすく紹介するという方針を立てた。が、それだけではどうしても文字だけになってしまう(いや、もともと「読む」猫展なのだが)。そこで、会場には幕末から明治にかけて盛んに制作された浮世絵やおもちゃ絵等、筆者架蔵の資料(むろん大した作ではないが、やはりコピーやデジタル画像と違って本物・現物の力は侮りがたい)を展示して、来場者に楽しんでもらうことにした。また、それとともに、学生たちや教職員に呼びかけ、「にちぶん猫展」のために自慢の猫写真を投稿してもらった。これらをプリントし、盛大に展示して、来場者が自分たちの猫の「晴れ姿」を見に来る：ついでに、いろんな猫たちに出会い：ついでに文学の中に描かれた猫たちにも触れてもらう、というスタイルを取り入れた。ありがたいことに、反応も上々で、古典文学の世界にもこんなに猫がいたのか、という新鮮な驚きをもって迎えられた。

「にちぶん猫展」そのものは大学祭の二日間を終了したが、資料調査はそう簡単には終わらなかった。そもそも特定の時代や作家に限定した作業ではなかったため、(そんなことは最初から分かっていたことではあるが)個人で取り組むには限界があったのである。特に時代が下って近世になると、資料が激増する。しかも、近世という時代は文学・美術・演劇(芸能)が相互に連絡・影響し合い、これらが今でいうところのメディア・ミックス的な展開をしはじめるので、リニアな(文字・文章

だけの)文学史をイメージしていると見えなくなってしまう部分がある。とうてい一人ではカバーしきれない内容と分量である。それでも、一度手をつけた以上、中途で放り出すことはできない。何とか全体像が見えるところまで歩みを進めよう。そう考えてここまでやってきたが、一方、調査が終わるのを待っている、ついに発表の機会は訪れない。そこで今回、内容不十分なが、資料編だけでも少しずつ発表しておこうと考えた次第である。

それにしても、猫というのはいささか不思議な存在である。日本で飼育されているペットのトップが犬と猫であるとして、しかし、犬と猫とは何かが大きく異なっているように思われる。

犬は五大昔話に数えられる「桃太郎」や「花咲爺」にも登場し、日本人にとっては古くからなじみのある動物である。いや、なじみがあるどころか、多数の考古学的な成果(埋葬例)によって、犬たちは縄文時代の早い時期から私たちの祖先とともに暮らしてきたことが知られている。これは主に猟犬として活躍していたようだが、犬という動物は家畜の中でもとても賢い動物だし、何より主人に従順、忠実。危険な任務も果敢にこなし、人の役に立つことこの上ない「益獣」である。いや、猫だってネズミやモグラを捕るけれど、猟犬、番犬、盲導犬、麻薬捜査に災害救助、どんな分野もオールマイティにこなせるお犬様にはとうていかなうまい。だからこそ犬たちは、八千年も前から

人の暮らしに寄り添い、特定の任務を帯びた使役犬としてはもちろんのこと、ペットという名の「家族の一員」としても長らく主役の座を維持してきたのであろう。だがしかし、犬には猫のような「不思議さ」はない。犬のことを「なんだか変なやつだなあ」「不思議なやつだなあ：」としみじみ思う人も、まずあるまい。

だがそれは犬たちのせいではない。犬たちが私たちにとって「不可思議な存在」でなかったとしても、それは犬たちの落ち度ではない(当然ですわ)。そう思うのはあくまで私たちの問題だからである。ひるがえって猫のことを考えると、どうも猫たちには「世の中の役に立つ」とか「立たない」とか、実用性や有用性などといった切り口が通用しないところがある。だいたい猫を訓練して何かをさせよう、麻薬捜査猫や災害救助猫を育ててみよう、などという話は聞いたことがない(たぶん無理だろう)。仮に猫たちに「癒される」と思う人たちが大勢いたとしても、それは私たちが勝手に癒されているだけの話で、猫はセラピー犬のように特別な訓練を受けているわけでもないし、悩み多き人々を助けたいとか、困っている人々を見逃さずすることはできない、といったような使命感も責任感もおそらく持ち合わせてはいない。そんなものとは生来無縁で生涯無縁の、しかし人間にとって最も身近な動物の一つ、それが猫という生き物である。

そこで私たちは考える。いったい猫たちはなぜこんなにも人々を魅了するのだろうか。いや、私たちはなぜこんなにも猫た

ちに魅了されるのだろう。それは、猫たちが「かわいい！」からである。猫好きの人たちに聞けば、みなそう答えるだろう。そして、「かわいいものに理由なんてありません！ 説明不要！ 証明おわり！」と言われてしまうかもしれない。

むろん、そういう気持ちもわからなくはないが、私は、猫だつてただだんに「かわいい」だけではないのではないか、とも思ふのである。いやそもそも、「ただだんに」かわいい、などというものはこの世に存在しない、という考え方もあるだろう。すでにいくつかの論考があるように、「かわいい」は意外に奥が深いのである。

筆者としては当面（というか今後も）、キティちゃんやゴスロリ、あるいはなんちゃって制服等々、現代日本が世界中に広めた「かわいい！」ものたち、その価値・観念・文化的意義について真正面から論じる予定はないが、猫が「かわいい！」かどうかは、猫自身の問題という以上に、そう思ってしまう私たち自身の問題であり、現代の日本がまさに空前の猫ブームだとするならば、それはすぐれて現代社会のありように直結した、まさに今日的な問題であろうと考えている。

いや、話が大きくなりすぎたようだ。ここでちよいとばかり猫という存在の魅力、あるいは不思議さについて個人的な話をさせていたきたい。

私はまだ幼いころの話である。我が家で最初に飼った動物は大だった。犬種はスピッツである。スピッツも高度成長期の一時期、たいへんなブームだった。私たちはその犬を「タロウ」

と呼んでいた。オスだった。しかし、当時の私は小さすぎて、犬の世話をした覚えも、いっしょに遊んだ記憶もあまりない。その犬がその後どうなったのかもよく覚えていない。これに対して猫のほうは、私がもう少し大きくなってから我が家にやってきた。もとはどこかの飼猫だったようだが、しょっちゅううちに遊びに来るので、家族の誰かが庭先でエサを与えているうちに、いつの間にか家の中にあがりこみ、数度の攻防戦を経て、ついに我が家に居ついてしまった、そういう猫だった。私たちはその猫のことも「タロウ」と呼ぶようになった。「二代目」タロウである。正直、犬でも猫でも、オスでもメスでも、私たちはあまり気にしなかった。もともとうちの猫ではないので、さしたる思い入れもなく、とりあえず付けた呼び名だったからである。これは江戸時代、下働きをする下女たちを当人の本名に関係なく「おさん」と呼んだ、という風習や感覚に近いかもしれない。それはともかく、うちの猫の場合、家族の誰かが「猫を飼おう」と思つて飼つた（あるいは買った）のではなくて、むしろ猫のほうが私たちを選び、私たちのほうはそれを、最初は戸惑いつつ、後はもうしょうがないよなあ……とあきらめ、受け入れるかたちで付き合いが始まったのだ。

だから我が家では彼女に対して「ペット」という意識はあまりなかった。人と犬のような、いわゆる「御恩と奉公」のごとき主従関係でもない。あるいは、犬であれば子どもたちのよき遊び相手として仲間・友人・相棒といった意味の「パディ」となる場合もあるが、そういう関係でもない。昨今のペット事

情を考えると、飼育している動物たちを自分たちの「家族」と考えている人が多いかと思われるが、私個人はそれとちよつと違っていたような気がしている。あえて言えば「同居人」というべきか。今はやりの言葉を使えば「ルームシェア」である。むろん、家族といつしよに暮らすことを「ルームシェア」とは言わない。それは、赤の他人と何らかの合意を形成し、一定期間一つ屋根の下で暮らすことであり、これが恋人同士であれば「同棲」だが、「ルームシェア」はそれとも違う。何らかの理由で同居はしているが、メンバーには一定の距離感がある。

そういえば、我が家では猫にトイレトレーニングを施した覚えがない。彼女は我が家に来た時はすでに「大人」で、家の中で粗相をしたこともない。したくなれば外に出たいと訴え、戸を開けてやると外に出て、人知れず済ませてくるらしかった。そこで我が家では、猫がいつでも好きな時に出入りできるように、わざわざ勝手口を加工して猫用の出入口を作った。内側にもう一枚引き戸を設置して（これもわざわざ）、風除室を作つてである。

猫というものは、一般にそういうものかもしれないが、それが飼主であっても、人とズルズルベッタリの関係は望んでいないようだったし、私たちも猫の後を追いかけて、わざわざ猫じゃらしで遊ぶ／遊ばせるようなことはなかった。「おなかすいた」「外に出たい」「うちに入れて」。アクションはいつも猫のほうから行われ、私たちはその要求に耳を貸すだけでよかつた。ドアはさすがに難しいが、襖や引戸であれば自分で開けて

しましうし（後ろ脚で立ちながら）、寝る時は誰かの布団の上に乗つてきたり、寒ければ布団の中にもぐりこんでくる。だが、それもあくまで向こうの自由意志であり、私たちには選択権もなければ、無理強いもできない（したところで逃げていく）。日々一緒に暮らし、一定の場と時間を共有しつつ、しかし猫には猫の世界があり、私たちには私たちの暮らしがある。お互い、付かず離れずで、それでいながら、たしかな絆と信頼関係があった。むろん猫に確かめたわけではないが……。それでも、向こうは私たちのいうことは全部わかっているようだった。もうどうの昔に亡くなつてしまつたが、美人で、知的で、身のこなしが何とも優雅で、「聡明」という言葉がふさわしい、そんな大人っぽい猫だった。

いや、猫は猫である。家の柱で爪とぎはするし、カーテンは破くし、ほめてほしくて（決して食べるわけではない）ネズミやモグラをつかまえてくることもあった。だが、これは大方に支持されるのではないかと思うけれど、猫は私たちがいつしよに暮らす生き物としては、数少ない「コミュニケーションが成立する」動物であろうと思われる。そしてまた、猫たちには、犬にはない、ある種の「人間らしさ」（あるいはそのように想像させる「何か」）がある。猫というのは、たまたま「猫」の姿をした「人」なのではないか、と感じる時さえある。猫よ、いったいお前さんは何者なのか？ つくづく不思議な存在ではある。

閑話休題。先に述べたように、本稿の元になっているのは二〇一九年の「にちぶん猫展」用に作成したものであり、講義・講演等の資料として活用することも考慮して、学生向け、あるいは一般向けの内容になっている。作品は比較的入手しやすいもの、また文学史的に重要と思われるものを中心に取り上げた。その配列も基本的に時代順・成立順になっている。作品本文は、小学館の「新編日本古典文学全集」所収作品であれば、基本的にこれを用いることとし、いちいちの出典は省略した。したがって、出典の記載のある作品は「新編日本古典文学全集」未収録作品ということになる。

掲出本文は、先述のごとく学生向け・一般向けであることを意識して、原文そのままの場合もあれば、私に現代語訳したもの、あるいは梗概や大意を示すに留めたものなど、さまざまである。いずれの場合も、通読の便を考慮して、章段に見出しをつけたり、語句・文脈の理解に役立つよう括弧書きで説明を補ったり、読み仮名を振ったり、原文平仮名表記に適宜漢字をあてするなど、私に手を加えている。

本稿のタイトルは夏目漱石の『吾輩は猫である』にあやかっ
て、「吾輩も猫である」とした。通常の学術論文らしからぬ題
名だが、まずは、より多くの人々に、こんなところに猫がいる、
あんなところにも猫がいる、と気づいてもらいたい。そうして、
猫を通して古典文学に親しんでもらいたい。そう考えてのネー
ミングである。⁵⁾

以下、本稿では岡田章雄『犬と猫』（毎日新聞社、一九八〇・

三)、田中貴子『猫の古典文学誌——鈴の音が聞こえる』（講談社／講談社学術文庫、二〇一四・一〇。原著は二〇〇一年、淡交社刊）、鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史——日本人の自然観』全四巻（三弥井書店、二〇一四・二〇二二・九）、谷真介『猫の伝説11話』⁶⁾（梶社、二〇一三・三）、藤原重雄『史料としての猫絵』（山川出版社／日本史リブレット、二〇一四・五）、桐野作人『猫の日本史』（洋泉社／歴史新書、二〇一七・一）、今井秀和『世にもふしぎな化け猫騒動』（KADOKAWA／角川ソフィア文庫、二〇二〇・七）等々、種々さまざまな先行研究に導かれつつ、一般的な文学史の時代区分に従って、古代・中世・近世に分け、まず「古代文学編」と「中世文学編」を掲載する。また、ごく一部だが、古辞書において猫がどのように記述されているかについても確認しておこう。なお、この後に続く「近世文学編」は、それこそ筆者の本丸とすべき時代だが、現時点ですでに今回掲出資料の五倍以上の分量があり、まだまだ取り上げるべき作品も多い。あるいはまた、これは古典文学の範疇を超えてしまうが、前近代の遺産を多分に受け継いだ大正・昭和期の映画史にも看過できない作品が多数ある。もとより際限のない作業ではある。ここに掲出したものも、膨大な文学史的遺産のごく一部にすぎないことをお断りしておく。

ではこれから、日本文学史（古典）のそこかしこに身をひそめて、可愛らしくも妖しい猫たちを追跡・探索し、一時⁷⁾とも戯れてみることにしよう。

(1) 一般社団法人ペットフード協会公式ウェブサイト「沿革」参照。
<https://petfood.or.jp/outline/history/index.html>

(2) NHK放送文化研究所・世論調査部編「日本人の好きなもの」データで読む嗜好と価値観（日本放送出版協会／NHK出版生活人新書、二〇〇八・一）によれば、好きな動物の第一位は「犬」六三・三％、第二位が「猫」三三・九％、第三位が「イルカ」二八・二％であった（選択肢五二項目からの複数回答）。この時の調査では、全国の一六歳以上の国民三六〇〇人を対象に、計五四項目にわたって「あなたの好きなもの」を尋ねた（回答が得られたのは二三九四人）。その「調査結果から浮かびあがった日本人の好みを端的に表現すると」、「犬連れて、桜を愛でて、すしを食う」という。しかもこれらは「多くの人が答えたというだけでなく、男女や年齢層による差が少なく、幅広く好まれていました」とある。おそらく「桜を愛でて、すしを食う」については今もあまり変りないのではないかと思われるが、それから十年余りで「犬連れて」のところだけが変わってしまったようである。

(3) 宮本勝弘「ネコノミクスの経済効果」によれば、その経済効果は二〇一五年一年間で約二兆三二二億円であると試算されている（関西大学プレスリリース、二〇一六・二・五）。

(4) 一般社団法人ペットフード協会が毎年行っている「全国犬猫飼育実態調査」によれば、犬・猫とも飼育頭数のピークは二〇〇八年度で、当時犬が一三二〇万一千頭、猫が一〇八九万頭であった（いずれも推計値）。<https://petfood.or.jp/data/chart2008/04.html>
その後、猫は微減、ないしほぼ横ばいを維持したが、犬は急速に

減少し、二〇一七年度には猫の飼育頭数が初めて犬の飼育頭数を上まわった（犬：八九二万頭、猫：九五二万六千頭）。<https://petfood.or.jp/data/chart2017/3.pdf>

そして二〇二〇年度の調査では、犬：八四八万九千頭に對して、猫：九六四万四千頭という結果が出ている。<https://petfood.or.jp/data/chart2020/3.pdf>

(5) ネットを中心に活躍しているジャーナプロガー、不破雷蔵「犬と猫、どちらの専門誌がよく売れているのか：犬猫系雑誌の部数動向をさぐる（二〇二〇年四～六月）」は、印刷証明付き部数が確認できる唯一のペット専門誌としてベネッセの「いぬのきもち」と「ねこのきもち」を取り上げ、その発行部数動向を検証している。同氏によれば、「いぬのきもち」は二〇〇九年に約一六万部でピークに達した後、急速に部数を減らし、二〇一六年には「ねこのきもち」に追い抜かれ、二〇二〇年現在七万部弱と減少傾向が続いているが、「ねこのきもち」は二〇一〇年に約一十一万部でピークを迎えた後、同じように減少傾向をたどるものの、その傾きはゆるやかで、二〇二〇年現在八万部弱にとどまっている。

<https://news.yahoo.co.jp/byline/fuwarai/20200827-00195087/>
(6) 赤川学「猫ブームの理由——飼主との間にある独特な関係性とは」FEATUERS、二〇一八・一・一六（初出『東京大学広報誌 淡青三七号』特集「猫と東大」二〇一八・九）。https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/features/z1304_00007.html
後に東京大学広報室編「猫と東大。——猫を愛し、猫に学ぶ」（ミネルヴァ書房、二〇二〇・一）に収録。

なお、真辺将之『猫が歩いた近現代——化け猫が家族になるまで』（吉川弘文館、二〇二二・五）は歴史学の立場から明治以降現代にいたる「近代・現代における猫の歴史」を記述したものであり、近年のいわゆる「空前の猫ブーム」についても冷静で客観的な視線を投げかけている。その点、「巷に溢れる俗流『猫の歴史』記述」（同書）とは一線を画すものといえよう。

(7) 北洋祐「どこを向いても猫だらけ——日本の猫ブームを考える」二〇一七・八・八、ニッポンドットコム。https://www.nippon.com/ja/currents/d00344/
 阪根果実「広がる『猫ブーム』に潜む危うさとは？」『読売新聞』

二〇一八・一・七。https://www.yomiuri.co.jp/tokayomi/20171228-0Y78T50000/

(8) 問題は、デジタル技術を活用した高度情報化社会では、いったん共感・同調・模倣の拡大再生産が始まると、それが社会的に好ましいことであれ、好ましくないことであれ、しばしば抑制が効かなくなる場合がある、という点にあるが、それは本稿のテーマではない。

(9) ウィキペディア「猫カフェ」の項参照。
 https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8C%A%B%E3%82%A%B%E3%83%95%E3%82%A7

(10) 環境省中央環境審議会動物愛護部会第42回（二〇一六・三・一開催）会議資料2-3「猫カフェ業界の現状と猫カフェ協会による取組について」
 https://www.env.go.jp/council/14animal/y140-42_mai04.pdf

(11) 朝倉無声『見世物研究』（筑摩書房）ちくま学芸文庫

二〇〇二・二。原著は一九二八年四月、春陽堂から刊行

(12) 若尾謙二『動物園革命』（岩波書店、二〇一〇・二二）

(13) ただし、江戸期の花鳥茶屋があくまで「珍しき」を売り物にした「見世物」だったのに対して、現代の猫カフェおよび猫ブームは「珍しき」や「新しさ」ではなく「かわいい！」に牽引、駆動されている点が大きく異なる。

(14) たとえば、平木浮世絵財団の「にゃんとも猫だらけ展」の図録（二〇二二・一）を見ると、国芳の掲載作品は六三三点で最多。次点は国貞（三代豊国）の二〇点である。あるいは、名古屋市博物館の「いっだって猫展」の図録（二〇一五・四）も、最多はやはり国芳で五〇点、次点は国貞（三代豊国）一四点である。その他、「アートになった猫たち展」の公式書籍である『アートになった猫たち——今も昔もねこが好き』（青月社、二〇一七・四）は、全体として多様な作家がバランスよく収録されているように思われるが、それでも最多は国芳で二〇点、次点は楊洲周延（ちのぶ）の二二点、さらに竹久夢二（八八点）、三代豊国（七〇点）、芳藤と芳年（ともに六〇点）と続く。

(15) これはあくまで一例に過ぎないが、山梨県立博物館の「すぢさぎるーねこ展——ヒトとネコと出会いと共存の歴史」（二〇一九・七・二二〜九・二）は美術資料のみならず古文書や考古資料等を交えた、博物館ならではの総合的な企画展で、来場者が三万人を突破する人気ぶりだったという。

http://www.museum.pref.yamanashi.jp/3nd-tenjiamai_19okubeisu002_3man.html

(16) 「にちぶん猫展だヨ！」にはもともととてつという狙いがあったので、

企画展の名称に「日文（だから）ね、（やっぱり）古典だよ」というメッセージを忍ばせてあるが、もちろん来場者が気づいたかどうかは定かではない。

(17) 山田康弘「縄文時代のイヌ——その役割を中心に——」（比較民俗研究会『比較民俗研究』9、一九九四・三）

(18) 四方田犬彦は、『「かわいい」論』（筑摩書房／ちくま新書、二〇〇六・一）の中で、「きもかわ（きもかわいい）」の分析から次のような見解を導いている。

気味が悪い、醜いということと、「かわいい」こととは、けつして対立するイメージではなく、むしろ重なりあい、互いに牽引し依存しあつて成立しているモノなのである。これは逆にいえば、あるものが「かわいい」と呼ばれるときには、そのどこかにグロテスクが隠し味としてこっそりと用いられていることを意味している。（中略）わたしは本章の冒頭で、「かわいい」が「美しい」の隣人であると記したが、この言葉は厳密に訂正をしなければならないだろう。すなわちグロテスクであること、畸形であることこそが「かわいい」の隣人なのだ。両者を隔てているのは実に薄い一枚の膜でしかない。だがその観念的な膜に保護されているがゆえに、「かわいい」は親し気で心地よいものとして肯定的に受け留められ、その膜の外部に置かれているがゆえに、「醜い」「きもい」は脅威的で不安と不快感をもたらすものとして忌避される運命となる。何かの偶然でこの膜が破損したとき、われわれの日常生活において思いもよらぬ事件が生じることは、子殺しやペット遺棄の例からも明らかである。

そのときわれわれは「かわいい」と信じきっていた赤ん坊や動物が、実は自分が無邪気に抱いていた人間という観念を危うくさせる他者であるという事態に直面して、パニック状態に陥ってしまうのだ。そして「きもかわ」とは、この二つの世界の境界領域において生起する事件であり、それを通してわれわれが「かわいい」なるものの本質を垣間見ることが出来る稀有の状況であると、ひとまず結論することが出来るだろう。

（同書第四章「美とグロテスクの狭間に」）
四方田はまた、「かわいい」は「つねに傍げなものであり、ヴァルネラビリティ（引用者注：弱く傷つきやすいこと、あるいはそのよくな人、もの、状態）に満ちた存在である。それはまったくの偶然から、たやすくグロテスクで脅威的な怪物へと変身してしまう。」とも述べている（同書「エビローグ『かわいい』の薄明」）。

あるいは、櫻井孝昌『世界カワイイ革命——なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』（PHP研究所／PHP新書、二〇〇九・一）もまた、「カワイイ」には、たとえばファッションにおけるゴシックとロリータ、あるいはパンクと制服など、本来、対極にあるようなものをまとめる力があり、「なんだかわからないもの」やゾンビですら「カワイイ」になる。「カワイイは、もはやいろいろの意味をもっている。本来の言葉の意味を大きく超えた、日本がつくり出した新たな概念と理解すべきなのだ。」と述べている（同書第5章「不況脱出の切り札は『カワイイ』にある」）。

(19) 阪神淡路大震災や東日本大震災などの大規模な自然災害に直面し、またバブル崩壊後の長期的な不況とそれにとまなう社会構造の劇的

な変化・変動・変革を経験してきた二世紀初頭の日本は、ありとあらゆるものに「カワイイ！」のラベルを貼り付け、「カワイイ！」ものに取り巻かれ、心身ともに癒されたがっているように見える。が、さしあたり本稿はそうした問題には立ち入らなない。

(20) ちなみに、猫を屋外に出さなくなった平成以降は、あまりこういう事例はなさそうだが、昭和期はさほど珍しくなかった。この点について、獣医外科学が専門の西村亮平は、「猫はペットとして今や最も数が多いのに、犬などとは異なり、家畜」の定義に当てはまらない要素をいくつも持つ、ある意味奇妙な存在でした。家畜はその個体や繁殖が完全に人の管理下にあるものとされますが、これまでの猫たちは勝手気ままに外を歩出し、繁殖もほとんどの猫が人間の管理外にあるという状況でした。」これに対して、近年の「完全室内飼いへの移行は猫の歴史上初の出来事でしょう。」と述べている（前掲『猫と東大』所収「猫好き4教授座談会」）。

このことはまた、より大きな問題に結びついている。近現代社会経済史が専門の小野塚知二は、「世界は、野良猫のいる社会といない社会とに二分できます。現在、野良猫のいない地域は、極地や砂漠など猫が生存できない自然環境を除くなら、野良猫を人為的に消滅させた社会です。」と述べる。歴史的に見れば、猫たちは「人の環境にいながら、人からは相対的に自立して自由に歩き回り、餌を獲得する」という野良猫の状態」が一般的で、誰にも飼育されていない完全な野良猫や、誰かの飼猫でありながら自由に外を歩き、「他の猫と交際し、餌（小動物）を捕獲する、いわゆる半野良も野良猫の範疇に含まれる」とするならば、「家畜化されてからのほとんどの期

間を、野良猫として存在してき」た猫たちを、イギリスやドイツのように人為的に消滅させ、人の保護管理下におき、非野良猫化してしまうことがいったいどのような意味を持つのか、考える必要があるのではないかと説く。この点まさしく氏が指摘するように、「野良猫は人と社会を映し出す鏡なのです」（前掲『猫と東大』所収「野良猫のいる社会とない社会——生殖の統御は完全に正当化しうるか？」）。

(21) 校正の最終段階になって、「吾輩も猫である」という同名書籍のあることを知った。二〇一六年、雑誌『小説新潮』が漱石没後百年記念として企画した、赤川次郎・新井素子ら、八名の猫好き作家によるアンソロジーである。もっぱら古典文学ばかり追いかけていて、近刊にこうした書籍のあることを知らなかったのはうかつだったが、同書や本稿のような、いわば『猫である』の知名度に便乗した「あやかりタイトル」「あやかり作品」は他にも多数確認されている。特に『吾輩は猫である』というタイトルは、構文的にはシンプル、かつ現実的にはナンセンスな文なので、これを真似て、あるいは応用していろいろ作ってみたくなるのであろう。『猫である』の「擬態本（パロディ）」を徹底的に調査した榊原鳴海堂「漱石擬態本詳細書誌」（小田切靖明・榊原鳴海堂「夏目漱石の研究と書誌」ナダ出版センター、二〇〇二・二七）によれば、本家『猫である』完結後、最初に出たのも『吾輩も猫である』という作品であった。これはこれで、享受史の一角マとして興味深いテーマかと思われるが、いまはこれ以上深追いしないでおく。

吾輩も猫である

——日本文学史の中のネコたち

【古代文学編】

仏教説話集

景戒『日本国現報善惡靈異記』

平安時代初期（九世紀末）成立

○生まれ変わるなら…、やっぱりネコがいいかも

慶雲二年（七〇五）九月十五日、膳臣広国（かむらひのひろくに）という者が死んだ。が、三日後に蘇生。冥界で妻と、三年前に死んだ父に会ってきたという。妻も父もそれぞれ生前の報いにより、からだに鉄の釘を打ち込まれたり、鉄の縄で縛られたり、鉄の鞭で朝に三百、昼に三百、夜に三百回打たれたりして、たいへん苦しんでいた。（この後の妻のくだりは省略）

さて、父が言うには、死後、飢えに苦しんで三度も息子（広国）の家を訪ねた。最初は七月七日、大蛇の姿で行った。すると杖で引っかけられ、うち捨てられてしまった。二度目は五月五日、今度は赤い狗（いぬ）になって行ったら、他のイヌをけしかけられ、とにかく逃げ帰った。三度目は正月元旦に狸（ねこ）（十世紀の写本、興福寺本『靈異記』は「狸」と書いて「ねこ」と訓注）になって訪ねていった。そうしたら、なんと今度はいろいろ食べさせて

てもらえたので、ようやく三年来の飢えから解放された。だがしかし、自分は生前に犯した罪のため、残念ながらまた赤いイヌになって食べ物をあさることになるのだらう…。息子よ、どうか私のために仏像を造り、経文を写し、供養しておくれ。亡父は広国にそう語ったという。

（上巻、非理に他の物を奪ひ悪行を為し報を受けて奇しき事を示しし縁【第三〇】）

*『日本靈異記』は南都（奈良）薬師寺の僧景戒（かいかい）の手になる日本最古の仏教説話集（原漢文）。同じ話が『今昔物語集』巻第二〇「本朝付仏法」第一六一「豊前国膳広国行冥途帰来語」に収録されている。

日記

宇多天皇『宇多天皇御記（寛平御記）』

平安時代初期（九世紀末）成立

○うちのネコは特別なんです

六日。朕閑時述猫消息曰。驪猫一隻。太宰少貳源精秩満朝所献於先帝。愛其毛色之不類。余猫猫皆浅黒色也。此独深黒如墨。为其形容恶似韓盧。長尺有五寸高六寸許。其屈也。小如粒。其伸也。長如張弓。眼精品爰如針芒之乱眩。耳鋒直豎如匙上之不揺。其伏臥時。团円不見足尾。宛如堀中之玄壁。其行歩

時。寂寞不聞音声。恰如雲上黑龍。性好道行暗合五禽。常低頭尾著地。而曲脊背脊高二尺許。毛色悅沢蓋由是乎。亦能捕夜鼠捷於他猫。先帝愛翫數日之後賜之于朕。朕撫養五年于今。每旦給之以乳粥。豈嘗取材能翹捷。誠因先帝所賜。雖微物殊有情於懷育耳。仍曰。汝含陰陽之氣備支躰之形。心有必寧知我乎。猫乃歎息举首仰睨吾顏。似咽心盈臆口不能言。

(寛平元年(八八九)二月六日の条)

【大意】

今日は時間があるので猫のことを書いておく。朕は一匹の黒猫を飼っている。この猫はもともと、以前太宰少貳(大宰府の次官)であった源精が任期満了で大宰府から帰朝・帰洛の折、先帝光孝天皇に献上したものである。その毛並み、毛色は無類で、他の猫どもの毛色がたいいてい浅黒いのに対して、この猫だけは墨のように真黒である。まるで中国春秋戦国時代にいたという「韓廬かんろう」という名の黒毛の獵犬(しかも俊足で賢い)のようだ。大きさは一尺五寸(約45センチ)、背の高さは六寸ばかり(20センチ程度)。体を丸めると小さくなって、まるで黒黍のよう。大きく伸びをすると、まるで弦を張った弓のように立なる。その眼は針がキラキラきらめくように光り、耳は匙を立てたようにびしっと立っている。伏している時はくるんと丸くなって足も尾も隠れている。まるで岩屋の中に鎮座する黒い寶石のようだ。また、歩く時は静かで足音も聞こえない。まるで黒い龍が雲の上を行くかのごとくである。呼吸は深く、その動

きは五禽(虎・鹿・熊・猿・鳥)にも通じる。いつもは頭を低くし、尾を地につけて歩くが、背を大きくそびやかすと高さ二尺あまりにもなる。毛色は艶やかで素晴らしく、またよく鼠を捕る。他の猫より動きが素早いのだ。この猫はもともと先帝に献上されたものだが、数日愛玩ののち、私に下されたものである。以来五年、毎日乳粥を与えている。でもそれは、この猫が他のどんな猫にもまして優れているから…ではなくて、先帝御下賜の猫だから。だから、それがどんなに小さな生き物でも大切に育てているだけである。そんなわけで、私は猫に尋ねてみた。「お前は、陽の気も、陰の気も、からだも手足も、何もかも備わっているのだから、きつと私の心だつてわかつているのだろうね。」だが、猫は何も答えず、ため息をついて首をあげ、私の顔を見上げるのだった。

* 『宇多天皇御記』本文は(増補史料大成)『歴代宸記』(臨川書店、一九六五・八)に拠る。

日記・随筆

清少納言『枕草子』

平安時代中期(一一世紀初頭)成立

①ねえねえ、かわいくない？

猫は、上のかぎり(背中だけ)黒くて、腹いと白き。

(第五〇段「猫は」)

②ねえねえ、優雅じゃない？

なまめかしきもの、ほそやかに清げなる公達の直衣姿。(中略)薄様の草子。柳の萌え出でたるに、青き薄様に書きたる文つきたる。(中略)簾の外、高欄にいとをかしげなる猫の、赤き首綱に白き札つきて、はかりの緒、組の長さなどつけて、ひき歩くも、をかしうなまめいたり。

(第八五段「なまめかしきもの」)

③ねえねえ、…うーん、これ説明するの、ちよつと難しいかも

むつかしげなるもの(面倒なもの、うつとうしいもの、すつきりしないもの)、縫ひ物(刺繡)の裏。鼠の子の毛もまだ生ひぬを、栗の中よりまろばし出でたる。裏まだつけぬ皮ぎぬ(舶来の毛皮の着物)の縫ひ目。猫の耳の中。ことに清げならぬところの暗き。

(第一四九段「むつかしげなるもの」)

■ちよつと寄り道——『枕草子』のなかの犬たち

①私たち…、何か嫌われるようなこと、したんでしうか？

すさまじきもの、昼ほゆる犬。春の網代。三、四月の紅梅の衣。

(以下略)

(第二三段「すさまじきもの」)

にくきもの、いそぐ事あるをりに来て、長言するまらうど。あなづりやすき人ならば、「後に」とてもやりつべけれど、心はづかしき人、いとにくくむつかし。硯に髪の入りに磨られたる。また、墨の中に、石のきしきしときしみ鳴りたる。(中略)蚤もいとにくし。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにする。犬のもろ声に、長々と鳴きあげたる、まがまがしくさへにくし。開けて出で入る所、たてぬ人、いとにくし。

(第二六段「にくきもの」)

②ネコ可愛がりの一条朝で起きた、衝撃の動物虐待事件!?

一条天皇は飼っている猫に「命婦のおとど」という名を付け、(動物なのに)五位の位まで与え、乳母(世話係)まで添えてたいそう可愛がっていた。内裏にはまた「翁まる」という犬もいて、皇后定子の食事時には傍近く伺候し、桃の節供には頭に桃の花をさしてもらったり、かれこれ、犬も猫も人々から可愛がられていた。

ある日の朝、命婦のおとどが縁先に出て、じつとうずくまっ

ていた。それを見た世話係の馬の命婦（「馬」とあるがこれは人）が「まあ、命婦のおどつたら、お行儀が悪いこと。翁まろ、さあ、命婦のおとどに噛みついて、お仕置きしておやりなさい」と戯れた。ところが犬はお馬鹿さんだったので、命じられるままに猫に飛びかかっていた。びつくりした猫は御簾のうちに逃げ込んだ。帝はちようと朝食時で、この様子を御覧になつていた。帝は猫を懐に入れ、藏人たちを呼び「翁まろを懲らしめてやれ。そして犬鳥（と呼ばれるような収容施設でもあったか？）に連れて行け。今すぐにだ！」と命じた。

数日後、犬鳥に追いやられたはずの翁まろが御所に戻つてきた。藏人たちはまた無慈悲にも犬をつかまえて、二人がかりで打擲する。悲鳴を上げる翁まろ。清少納言は騒動を聞きつけ、乱暴を止めさせようと人を遣わすが、男たちは「もう死んだので捨てました」という。その日の夕方、全身ひどく腫れ上がった犬がぶるぶる震えながら歩き回る。「翁まろ？」と尋ねても反応しない。人々も、翁まろか、そうでないか、なかなか判断がつかない。いつもの翁まろなら、呼べば飛んでくるのに……。夜になって何か食べさせようと思つたけれど、犬は何も食べなかつた。

翌朝、例の犬はじつとうずくまっている。「翁まろはかわいそうなことをした。今ごろは何に生まれ変わっていることやら……」。ふとそんなことを口にしたら、例の犬がぶるぶる震えて涙をこぼすではないか。「やつぱり、翁まろなのね？」そう尋ねると、ひれ伏してひどく鳴く。……翁まろはその後、罪もゆ

るされて、また元通りの暮らしに戻る事ができたのだつた。

（第七段「うへに候ふ御猫は」）

*「命婦のおとど」という命名は、猫の鳴き声、あるいは「猫」の字音（苗字）に由来するのではないかと思われる。

*ちなみに、寺院において、仏像を安置しておく「内陣」と、人々（僧侶や参詣人）のいる「外陣」との境に背の低い柵が置いてあつた。これを「犬防ぎ」という。すなわち、平安時代における犬の位置付けはかようなものであつた、ということだろう。

日記

藤原実資『小右記』

平安時代中期（一〇世紀末～一一世紀初頭）成立

○いくらネコ好きでも、ちよつとやりすぎ？

九月十九日戊戌（ぼつご） 日者内裏御猫産子、女院、左大臣、右大臣（藤原）、有産養事、有衝重院飯、納宮□□云々、猫乳母馬命婦、時人咲之云々、奇恠之事、天下以目、若是可有徵歟、未聞禽獸用人礼、嗟乎、

（長保元年（九九九）九月一九日の条）

【大意】

長保元年（九九九）九月十九日、戊戌（つるぶ）の日。最近、内裏の御猫が子を産んだ。女院（一条天皇の母）藤原詮子、左大臣藤原道長、右大臣藤原顕光が産養い（祝賀の儀式）を行い、衝重（御膳）や堀飯（饗心）、箱に収めた□□（欠字）まで供されたとか。猫の乳母に馬の命婦（という名の女房）が指名されたという（笑）。とういてい理解を超えている。もしかすると何かよからぬ徴があるのでないか。禽獣の扱いに人の礼を用いるなどまったく前代未聞である。ああ、なんと嘆かわしいことではあるまいか：

*藤原実資（天徳元年（九五七）～永承元年（一一〇四六）の日記『小右記』（原漢文）は、天元五年（九八二）から長元五年（一〇三三）までの記事が現存している。同書によれば、『枕草子』にも出てくる一条天皇の飼猫「命婦のおとど」は長保元年九月生れ。当時、一条天皇とその周辺の度を越した猫可愛がりの様子は人々の笑いものになっていたらしい…。

*本文は（増補史料大成）別巻『小右記』一（臨川書店、一九六五・九）に拠る。合わせて倉本一宏編『現代語訳・小右記』3（吉川弘文館、二〇一六・一〇）も参考にした。

作り物語

紫式部『源氏物語』

平安時代中期（一一世紀初頭）成立

①運命の出会い…、きつかけはネコでした

夕霧や柏木が六条院の庭で蹴鞠をしていた時のこと、小さな唐猫が大きな猫に追いかけてられて、御簾から飛び出してくる。と、その首綱が引つ掛かり、御簾がめくれ上がってしまう。そして二人は、出会ってしまふ。

唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きな猫追ひつづきて、にはかに御簾のつまより走り出づるに、人々（御簾の内の女房たち）おびえ騒ぎてそよそよと身じろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしがましき心地す。猫は、まだよく人にもなつかぬにや、綱いと長くつきたりけるを、物にひきかけまつはれにけるを、逃げむとひこじろふ（引つ張る）ほどに、御簾のそばいとあらはに引き上げられたるを（びつくりして）とみに引きなほす人もなし。この柱のもとにありつる人々も心あわたしげにて、もの怖ぢしたるけはひどもなり。几帳の際すこし入りたるほどに、柱姿にて立ちたまへる人あり。（中略）猫のいたくなければ、見返りたまへる面もちもてなしなど、いとおいらか（おおじか）にて、若くうつくしの人やとふと見えたり。

（中略）

(すっかり女三の宮に心を奪われてしまった柏木は) わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いとかうはしくて(あの方の匂いがして) らうたげにうち鳴くもなつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや。

(第三四帖「若菜」上)

②あなたのネコは、ニヤンと鳴いてますか？

ますます女三の宮に恋心を募らせる柏木は、東宮を介して例の唐猫を借り受け、夜は抱いて寝るほどであった。周囲はそれを「妙なこと」と訝^{いぶか}しんだ。

(柏木はもともとそんなに猫好きではないのだが) つひにこれを尋ねとりて、夜もあたり近く臥せたまふ。明けたてば、猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。人げ遠かりし心もいとよく馴れて(最初は猫も人見知りをしたが今はよく馴れてきて)、ともすれば衣の裾にまつはれ、寄り臥し、睡るを、まめやかにうつつくしと思ふ。いといたくながめて(柏木が物思いに沈んで)、端近く寄り臥したまへるに、(猫が) 来てねうねうといとらうたげになれば、かき撫でて、うたでもすすむかな、とほほ笑^あまる。

恋ひわぶる人のかたみと手ならせば

なれよ何とてなく音なるらん

(私がこれほど恋して悩み苦しんでいるあの方の形見と

思つてかわいがつてみれば、猫よ、汝は何と鳴いているのか)

これも昔の契りにや、と(猫の) 顔を見つつのたまへば、(猫は) いよいよらうたげになくを、懐に入れてながめゐたまへり。御達^{ごたち}(年配の女房) などは、「あやしく、にはかなる猫のときめくかな。かようなるもの(猫のようなものなど、以前は全然) 見入れたまはぬ御心に」と咎めけり。

(第三五帖「若菜」下)

*『源氏』では猫の鳴き声は「ねうねう」、後述の『更級日記』では「なごう」と記されている。

③猫の夢を見ました

運命の出会いから四年、中納言になった柏木は女三宮の姉、二の宮を正妻に迎えるが、なお妹の三の宮への思慕の念を募らせ、ついには宮に仕える女房の小侍従に「あなたおほけな」(なんて大それたことを!) とたしなめられながら、それでも「ただ、一言、(思いの丈を) 物越しにて聞こえ知らすばかりは、何ばかりの御身のやつれにはあらん(どれだけ女三の宮の瑕疵になるでしょう)。神仏にも思ふこと申すは、罪あるわざかは」と訴え、小侍従からししぶ「もし、さりぬべき隙あらばたばかりはべらむ。」との約束を取り付ける。そして、その日がやって来た。四月の十何日か、賀茂祭の御禊^{みそぎ}を明日に控えて人々は

忙しそうにしている。小侍従は人の出入りが少ないことを見計らって、柏木を宮の寝所近くまで引き入れる。柏木に気付いた宮は動揺して人を呼ぶが、誰も来ない。その「わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色けしき、いとあはれにらうたげなり。」柏木は宮が思つたほど、気高くてこちらが気後れするような人ではなく、むしろ「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見え給ふ御けはひの、あてにいみじくおぼゆる思ゆることぞ」と思い、そうなること……

さかしく思ひしづむる心（女三の宮に対し、大それた、色めかしい振る舞いなど決してするまい、というような心）も失せて、いづちもいづちも（どこかに宮を）率て隠したてまつりて、わが身も世に経るたがさまならず、跡絶えてやみなばや（自分もこのまま行方をくらましてしまいたい）とまで思ひ乱れぬ。

この後、柏木が女三の宮に思いを遂げる場面があるはずだが、物語としては、すでに事終り、柏木がまどろんでいるところから飛ぶ。すると柏木は……

ただいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫（例の「ねうねう」と鳴いていた猫）のいとらうたげにうちなきて来たるを、この宮（女三の宮）に奉らむとてわが率て来たると思しきを、何しに奉りつらむと思ふほどにおどろきて（目が覚めて）、いかに見えつるならむ（なぜこんな夢を見たのだろう）

と思ふ。

この後、女三の宮は「いとあさましく、現うつらともおぼえたまはぬに、胸ふたがりて思しおぼほるる」茫然自失のありさま。柏木があれこれ話しかけても一言も口を利かず、ただ「悲しく心細くていと幼げに泣きたまふ」ばかり。こんな時に「ただ一言御声を聞かせ給へ」という柏木が何とも煩わしく、わなわな震えてばかりいると、柏木は「いとつらき御心につし心も失せはべりぬ（一言も口を利いてくれないあなたの冷たい仕打ちに私の正気も失せてしまいました）」などと言う。とはいえ、柏木にとつて、生身の宮をその腕に抱いたことよりも、その直後に見た「猫の夢」のほうがよほど印象的だったらしく、宮のもとを退出する際「あはれなる夢語ゆめごも聞こえさすべきを」（猫が出てくる趣深い夢の話を上あげたいと思つたけれど、今回はできなかつた。しかし「いま、思おもひあはすることもはべりなむ（いずれ思い当たるような節もあるやもしれません）などと言つてみたり、その後も夢に見た「かの猫のありさま」が恋しく、慕わしく思い出されるのであつた。

とはいえ、柏木とて自らのしたことを忘れているわけではない。「さていみじき過あやまちしつる身かな」。柏木は後悔の念と破壊への恐怖に恐れおののき、自らの寿命を縮める結果となる。

（第三五帖「若菜」下）

* 江戸時代初期の『源氏物語』の注釈書、中院なかの通勝とらかつの

『岷江入楚』^{みんじょうにっしょ}は、獣の夢を見ることを懷妊・懷胎のしるしとする。

日記・随筆

菅原孝標女『更級日記』

平安時代中期（一一世紀中ごろ）成立

○ニヤゴニヤゴ、ニヤゴーンと鳴くあのネコは、

もしかして、大納言様の姫君ではニヤイかしら？

花の咲き散る折ごとに、乳母^{めのと}亡くなりし折ぞかし、とのみあはれるに、同じをり亡くなりたまひし侍従の大納言の御むすめの手を見つつ、すずろにあはれるに、五月ばかり、夜ふくまで物語を讀みて起きるたれば、来つらむ方も見えぬに、猫のいとなごう鳴いたるを、おどろきて見れば、いみじうをかしげなる猫あり。いづくより来つる猫ぞ、と見るに、姉なる人「あなま、人に聞かすな。いとをかしげなる猫なり。飼はむ」とあるに、いみじう人馴れつつ、かたはらにうち臥したり。尋ぬる人やあると、これを隠して飼ふに、すべて下衆^{げしやう}のあたりにも寄らず、つと前にのみありて、物もきたなげなるは、ほかさま（他所）に顔をむけて、食はず。

姉おとと（姉と妹のこと）の中につとまはれて、をかしがりらうたがる（可愛がる）ほどに、姉のなやむこと（病氣）あるに、もの騒がしくて、この猫を北面^{きつめん}にのみあらせて呼ばねば、かし

がましく鳴きののしれども、なほさるにてこそはと思ひてあるに、わづらふ姉おどろきて、「いづら、猫は。こち率^{ひら}て来」とあるを、「など」と問へば、「夢にこの猫のかたはらに來て、おのれは侍従の大納言殿の御むすめの、かくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君（作者のこと）のすずろにあはれと思ひ出でたまへば、ただしばしこにあるを、このごろ下衆の中^{しも}にありて、いみじうわびしきこと、といひていみじう泣くさまは、あてにをかしげなる人と見えて、うちおどろきたれば、この猫の声にてありつるが、いみじくあはれるなり」と語りたまふを聞くに、いみじくあはれるなり。

その後^{のち}はこの猫を北面にも出ださず、思ひかしづく。ただ一人あたるにこの猫がむかひあれたれば、かいなでつつ、「侍従の大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせたてまつらばや」といひかくれば、顔をうちまもりつつ、なごう鳴くも、心なし、目のうちつけに、例の猫にはあらず、聞き知り顔にあはれるなり。

（中略）

そのかへる年（翌年）、四月の夜中ばかりに火の事ありて、大納言殿の姫君と思ひかしつきし猫もやけぬ。「大納言殿の姫君」と呼びしかば、聞き知り顔に鳴きて歩み来などせしかば、父なりし人も「めづらかにははれることなり。大納言に申さむ」などありしほどに、いみじうあはれにくちをしくおほゆ。

〔家居の記〕治安二年（一〇二一）三月つごもりがた

*侍従の大納言：能書家で書の「三跡」に数えられる藤原行成のこと（残る二人は小野道風と藤原佐成）。鎌倉中期の説話集『十訓抄』によれば、藤原実方とトラブルになった時、行成は沈着冷静に対応し、一条天皇に賞せられた。その娘（四女）は一二歳で藤原道長の末子（六男）長家と結婚したが、治安元年（一〇二二）三月、一五歳で早世。『更級日記』の作者菅原孝標女とはほぼ同い年（孝標女は一歳年下）で、孝標女は上京後、父から「書の手本」にしなさいと、かの姫君が書いた古歌などを渡されて、日ごろから敬愛していたのだった。

作り物語

六条斎院宣旨『狭衣物語』

平安時代後期（一一世紀後半）成立

○猫は、愛しい人と「私」とを結ぶ大切なよすがなのです

帝の正嫡でありながら源氏を賜って臣籍に下り、閑白として一条院や嵯峨院ら（実の兄弟）を支える「堀川の大臣」と「堀川の上」の子がこの物語の主人公「狭衣大将」である。狭衣は、母堀川の上の姪で故先帝の皇女、今は父堀川の大臣に引き取られ、養女として暮らしている従妹の「源氏の宮」を思慕するが、源氏の宮は狭衣の求愛を拒否しつづける。

『狭衣物語』は、狭衣と源氏の宮との不毛の愛を軸に据えて、狭衣の消極的な態度がもたらした、飛鳥井の女君、女二の宮、一品の宮、式部卿の宮の姫君などとのさまざまな愛の悲劇を語ったものであり、狭衣は両親に手厚く庇護され、無類の美貌と才能に恵まれ、官位の昇進もめざましく、神意によって出家することもなく、最後は帝位に即くという、外見は何の不足もない境遇にありながら、本意の恋人、源氏の宮は得られず、心ひかれる女二の宮とは行き違いとなってしまい、常に不如意の身の上を嘆き、憂愁の思いを抱いている。

（新編日本古典文学全集『狭衣物語②』所収 小町谷照彦「古典への招待」）

さて、一品の宮と意に染まぬ結婚をすることになってしまった狭衣は、堀川の自邸はもとより、どこへ行っても居場所がなく、鬱々としながら源氏の宮のいる齋院に赴くのがだった。すると：

（源氏の宮の）御側に寝入りたる猫、鳴き出でて、端ぎまへ出づる。綱に御几帳の帷子の引き上げられて、（源氏の宮と狭衣は思いがけず互いの顔を）見合せたまへば、（源氏の宮は）御顔いと赤くなりながら、わざと（ことさら奥に）引き入りなどはせさせたまはず、御扇に紛らはして（扇をかざして御顔を隠し）、少し傾かせたまふ、まみ（目元）、頬つき、髪ざし、

御髪みげしのかかり、げに光（光り輝くような御姿）とはこれを言ふにやと見えさせたまふにも、（それに引きかえ、自分自身は）あな心憂の身のさまや、いとかばかりなる事こそ叶はざらめ（源氏の宮のような方と結ばれることこそ叶わないとしても）、少しもなぞらへなる世をば見るまじきものと、思ひ知られしより（少しでもこの方に似通つたような人と結ばれたらと思ったが、それもかなわぬものと思ひ知らされて）、これに劣りたらん人ば見聞かじと、思ひ初めにしこそ（思うようになったのだが）、いでや、我が心のよろづに言ふかひなくて、親にもひとへに任せられたてまつりて（親の意向にひたすら従わされることになり）、心づからいと憂き世にも長らふることぞかしと思ふにも、身より外ほかにつらき人なくて、涙のみぞことわり知らぬものなりければ（涙ばかりは理屈と無関係に、とめどなく流れしてしまうのであった）。

（さて、狭衣が）猫を「こちや」とのたまへば、（猫は）らうたげなる声にうち鳴きて、近く寄り来たる、（その猫に源氏の宮の）御衣おんせの移り香うらやまして、（狭衣は思わず猫を）かき寄せたまへれば、御袖より入らんと睦むつるる、いとつづくし（可愛らしい）。

（狭衣は十歳近くも年上の一品の宮との結婚が）いと堪へがたくて、くねくねしうわびしき目を見つつ、長らふるよりは、かくこそあるべかりけれ（いっそ源氏の宮の移り香も濃厚な、この猫といっしょに暮らしたい）と思おもされて、「この御猫、しばし預けさせたまへかし。人肌つける春を求むるよりは」との

たまふを、宣旨といふ人（女房）うち笑ひて、「今更は、などてか（今更、なぜそんなことをおっしゃるのですか）。人は誰をかは求めさせたまはん。いと大人しき御扱ひをさへせさせたまふなるに（たいそう大人びた方を奥方にお迎えになり、お世話していらつしやるというのに）、猫は所狭せう思されぬ」と聞こゆれば、「さらなりや（もちろんです）。（私たち夫婦の仲は）岩間を潜る水だにも漏るまじければ」とて、うち笑ひたまふものから、いとかかる心の中も、（源氏の宮は）今は知らせたまはねば、（私が出家の望ねがみを）思ひ直りて、いつしかゆかり思ひをさへして、思ひ扱ふらんと、聞かせたまふらんかし、同じさまながらだに見えきこえさせじものをと、恥づかしくおぼえたまふを、（狭衣は）前なる人々（源氏の宮の御前に仕えている女房たち）の絵描き散らしたる筆どもの散りたるを、取りたまひて、紙の端に、

かつ見るもあるはあるにもあらぬ身を

人は人とや思ひなすらん

（あなたをこんなに慕いつつ、一方で別の人と結婚しているこの私は、生きているとはいいながら、全く生きている心地もいたしません。なのにあなたは、きつと私が普通の人のように、何の悩みもなく生きているとお思いなのでしょうね……）

手すさみのやうに、片仮名に書きて、この猫の首に結びつけて、「あな、寝きたな（ああ、ぐっすり寝ているね）。今は起きて参りね」と押し出でたまへれば、（猫は）聞き知り顔に、他

所^かぎまにも行かず、(源氏の宮のもとに)参りて睦^{ちむ}れまゐらす
るぞうらやましきや。

(卷三)

*『狭衣物語』の作者は源頼国女とされている。頼国女は後
朱雀天皇の皇女祿子内親王(六条斎院)に仕えた女房で、
宣旨はその筆頭格にあたる。なお、源頼国は源頼光の長男
であり、満仲の孫にあたる。

日記

藤原頼長『台記』

平安時代末期(一二世紀前半) 成立

○後に「悪左府」の名で呼ばれることになるこの私も、うちの
ネコが病気になった時、千手観音にお祈りしたんですよ

僕少年養^レ猫、猫有^レ疾、即画^二千手像^一、祈^レ之曰、請疾速除
愈(意味は癒に同じ)、又令^二猫満二十歳^一、猫即平癒、至^二三十歳^一死、
横野也人
撰

(康治元年(一一四二)八月六日の条)

【大意】

私は年少のころ猫を飼っていた。ある時、猫が病気になった
ので、私は千手観音の絵像を描いて病気が早く治るようお祈り

をした。そしてまた、うちの猫に十年の寿命をお与え下さい、
ともお願いした。そうしたら、立ちどころに猫の病氣も癒えて、
本当に十年で死んだのだよ。(割注) 猫が死んだ時は、遺骸を
衣にくるんで棺に入れ、埋葬した。

*藤原頼長(一一二〇〜五六)は摂政関白太政大臣藤原忠実
の三男。通称「宇治左大臣」「悪左府」。鳥羽院政下、朝廷
は皇位継承争いと摂関家内部の確執を背景に待賢門院腹の
崇徳院方と美福門院の推す後白河天皇方に分かれ、両者の
対立がいに武力衝突に発展する。後世「武者の世」(慈
円『愚管抄』)の始まりとされる保元の乱(一一五六)で
ある。頼長は保元の乱に際し、父忠実とともに崇徳院方に
つき、流れ矢にあたって敗死するも、死後怨霊と化し、安
元三年/治承元年(一一七七)正一位・太政大臣を追贈さ
れる。

*『台記』は原漢文。保延二年(一一三六)〜久寿二年
(一一五五)の記録。右は康治元年(一一四二)八月六日
の記事。当時、頼長は自らの鯨膚の治療と祈祷のために三
尺の千手観音を造立し、僧に命じて前月の十六日から「三七
日」(二日間)の供養を行わせていた。その満願の日が
八月六日であり、千手観音の靈験と、そのありがたい御利
益の一例として、ここに幼いころの猫の思い出が記された
ものと思われる。

*本文は橋本義彦・今江広道校訂〈史料纂集〉『台記』第

一 (続群書類従完成会、一九七六・一二) に拠る。なお、本文の訓読は(増補史料大成)『台記』一(臨川書店、一九六五・一一)を参考にした。

史書

藤原通憲(信西)『本朝世紀』

平安時代末期(一二世紀中ごろ) 成立

○ネコ、人を襲う!!

近日。近江国甲賀郡及美乃国山中有「奇獸」。夜陰群ニ入村閭ニ。嚙ニ損兒童ニ。或嚙ニ人手足ニ。土俗号ニ之猫ニ。仍有レ人斃ニ此獸ニ。剥ニ其皮ニ者所々有レ之。其間有ニ種々訛言ニ。尤為ニ奇誕事ニ。

(第三八)「近衛天皇・自久安六年七月至同年十二月」

*『本朝世紀』は平安時代末期、鳥羽上皇の命により藤原通憲(信西)が編纂した歴史書。同書は『日本書紀』から『日本三代実録』に至る「六国史」に続く正史として、宇多天皇(在位八八七〜八九七年)から近衛天皇(在位一一四二〜一一五五年)までを扱っているが、後白河院政下、院の近臣として勢力を拡大していった信西は平治元年(一一五九)一二月、後白河院の近臣藤原信頼が起したクーデター(平治の乱)によって自害に追い込ま

れ、その首は獄門にさらされたため、史書の編纂事業も中断、未完に終わった。もと全二〇巻。現存するのはその一部で、朱雀天皇の承平五年(九三五)から近衛天皇の仁平三年(一一五三)まで、二百年分以上が残存。そのなかに右のような「奇誕」なるネコの話が記録されている。ちなみに、「奇誕」とは虚妄の説のこと(「誕」はうそ、いつわり、でたらめの意)。

*本文は新訂増補(国史大系)『本朝世紀』(吉川弘文館、初版一九三三・八、新装版一九九九・二)に拠る。

仏教説話集

『今昔物語集』

平安時代末期(一二世紀中ごろ) 成立

○ネコ嫌いには壮絶!

悶絶! 恐怖のネコ部屋大作戦!!

(ネコ好きにはパラダイスですけど…)

大蔵省に勤める従五位下の藤原清廉は「大蔵の大夫」と呼ばれていた。しかし、前世がネズミだったのか、「いみじく猫になむ恐ける」人であった。そのことを知っていた悪戯好きな若い男たちは清廉の行く先々で猫を取り出して見せるので、彼はそのたびに用事も何も投げ出して「顔をふさぎて逃げて去りぬ」という有様。そこで人々は清廉に「猫恐(ねこおち)の大夫」とあだ名を付けた。

清廉は山城・大和・伊賀に莊園を持っており、たいそう財産を持っていたはずだが、公（朝廷）に対して租税を納めようとしなかった。そこで藤原輔公が大和守だったとき、一計を企んだ。猫嫌いの清廉を小さな部屋に押し込んで、そこに猫を放ったのである。「灰毛斑なる猫の長一尺余りばかりなるが、眼は赤くて、虎珀（琥珀）を磨き入れたるやうにて、大声を放ちて鳴く。ただ同じやうなる猫五ツ続きて入る。その時に清廉、目より大きな涙を落として、守（大和守）に向かひて手を摺りて迷ふ。」

清廉は真青になつて大和守のいう通り、税を納めることを確約した。これが伝わると、「世こそぞりて咲あへり、となむ語り伝へたるとや。」

（巻第二八「本朝付世俗」第三一「大藏大夫藤原清廉、猫に怖るる語」）

和歌

撰者不明『古今和歌六帖』

平安時代後期（二〇世紀後半）成立

○虎か？猫か？それとも？

あさちふのせの小野の篠原いかなれば

手飼ひのとらのふしどころみる

（第二「山」九五二番歌 読人知らず）

*『古今和歌六帖』は平安時代に成立した撰者不明の私撰和歌集。約四五〇首を類題別に収録。所収歌の本文と通し番号は『新編 国歌大観』第二巻「私撰集編 歌集」（一九八四・三）に拠る。なお、右九五二番歌は、一部言い回しの異なる形で『夫木和歌抄』巻第二七に収録されている（二九二五番歌、後出）。

*『古今和歌六帖』は、現在古今和歌六帖輪読会（代表平野由紀子）が初の全注釈に取り組んでおり、御茶ノ水女子大学Ebookサービスにて第四帖まで公開中。なお、同会の注釈では右九五二番歌の結び「ふしどころみる」を不自然と見て、校合本により「ふしどころなる」と改め、この歌の真意を「親の監視のきびしい娘に近づけないことを恨んだ男の歌か。」と記す。

*「手飼ひの虎」というのは「人に飼いならされた虎」のことだが、いうまでもなく日本に虎はいない。仮にいたとしても、あまりに危険すぎて、普通は飼おうとは思わない。飼いならせるとも思わない。日本で生きた虎を間近に見ることができるようになったのは明治以後の話である。だが、虎（寅）そのものは中国からもたらされた知識・文物あるいは虎の皮などを通して、記紀万葉の時代からすでに知られていた。ちなみに、久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九・五）は、「虎」の例歌として『古今和歌六帖』の「人妻は森か社か唐国の虎ふす

野辺か寝て試みむ」(第五・二九七八)を引き、「虎を人妻との危険な恋のたとえに用いている。他にも、人妻への恋情を表す歌に詠み込まれた例は多い。」(「虎」中周子)とする。であるならば、前出古今和歌六帖輪読会の解釈のごとく、「手飼ひの虎」をうかつに近づくことができないう危険な恋の相手(の比喩)とみる説も首肯できるところであろう。

*なお、「手飼ひの虎」は、一般的には「猫」「家猫」「飼ひ猫」と解されている(『日本国語大辞典』第二版)。平安時代の辞書、源順の『倭名類聚抄』は中国の字書『玉篇』を引用し、「猫」を「似虎而小、能捕鼠、為粮」と記しているが、おそらく虎の実物を見たことのない大多数の日本人にとって、虎はむしろ、大きな、そして凶暴な、恐ろしい野生の猫としてイメージされていたはずであり、いわばそのイメージを反転させたのが「手飼ひの虎」という表現であろうと思われる。とするならば、猫は鼠をよく捕る益獣であると同時に、天皇以下高位の貴族たちには愛玩動物であり、かつ、どんなに飼いなしても手に負えないところのある「小さな虎」でもあった、ということになろう。

和歌

藤原長清撰『夫木和歌抄』

鎌倉時代後期(二四世紀初頭) 成立

①ノラ猫も、唐猫も

十題百首

余所にだに夜床も知らぬのら猫の

なく音はたれに契りおきけん

(巻第二七 雑部九 動物部「猫」一三〇四三番歌 寂蓮法師)

寄野恋

真葛原したはひ歩くのら猫の

なつけかたきは妹がころか

(同一三〇四四番歌 源 仲正)

御集

敷島の 大和にはあらぬ唐猫の

君がためにぞ 求め出でたる

(同一三〇四五番歌 花山院御製)

此御歌は、三条の太皇太后宮よりねこやあるとありしかば、人のもとなりしがをかしげなりしをとりてたてまつりしに、あふぎのをれをふだにつくりてくびにつなぎてあそばされし御うたと云云

* 寂蓮法師：平安末期～鎌倉初期（一二世紀後半）の僧侶・歌人。藤原俊成の甥で、俊成の養子となり、のちに出家して寂蓮を名乗った。「十題百首」は建久二年（一一九二）藤原良経が主催した歌会で、良経・慈円・寂蓮・定家が集い、四人で天・地・居処・草・木・鳥・獸・虫・神祇・釈教、それぞれについて十首の歌を詠むという歌会であった。なお、寂蓮の歌について、〈復刻版〉校註『国歌大系』第二二卷「夫木和歌抄」下巻（講談社、一九七六・一〇。原版は一九三一年刊行）は、「夜床」ではなく「夜毎」とする。

* 源仲正：平安後期（一二世紀末～一二世紀ごろ）の武士・歌人。

* 花山天皇：平安中期（一〇世紀末～一一世紀初）の天皇（第六五代）。六三代冷泉天皇の第一皇子。次代の天皇が『枕草子』「翁まる事件」の一条天皇である。当時の猫人気がうかがわれる資料でもある。

* 三条の太皇太后宮：第六一代朱雀天皇の第一皇女、昌子内親王。冷泉天皇の中宮。

* 『夫木和歌抄』（『夫木和歌集』とも）は鎌倉時代後期に成立した私撰和歌集。過去の勅撰集（『万葉集』を含む）に漏れた和歌を収集・採録。その数一万七千首以上。収録歌人の数はおよそ一千人に及ぶ。撰者は遠江（今の静岡県西部）勝間田城の城主藤原長清。長清が師と仰いだのは定家の孫冷泉為相（父は定家三男藤原為家、母は『十六夜日記』

の阿仏尼）。歌集じたいは「中世編」に置くべきだが、右の「猫」歌三首は平安時代に詠まれたものとして「古代文学編」に収載する。

②猫だろが虎だろが、それが誰の「手飼」であつても、結局私たちの思うようにはならないものなのです：：

人心手飼ひの虎にあらねども

馴れしもなか疎くなるらん

（巻第二七雑部九動物部「虎」一一九一八番歌 土御門院

御製）

あさぢふの小野の篠原いかなれば

手飼ひの虎のふしどなるらん

（同一二九二五番歌 読人知らず）

* 以上、『夫木和歌抄』所収歌の本文と通し番号は『新編国歌大観』第二卷「私撰集編 歌集」（一九八四・三）に拠る。なお、通説の便を考慮して私に漢字をあてた。

* ちなみに、一万七千首もの和歌を収録している『夫木和歌抄』は、その巻第二七にネコの歌を三首（「手飼ひの虎」を含めると五首）挙げているが、これに対して、ネズミは八首、クマも八首、イノシシと野干（キツネ）は一二首、ウシとサルが一六首、ウマはなんと四六首も詠まれている。

■ちよつと寄り道―勅撰集に詠まれたネズミ!?

おしあゆ (押し鮎)

はしたかのをきゑ (置き餌) にせんとかまへたる

おしあゆかすな ものな ねずみとるべく

〔拾遺和歌集〕巻第七「物名」四一〇番歌 すけみ)

ねずみのこと (琴) のはら (腹) にこ (子) をうみたるを
年をへて君をのみこそねずみ (寝住み) つれ

ことはら (異腹) にやはこ (子) をばうむべき

(同四二一番歌 すけみ)

*『拾遺和歌集』は『古今和歌集』『後撰和歌集』に次ぐ第三勅撰集。花山天皇親撰とも伝えられる。一条天皇の御代、寛弘三年(一〇〇六)ごろの成立か。

*しかし、ネズミですら勅撰集に詠まれているというのに、ネコは『古今和歌集』から南北朝に成立した准勅撰集『新葉和歌集』を含む二二種の勅撰集のどこにも登場しない。久保田淳・馬場あき子編『歌ことは歌枕大辞典』(角川書店、一九九九・五)によれば、「特に王朝から中世においては和歌に詠まれることが少なく、むしろ、狂歌、俳句に詠まれることが多い素材である。(中略)和歌よりも貴族生活の中に印象的な場面が多い。」「猫」執筆高田祐介)とする。

吾輩も猫である

——日本文学史の中のネコたち

【中世文学編】

史書

『吾妻鏡』

鎌倉時代末期（一二世紀末～一四世紀初頭）

○銀でできたネコ、ほしければあげるよ

十六日庚寅。午剋。西行上人退出。頼雖抑留。敢不拘之。二品以銀作猫。被宛贈物。上人乍拝領之。於門外与放遊嬰兒云々。（以下略）

（文治二年（一一八六）八月十六日の条）

【大意】

文治二年（一一八六）八月十六日、庚寅の日。午の刻（昼ごろ）、西行上人が退出した。人々はもうしばらく、としきりに引き留めたが、上人はあっさり行ってしまった。この時、頼朝は銀作りの猫を西行に贈った。ところが、上人はこれを拝領しながら、これまたあっさり門の外で遊んでいた子どもたちに与えてしまったという。

*「二品」は官位二位のこと。ここでは源頼朝を指す（頼朝は文治元年に従二位、文治五年に正二位に叙されている）。この時、西行は重源上人の意を体して奥州に向かう途中であった。戦火に焼かれた東大寺の大仏再建費用（砂金）勸進のためである。なお奥州藤原氏は西行と同族、親類であった。

*本文は新訂増補〈国史大系〉『吾妻鏡』前篇（吉川弘文館、新装版二〇〇〇・三）に拠る。また、本文の訓読は貴志正造訳注『全訳吾妻鏡』第一卷（新人物往来社、一九七六・一〇）を参考にした。

説話集

『宇治拾遺物語』

院政期末～鎌倉時代前半（一二世紀後半～一三世紀前半）

○ニヤンニヤのコレは？ もしかして、ニヤにかの暗号？

今は昔、小野篁といふ人おはしけり。嵯峨帝の御時に、内裏に札を立てたりけるに、「無悪善」と書きたりけり。帝、篁に「読め」と仰せられたりければ、「読みは読み候ひなん。されど恐れにて候へば、え申し候はじ」と奏しければ、「ただ申せ」とたびたび仰せられければ、「さがなくてよからんと申して候ふぞ。されば君を呪ひ参らせて候ふなり」と申しければ、「おのれ放ちては誰か書かん」と仰せられければ、「さればこそ、申

し候はじとは申して候ひつれ」と申すに、御門、「さて何も書きたらん物は読みてんや」と仰せられければ、「何にても読み候ひなん」と申しければ、片仮名の子文字を十二書かせて給ひて、「読め」と仰せられければ、「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし」と読みたりければ、御門ほほえませ給ひて、事なくてやみにけり。

(卷第三の一七)

*『宇治拾遺』に多いのは馬、蛇、犬、狐。まれに猿、猪、蛙、雀、牛、ムササビ、あるいは鯨。また異国の話として虎、羊なども登場するが、実際に猫が出てくる話は一話もない。ちなみに、卷第二二の一九「宗行が郎等、虎を射る事」では、新羅の話として「虎はまづ人を食はんとては、猫の鼠を窺ふやうにひれ伏して、しばしばかりありて、大口をあきて飛びかかり、頭を食ひて肩にうち掛けて走り去るといふ」とあるが、これもやはり言葉だけである。

説話集
橘成季『古今著聞集』

鎌倉時代、建長六年(一二五四)成立

①うつくしき唐猫 元祖「キャッツ・アイ」?

観教法印が嵯峨の山庄に、うつくしき唐猫のいづくよりとも

なく出で来たりけるを、とらへて飼ひけるほどに、件の猫、玉をおもしろく取りければ(猫が上手にお手玉で遊ぶので)、法印愛してとらせけるに、秘蔵の護り刀を取り出でて玉に取らせけるに、件の刀をくはへて、猫やがて逃げ走りけるを、人々追ひて捕らへんとしけれどもかなはず、行くかたを知らず、失せにけり。この猫、もし魔の变化して、護りを取りて後、はばかるところなく犯して待るにや。おそろしき事なり。

(卷第一七「変化」第二七第六〇九話「観教法印が嵯峨山庄に飼はれたる唐猫、変化の事」)

*観教法印：御願寺僧正(九三四〜一〇二二年)。俗名源信輔。三条天皇(冷泉天皇の第二皇子、在位一〇一一〜一〇一六年)が東宮だった頃からの護持僧(天皇のために加持祈禱を行う僧侶)。

②からだが光るネコ

保延の比(保延年間は一一三五〜四一年、崇徳天皇の治世)、宰相の中將なりける人(参議||宰相で近衛中將を兼務する人)の乳母、猫を飼ひたり。その猫たかさ一尺、力のつよくて綱をきりければ、つなぐこともなくて、はなち飼ひけり。十歳にあまりける時、夜に入りて見ければ、せなかに光あり。かの乳母、つねにこの猫に向ひて、「汝死なん時、われに見ゆべからず」と教へけるは、いかなるゆゑにか、おぼつかなき事なり。十七

になりける年、行方を知らず失せにけり。

(巻第二〇「魚虫禽獸」第三〇第六八六話「宰相中將の乳母が飼ひ猫の事」)

③わたくし、ネズミは食べませんのよ。ホホホホホ…

或る貴所に、しろねといふ猫を飼はせ給ひける。その猫、鼠・雀などをとりけれども、あへて食はざりけり。人の前にて放ちける、不思議なる猫なり。

(巻第二〇「魚虫禽獸」第三〇第六八七話「或る貴所の飼ひ猫、鼠雀等を取るも食はざるの事」)

*「しろね」とは白猫(しろねこ)のことか? 名前からしていかにも上品そうなネコである。また「貴所」で飼われているとされているところから、「しろね」がエサに困っているとは考えにくい。動物行動学的にいうと、「しろね」のような行動は、狩りの成果を見せびらかしているのではなく、親が子にエサを持ち帰って食べさせようとするのと同じだと考えられているようである。

軍記物語

『平家物語』

鎌倉時代(一二世紀中ごろ～一四世紀初頭) 成立

○そりゃあ、私は「猫」ですけどね(だからって、ナメんなよ!)

平家一門を打ち破って上洛した木曾義仲は、後白河法皇から左馬頭の位と「朝日將軍」の称を与えられる。だが、二歳から三十になるまで木曾で暮っていた義仲は礼儀も知らず、都の風をも知らず、何かにつけて傍若無人なところがあつた…

あるとき猫間中納言光隆卿といふ人、木曾に宣ひあはすべき事あつておはしたりけり。郎等ども、「猫間殿の見参にいり、申すべき事ありとて、いらせ給ひて候」と申しければ、木曾大きにわらつて、「猫は人にげんざう(見参)するか。「これは猫間の中納言と申す公卿でわたらせ給ふ。(猫間というのは)御宿所の名(京都七条坊城壬生近辺)とおぼえ候」と申しければ、木曾「さらば」とて対面す。なほも猫間殿とはいはれは、「猫殿のまれまれわいたる(おはすゝわすゝ来る)に物よそへ(食事を用意せよ)」とぞ宣ひける。(中略) 飯うづたかくよそひ、御菜三種して、平茸の汁で参らせたり。(中略) 猫間殿は合子(ふたのついた椀)のいぶせさに(見苦し)ので、召さざりければ、「それは義仲が精進合子ぞ」。中納言召さでもさすがあしかるべければ、箸とつて召すよししけり(食べるふりをした)。木曾

これを見て「猫殿は小食せうじきにおはしけるや。きこゆる猫おろしねこが食べ物を残すことし給ひたり。かい給へ（かきこみなされ）とぞせめたける。中納言かやうの事に興さめて、宣ひあはすべきことも一言もいださず、やがていそぎ帰られけり。

（巻第八「猫間」）

日記

藤原定家『明月記』

平安末期～鎌倉時代（一二世紀後半～一三世紀前半）

①うちの猫、野良犬にかみ殺されてしましまして、正直ツライです。

四日、陰晴雨灑いんせいりうさい。天明（明け方）退出の間、去々年より養ふところの猫、放犬のために噉殺たんころせられ、曙の後（その犬を）放出すると云々。年来、予、更に猫を飼はず。女房、この猫を儲けて後、日夜これを養育す。悲慟ひなげ（なげきかなしみ）の思ひ、人倫に異ならず。鶴を軒のり（大夫の乗る車）に乗せ、犬に綬いさ（勲章）を帶すを耻づ、といへども、（この猫は）三年以来、掌上えり（衣裏）に在り。他の猫、時々啼き叫ぶことあり（といえども）この猫はその事なし。荒屋の四壁全からず、隣家とはその隔て無きが如し。放犬多くして致すところか。

（承元元年（一二〇七）七月四日の条）

【大意】

七月四日、晴れたり曇ったり、雨もバラつくはつきりしない天気だった。その日の明け方、私が務めから戻ると、一昨年から飼っていた猫が野良犬にかみ殺されたという。私はそれまで猫を飼ったことはなかったが、妻がこの猫を飼い始めてからというものの、日夜養育し、慣れ親しんできた。いま、猫を失った嘆き悲しみは、親しい人を失った悲しみと全く変わらないものであることに気付いた。世の中では動物を人と同じように遇することを愚かなこと、恥ずべきことと戒める風があるが、我が家の猫は、三年来、私たちの掌たねてらの上にあり、また衣の内に入って大切に育んできた。よその猫は時々騒々しく鳴きわめくようなこともあったが、うちの猫は決してそういうことはなかった。残念なのは、我が家の作りが粗末で、四方の壁もしっかりしていなかったことだ。隣の家との境や隔ても、あつてなきが如し。だから、こんなことになってしまったということか…。

*『明月記』は治承四年（一一八〇）から嘉禎元年（一二三五）まで、五六年間にわたる藤原定家の日記である（原漢文）。右本文は限定版『明月記』第三（国書刊行会、一九六九・九）に拠る。本稿では、今川文雄『訓読明月記』全六卷（河出書房、一九七七・七九）を参考にしつつ、私に訓読を試みた。以下同じ。

②野獸「猫また」出現！ 死傷者多数！！

二日甲戌、終日陰る。西北の方、雨降ると云々。この辺は然らず。夜前南京の方より使者小童来たりて云ふ。当時（現在の意）南都に猫勝と云ふ獸出来。一夜に七八人を啖ふ。死者多し。或はまた件の獸を打ち殺す。目は猫の如く、その体、犬の長さの如しと云々。二条院の御時（在位一一五八―一一六五年）、京中にこの鬼来たる由。雜人また猫勝の病と称し、諸人病悩の由、（定家自身が）少年の時、人これを語る。もし京中に及ばば、極めて怖るべきことか。

（天福元年（一一三三）八月二日の条）

*定家はここで二条院時代に起きた猫股騒動についても記しているが、藤原通憲（信西）が編纂した史書『本朝世紀』第三八、久安六年（一一五〇）の記事に、近江国と美濃国の山中に「奇獸」が出現し、子どもたちを襲った。土地の者たちはその「奇獸」のことを「猫」と呼んだ、とある。定家が「少年の時」聞いたというのは、あるいはこの話か。
*『明月記』の記事は「猫また」に関する最古の記録。絵空事でも作り話でもなく、定家自身が実際に人から聞いた話であり、事実としてこれを記録している点が貴重である。

日記・回想録

健御前「たまきはる」

鎌倉時代初期（一二世紀初頭）

○うちの姫様がお美しい唐猫になった夢を見ました…。嗚呼…

また大女院（八条院）の御色着たるころ、八条殿にて、人々の経読ませ給ふに交じりて、（春華門院のもとへ）久しく参らぬころ、（春華門院が）幼くおはしまししを、抱きまいらせていたると思ふほどに、唐猫のうつくしげなるにてをはしましける（そんな夢を見た、「あなあさまし。いかなる事ぞ」と思ひて、うちおどろきたりしに、心騒ぎて、心の及ぶ程、方々に御祈りせさせ、又さぶらひ合はる、人々にも、御祈りの事をのみ申しやりしかど、人はさしも思ひ合はれず、（春華門院が順徳天皇の大嘗会の）御祓への行幸の御棧敷をのみ、出で立ち合はれたりしに、かゝる尼の身に、申し出づべくもなかりし事を、例の身の上かへりみぬ心の癖に、二位殿（藤原兼子）に参りて、思ひし事も申したりしに、その御幸のとまりにしを、限りなくうれしと思ふかひもなく、例ならぬ御事さへ出で来ぬ。

（遺文）

*作者健御前は藤原俊成の娘で、藤原定家には五歳年長の同母姉。保元二年（一一五七）生れ。建保七年（一二一九）

ごろに亡くなったと推定。一二歳で建春門院(平滋子。清盛の正室時子の異母妹。後白河院の妃となり、高倉天皇を産み国母となる)に仕え、「建春門院中納言」と呼ばれた。建春門院が若くして亡くなった後は、およそ三〇年もの長きにわたって八条院(鳥羽院の皇女。崇徳・後白河の異母妹。近衛天皇の同母姉)に仕え、「八条院中納言」と称された。

*本作は鎌倉時代初期、当時六三歳の健御前が往時の平安朝を振り返って筆録した回想録である。題名は冒頭の和歌から付けられた通称で原題はない(「たまきはる」は「いのち」に係る枕詞)。内容的には健御前自身が生前にまとめた本編(第一部)と、健御前没後、書き捨ててあったものを定家が編纂した遺文(第二部)からなる。本編奥書によれば成立(清書終了)は建保七年(一一一九)三月三日、遺文の成立は貞応元年(一一三二)ごろと推定されている。

*右の唐猫の記事は建暦元年(一一二一)の出来事。話題になっっている春華門院は後鳥羽院の皇女(昇子内親王)で、八条院の猶子として育てられ、後に異母弟順徳天皇の准母となった。その養育の任にあたったのが健御前である。ところが春華門院は、建暦元年六月、八条院が七五歳で亡くなった後、病に伏せるようになり、同年十一月にはこの世を去ってしまう。健御前、当時五五歳。春華門院、わずか一七歳。遺文冒頭部は早世した春華門院追慕の記事であり、健御前は幼い頃からお世話してきた春華門院の不調を夢で察知した、その予兆があった、ということを書き綴っている

る。つまり、唐猫の夢は吉兆ではなかったのである。

*本文は三角洋一校注『新日本古典文学大系』とはずがたり・たまきはる』(岩波書店)に拠る。ただし、通説の便を考え、一部送り仮名を補っている。

随筆

兼好法師『徒然草』

鎌倉時代末期〜南北朝時代(一四世紀中ごろ) 成立

○「猫また」かと思つたら…、なあんだ(笑)

「奥山に、猫またといふものありて、人を食らふなる」と人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経^へあがりて、猫またに成りて、人とする事はあなるものを」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、連歌しける法師の、行願寺の辺^{ほとり}にありけるが聞きて、ひとり歩かん身は、心すべきことにこそと思ひける比^ひしも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたず足許へふと寄り来て、やがてかきつくままに、頸^{のど}のほどを食はんとす。肝心も失せて、防がんとするに、力もなく足も立たず、小川へ転び入りて、「助けよや、猫また、よやよや」と叫べば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こは如何に」とて、川の中より抱^かき起こしたれば、連歌の掛物取りて、扇・小箱など懐に持ちたりけるも、水に入

りぬ。稀有にして助かりたるさまにて、はふはふ家に入りけり。飼ひたる犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。

(第八九段)

狂言

『鶏猫』

室町時代

○うちのタマ知りませんか？

あるとき、伊予の国の大名河野某秘蔵の猫が行方知れずになった。河野は太郎冠者に命じ、「猫の行方を申し来たる者あらば、勲功は乞ふによるべし」と書いた高札を立てさせる。すると一人の少年が訪ねてくる。聞けば、藤三郎という男が猫を殺してしまつたという。激怒した河野はさっそく太郎冠者に藤三郎召し取りを命じるが、何しろ相手は大力で手ごわい。臆病な太郎冠者は、次郎冠者、三郎冠者まで呼び出し、三人がかりで藤三郎を捕らえることに成功する。

殿様の前に引き出された藤三郎は、当初、知らぬ存ぜぬで押し通そうとするが、そこに証人があらわれる。なんと、藤三郎を訴人したのは彼自身の子どもであつた。藤三郎も是非に及ばず、なぜ猫を殺したのか白状する。

「何を隠しませうぞ、私も秘蔵の鶏を飼うて居りましたが、この間何処からやら猫が参り、鶏をくはへて逃げまするによつ

て、何心なう打ち殺いてござる。見ますれば承り及うだ御秘蔵の猫でござる。もしこのことが知られましたならばお咎めもあらうと存じ、深く隠いてござる。」

それを聞いた河野は、藤三郎を猫の仇、と一討ちにしようとする。すると今度は、藤三郎の子が「この度の勲功に、親の命を助けて下されい」と訴える。ではなぜ親を訴えたのかと問うと、よその人から訴えられたなら親子はもろろん一門の罪は逃れられない。そこで自分が訴人して、褒美に親の命をもらい受けようと考えた。どうか親の命を助けて下されいという。河野は親孝行な息子に心動かされ、藤三郎の命を助けることにする。さらに、子には褒美として河野家重代の太刀まで与え、親子は嬉しそうに帰っていく。

*本文は北川忠彦・安田章校注(『日本古典文学全集』『狂言集』(小学館)に拠る。なお、本作は(『新編日本古典文学全集』『狂言集』(小学館)には収録されていない。

*右のあらすじからわかるように、「鶏猫」には猫は登場しない。狂言には実際に猿(朝猿)、狐(釣狐)、狸(狸腹鼓)の登場する演目はあるが、猫の登場する話はない。筋としては「牛盗人」と同工。

■ちよつと寄り道——中世文学のなかの犬たち

①一人の女と五人の男、みんな犬に生まれ変わって：

信州のある山寺に飼われている犬が五匹の子を産んだ。だが母犬はそのうち一匹の仔犬だけを憎んで乳を吞ませず、齒をむき出して噛みつく。僧たちはそんな母犬を憎んだ。ある時僧たちは一斉に同じ夢を見る。母犬の前世は遊女で、五人の夫がいた。四人は情け深い人たちだったが、残る一人は女を人とも思わず、女を煩わせ、困らせるばかり。五匹の仔犬たちは五人の男たちの生まれ変わりで、女(母犬)としてはこのような因縁があつて、かの男(子犬)を愛おしいと思うことができず、つらく当たっていたのだという。

(無住『沙石集』巻第九第一〇話「前業の報ひたる事」)

*無住(一二二七—一三二二)は鎌倉時代の僧侶。『沙石集』は弘安二年(一二七九)に起筆。一三世紀後半—一四世紀初頭に成立した仏教説話集。

②家の守りは犬におまかせ！

養ひ飼ふものには、馬・牛・繋ぎ苦しむるこそいたましけれど、なくてはかなはぬものなれば、いかがはせん。犬は、守り防ぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど、家こ

とにあるものなれば、殊更に求め飼はずともありなん。

その外の鳥・獸(けもの)すべて用なきものなり。走る獸は檻にこめ、鎖をさされ、飛ぶ鳥は翅を切り、籠に入れられて雲を恋ひ、野山を思ふ愁、止む時なし。その思ひ、我が身にあたりて忍びがたくは、心あらん人、是を楽しまんや。生を苦しめて目を喜ばしむるは、桀・紂(ともに中国古代の暴君)が心なり。王子猷(書聖王羲之の子、書家で風流人)が鳥を愛せし、林に樂しぶを見て、逍遙の友としき。捕へ苦しめたるにあらず。

凡そ、「めづらしき禽、あやしき獸、国に養はず」とこそ、文(書経)にも待るなれ。

(『徒然草』第二二一段)

③もし本当なら、相当残酷な話ですが：

雅房大納言(鎌倉中期の公卿、土御門源雅房)は才賢く、よき人にて、大将(近衛大将)にもなさばやとおぼしける比、院(具体的には誰であるかは諸説あり)の近習なる人、「ただ今、あさましき事を見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹に飼はんとて、生きたる犬の足を斬り侍りつるを、中墻の穴より見侍りつ」と申されるに、(院は)うとましく、憎くおぼしめして、日來の御気色もたがひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど(予想外のこと)、犬の足はあとなき事なり(根拠のないこと、根も葉もないこと)。虚言は不便なれども、かかる

事を聞かせ給ひて、憎ませ給ひける君の御心は、いと尊き事なり。

おほかた、生けるものを殺し、傷め、闘はしめて遊び楽しまん人は、畜生残害（互いに傷つけあう動物たち）の類なり。（中略）すべて、一切の有情（生き物）を見て、慈悲の心なからんは、人倫にあらず。

〔徒然草〕第二二八段）

④犬は人の役に立つし、たいへん賢いのですが：

小鷹こたかによき犬（ハヤブサなど小型の鳥で行う鷹狩用の犬）、大鷹に使ひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大につき小を捨つる理、誠にしかなり。人事多かる中に、道（仏道）を樂しぶより気味深きはなし。これ実の大事なり。一たび道を聞きて、これに志さん人、いづれのわざかすたれざらん。何事をか當まん。愚かなる人といふとも、賢き犬の心におとらんや。

〔徒然草〕第一七四段）

⑤犬も人に危害を加える場合があります

人突く牛をば角を切り、人食ふ（かみつく）馬をば耳を切りて、そのしるしとす。しるしをつけずして人をやぶらせぬるは、主の咎なり。人食ふ犬をば養ひ飼ふべからず。これ皆咎あり。律の禁なり。

⑥ついでに、狐の場合は？

狐は人に食ひつくものなり。堀川殿（兼好が諸太夫として仕えた源具守家）にて、舎人が寝たる足を狐に食はる。仁和寺にて、夜、本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛びかかりて食ひつきければ、刀を抜きてこれをふせぐ間、狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは逃げぬ。法師はあまた所食はれながら、ことうゑなかりけり。

〔徒然草〕第二二八段）

⑦修行の足りない狐？

五条内裏には、妖物ばげものありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、殿上人ども黒戸にて碁をうちけるに、御簾をかかげて見るものあり。「誰ぞ」と見向きたれば、狐、人のやうに居て、さし覗きたるを、「あれ狐よ」とよまれて、惑い逃げにけり。未練の（鍛錬の足りない未熟な）狐、化け損じけるにこそ。

〔徒然草〕第二三〇段）

*『日本靈異記』や『今昔物語集』など仏教の威徳を説き広めるために編まれた説話集は、鬼神の存在や人の転生譚、あるいは道成寺説話の如き変身譚、はたまた聖の奇跡や靈

験譚等々、現実離れた奇談の類を多数収録しているが、『徒然草』は世の無常を説き、仏道を学ぶこと（学問）を勧めながら、不思議とそうした「不思議な話」は載せていない。猫またといい、狐といい、一般に「妖」「怪」「変化」のイメージで語られることの多い動物たちだが、兼好はそうした、現実にはありえない空想や奇談・伝説の類は一顧だにせず、むしろ事実立脚してこれらを記述・記録する現実主義的な姿勢を貫いている。おそらく兼好にとつて、現実世界のほうが、あるいは現実には生きている人間たちの方が、奇妙で不思議で興味深く、絶好の観察・考察の対象だったのではなからうか。

【参考】

各地の猫また伝承&ネコが妖怪視される理由について

○鈴木棠三『日本俗信辞典 動・植物編』（角川書店、一九八二・一一）によれば、「古ネコは化けるといわれるが、それは、人を化かす（津軽）、ということでもある。ネコを長い間飼うとネコマタ（妖怪）になる（香川）、というが、どの程度が古ネコであるかは、所により考え方が違う。ネコは三年飼うと化ける（三重県阿山郡）、三年飼ったら捨てる（岩手県和賀郡）。赤ネコは三年たてば踊り出す、或いは主人をねらう（愛媛）。一貫目以上のネコは化ける（高知）、オット

（牡）ネコは七斤の重さになると化ける（彦岐）、三貫目以上になると山ネコになる（宮崎）、などいう。」

○笹間良彦『凶説・日本未確認生物事典』（柏書房、一九九四・二）は、猫が妖怪視される要因として、「じつと物を見詰める習癖」「近寄るのに音を立てないこと」「身体がしなやかで身長は倍、時には五倍程の高さに飛びあがったり飛び降りたりすること」「鋭い爪を隠して必要の時には武器として使用すること」「無邪気で愛らしいと思われる反面、獐猛で敏捷であること」「人によく馴れるが自我が強く、人の強制に中々応じないこと」「人に飼われているという意識がなく、人と対等と思っていること」「瞳が丸くなったり細くなったりして夜目が光ること」などをあげている。

○常光徹『学校の怪談——口承文芸の展開と諸相』（ミネルヴァ書房、一九九三・二）所収「猫と南瓜」の構造は、猫について「野生の部分を濃厚に残しているこの動物は、いともかたんに日常世界を抜け出て、闇の領域を徘徊する」と述べ、人間に従順な家畜などとは異なる「両義性を帯びた不可解な性格」を指摘している。

吾輩も猫である

——日本文学史の中のネコたち

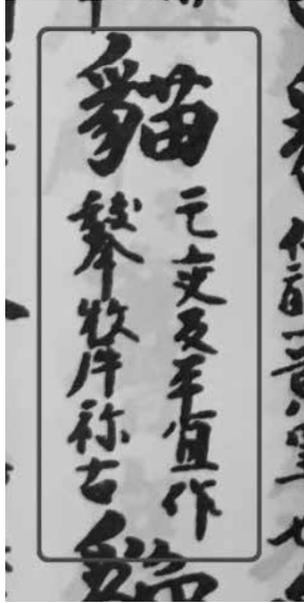
【古辞書編】

字書

昌住『新撰字鏡』

平安時代前期（九世紀末～一〇世紀）成立

○猫 「亡交反平宜作／＼聲祿古」



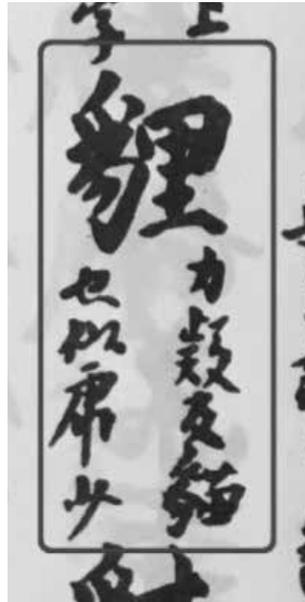
（天治本『新撰字鏡』第八卷「ㄨ」部第七七）

【大意】

猫（猫）…音は反切法で「亡交（ミヤオ）」。日本でいうネコのこと。

吾輩も猫である —— 日本文学史の中のネコたち（その二）

○狸 「刀疑反猫／也似虎少」



（天治本『新撰字鏡』第八卷「ㄨ」部第七七）

【大意】

狸（狸）…音は反切法で「リ」。猫のこと。虎に似ているが小さい。

* 「」内は割注。 〳は判読困難箇所。以下同じ。

* 反切法とは漢字二字で発音をあらわす方法。たとえば、「猫」は「亡」[miuɑŋ]の子音と「交」[jao]の母音の組み合わせなので「ミヤオ」となる。

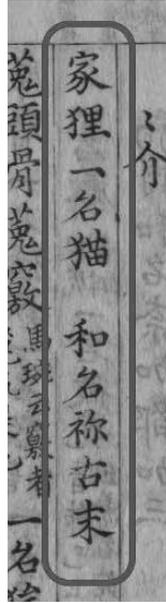
* 画像（影印資料）は京都大学文学部国語学国文学研究室編『天治本『新撰字鏡（増訂版）』（臨川書店、一九六七・二二）に拠る。

本草書（薬物辞典）

深根輔仁『本草和名』

平安時代前期（二〇世紀初頭、九一八年）成立

○家狸 一名猫 和名称古末



〔「本草和名」下巻「獸禽六十九種」〕

【大意】

家狸：猫ともいう。和名はネコマという。

* 右のように、『本草和名』が「家狸」の別名を「猫、ねこま」と記していること。また、後述の『類聚名義抄』が「狸」を「野猫」と説明していることから、平安時代は「猫／狸」は家猫・飼い猫の類をいい、「狸／狸」は野良猫（野生の猫・野生化した猫）のことをいいあらわしていた可能性がある。

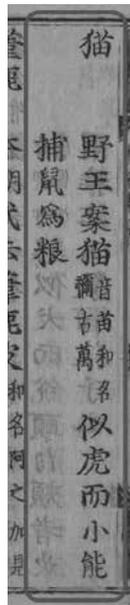
* 画像（影印資料）は寛政八年刊『本草和名』（国立国会図書館デジタルコレクション）に拠る。

辞書

源順『和名類聚抄』

平安時代中期（二〇世紀中ごろ）成立

○猫 野王案、猫「音苗和名／称古万」似虎而小、能捕鼠、為粮



〔「和名類聚抄」巻一八「毛群部」第二九「毛群名」〕

【大意】

猫：音は反切法で「苗（ミヤオ）。和名はネコマ。虎に似て小さく、鼠を捕るのが得意で、これをエサとしている。

* 「野王」は梁の顧野王こやわのこと。中国南北朝時代（五四三年）に『玉篇』（部首別の漢字字典）を編纂した。野王自身が自分の考えを記す時「野王案」と書く。『和名類聚抄』は「玉篇」の記述を引用している。

* 画像（影印資料）は元和三年古活字版『倭名類聚抄』二十卷本（国立国会図書館デジタルコレクション）に拠る。ちなみに、馬淵和夫編『古写本和名類聚抄集成』第一部「諸本解題・関係資料集及び語彙総集」（勉誠出版、

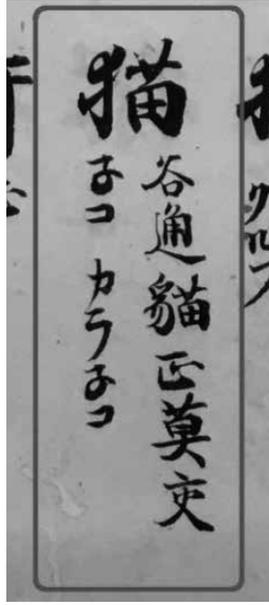
二〇〇八・八）所収、十卷本『和名類聚抄』巻七には見出し語に「猫」とあって、野王案猫「音苗祢古麻」似虎而小能捕鼠為粮」とある。

字書

『類聚名義抄』

平安時代末期（一一世紀末）成立

○猫「俗通猫正莫交／子ねコ カラね子ねコ」

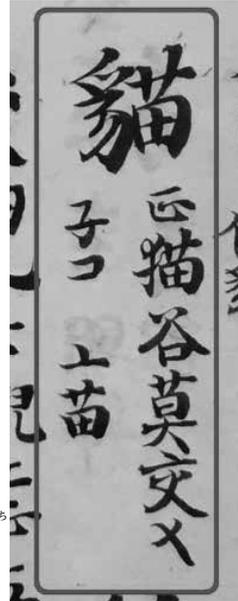


（観智院本『類聚名義抄』「仏・下・本」第三〇「犬」の部）

【大意】

猫：「猫」は俗字で、正しくは「猫」と書く。音は反切法で「莫交（マウ）。日本でいうネコのこと。唐猫。

○猫「正猫俗莫交反／子ねコ 音苗

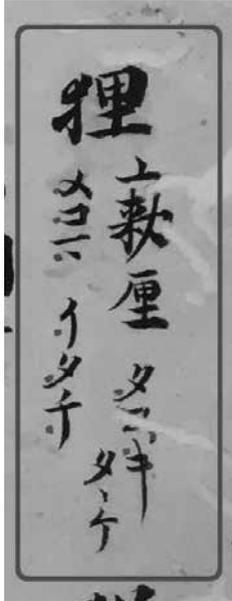


（観智院本『類聚名義抄』「仏・下・末」第三三「豕」の部）

【大意】

猫（猫）：正しくは「猫」と書く。俗に「猫」とも。音は「莫交（マウ）。ネコのこと。音は苗（ミヤオ）。

○狸「鼯厘 タヌキ／タ、ケ／メコマ／イタチ」

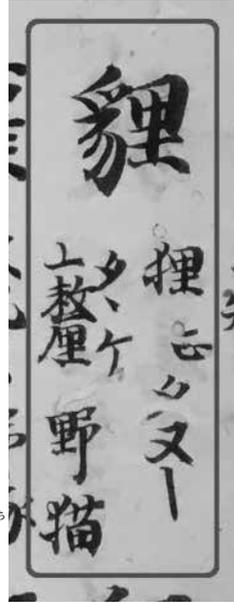


（観智院本『類聚名義抄』「仏・下・本」第三〇「犬」の部）

【大意】

狸：音は反切法で「釐厘（リ）」。タヌキのこと。タタケともいう。あるいはメコマ、イタチのこと。

○狸 「狸 正タヌキ／タ、ケ」



（観智院本『類聚名義抄』「仏・下・末」第三三「多」の部）

【大意】

狸（狸）：正しくは「狸」と書く。タヌキのこと。タタケともいう。音は反切法で「釐（リ）」。野猫のこと。

*『類聚名義抄』原撰本の大半は散逸。現存完本は鎌倉時代末期の書写。原撰本を増補した観智院本（国宝・天理図書館蔵）『類聚名義抄』は「仏・法・僧」三部に分かれ、かつ「仏」の部は「上・中・下」の三部、さらに「仏・下」の部は「本・末」の二部に分かれている。その「仏・下・本」犬部、および「仏・下・末」第三三「多（チ）」部の二箇所に「猫」

「狸」が立項されている。

*画像（影印資料）は天理大学附属天理図書館編（新天理図書館善本叢書）『類聚名義抄 観智院本』（天理図書館出版部・八木書店、二〇一八・四）に拠る。

辞書

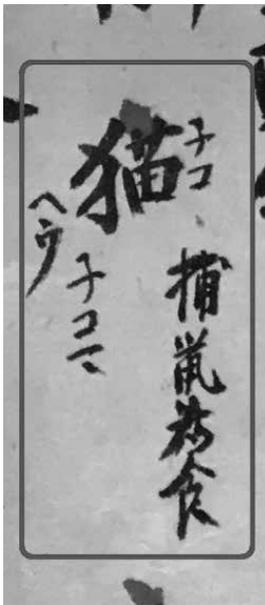
橘忠兼『色葉字類抄』二卷本

平安時代末期（一二世紀中ごろ）成立

ネコ

○猫 「捕鼠為食」

ヘウ／ネコマ



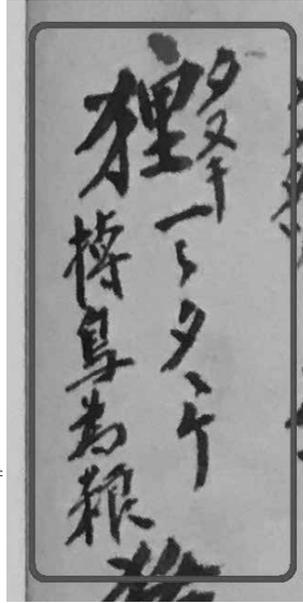
（『色葉字類抄』二卷本、巻上の下、柵の部・動物）

【大意】

猫：和名はネコ、音はヘウ。鼠を捕えてエサとする。ネコマ

ともいう。

タヌキ
○狸 「二云タ、ケ／搏鳥為粮」



〔「色葉字類抄」二卷本、巻上の下、他の部・動物〕

【大意】

狸：和名はタヌキ。あるいはタタケとも。鳥を搏つかつてエサとする。

*画像（影印資料）は財団法人前田育徳会尊経閣文庫編〈尊経閣善本影印集成〉『色葉字類抄二 二巻本』（八木書店、二〇〇〇・一）に拠る。

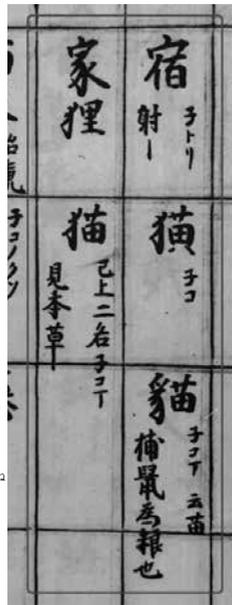
吾輩も猫である —— 日本文学史の中のネコたち（その二）

辞書

橘忠兼『伊呂波字類抄』十巻本

鎌倉時代初期（二三世紀前半）成立

- 猫（狸） 「ネコ」
- 猫 「ネコマ 云苗／捕鼠為粮也」
- 家狸
- 猫 「已上ニ各ネコマ／見本草」

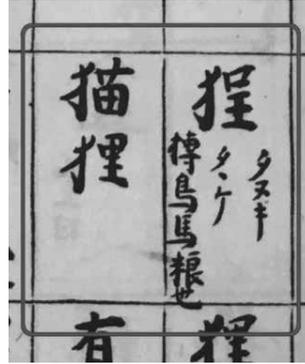


〔「伊呂波字類抄」十巻本、巻五、祢ねの部・動物〕

【大意】

猫（狸）：和名はネコマ。音は「苗」。鼠を捕えてエサとする。
家狸・猫：いずれも「ネコマ」と読む。『本草和名』参照のこと。

○狸（狸） 「タヌキ／タ、ケ／搏鳥馬（為か） 糺也」
○猫狸



〔伊呂波字類抄〕十卷本、卷四、太の部・動物

【大意】

狸：和名はタヌキ、あるいはタタケ。鳥を搏つかつてエサとする。

*『色葉（伊呂波）字類抄』は二巻本と十巻本の他に、三巻本（一二世紀後半成立）があるが、三巻本は巻中と巻下の一部、肝心の「た」から「ふ」までが欠けており、「猫」も「狸」もわからない。

*画像（影印資料）は築島裕責任編集・月本雅幸編集協力（大東急記念文庫善本叢刊）中古中世篇・別巻二『伊呂波字類抄』第二巻（汲古書院、二〇一二年一〇）に拠る。

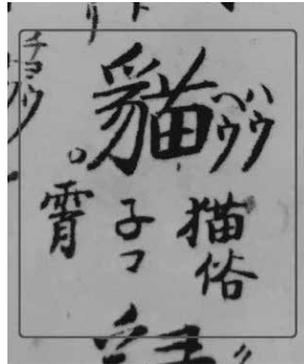
字書

菅原為長『字鏡集』

鎌倉時代初期（一二世紀中ごろ）成立

ハウ／ヘウ

○猫 「猫俗／ネコ／霄」



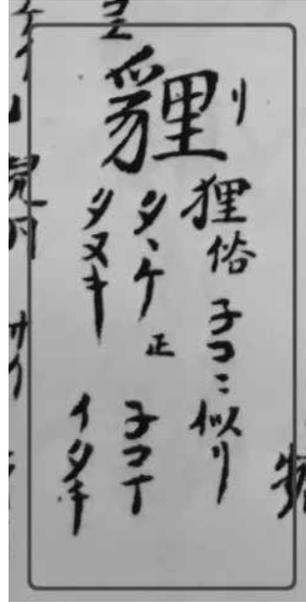
（第八卷「動物部」上「豸」部）

【大意】

猫：音はハウ、またはヘウ。「猫」は俗字。日本でいうネコのこと。霄。

リ

○狸 [狸俗ネコニ似リ／タ、ケ正ネコマ／タヌキイタチ]



(第八卷「動物部」上「多」部)

【大意】

狸(狸) ……音はり。「狸」は俗字。ネコに似た動物である。正しくはタタケという。他にネコマ、タヌキ、イタチともいう。

* 画像(影印資料) は中田祝夫・林義雄『字鏡集』(自説本)研究並びに総合索引』第一冊「字鏡集 白河本影印篇」(勉誠社、一九七七・七)に拠る。

類書(百科事典)

行啓『壺囊鈔』

室町時代(文安二〜三年(一四四五〜四六)) 成立

編者不詳『塵添壺囊鈔』

(天文元年(一五三二)) 成立

(前略) 狸ノ字ヲ。タ、ゲトヨム。又子コマ共ヨム。只子コト同事也。狸ヲ。猫ニ用ハ僻事也。(中略) 狸猫キハ格別也。狸ハ。猫ナルベシ。(中略) 猫ト狸ケ同類ト云事ソ。

〔壺囊鈔〕 卷五の五十二、〔塵添壺囊鈔〕 卷八の十「狸事」

* 『塵添壺囊鈔』は、勸勝寺の僧行啓が室町時代(一五世紀中ごろ)に編纂した『壺囊鈔』に、鎌倉時代(二三世紀)

の『塵袋』の項目(二百項目余)を増補したものの。* 本文は『塵添壺囊鈔・壺囊鈔』(臨川書店、一九六八・三)に拠る。なお、片仮名の振り仮名は原文通り。平仮名の振り仮名は通読の便を考慮して私にあてたものである。

辞書

谷川士清編『倭訓栞』

江戸時代中期(一八世紀) 成立

○ねこ 猫をいふ。寝子の義。睡を好獣也。よて睡猫尼などい

へり。倭名抄にハねこまといへり。靈異記に狸もよめり。○琉球にハ異色の猫あり。穩岐ノ国の竹島の猫ハ此間の猫とハ異れりといへり。三毛を花猫といふ。宝永乙酉(宝永二年ノ一七〇五)五月に江戸大久保某の家の猫、二頭六足二尾灰毛の子を産す。韓猫ハ源氏にみゆ。蒙頌(猿の一種)也。夫木集に、敷しまや大和にハあらぬ唐ねこを君が為にと求め出たり。時ねこハ金華猫也。麝香猫ハ靈猫也といへり。○諺に猫根性といふハ人の心の貪欲を匿し外に露ハさぬ者をいふ。○土佐国にしが山あり。大山也。多く猫住て獵人も至り得ずといへり。是ハまたなるべし。○鼠とる猫ハ爪を藏といふ諺ハ説苑に君子ハ愛レ口虎豹ハ愛レ爪と見えたり。○猫にかうふり給りて命婦など、いふ事枕草紙に見えたり。○猫の二歳にて死たりし児に化て母の乳を毎夜吸たりし事奥州白川に有。又妾に化し事江戸にあり。○歌に手かひの虎ともよめり。本草に今南人猶二呼レ虎為レ猫と見えたり。○猫に堅魚節あづけるといふ諺ハ、後漢書に使二餓狼守レ庖厨肌虎牧レ牢豚といふに同じ。○猫に小判見せるといふ諺ハ、野客叢書に對レ牛彈レ琴といふ類也。○但馬美父郡の一村に猫をもて使とする社あり。農家蠶(蚕)を養ふ節にハ、必其使を乞て鼠をかる。其使の猫ハ、社前の一拳石を持婦也。謝するに及び又一拳石を添ふ。よつて小丘壑の如しといふ。○尾の短き猫を東鑑に五分尻と見ゆ。今東国に午尻房といふハ其訛也。土佐国にハかぶ猫といふ。○猫の眼ハ十二時にかかり、鼻ハ夏至の一日あた、か也といへり。又腕をもて面を洗ふ時、腕耳を過れば、不意に客来と西陽雜俎に見ゆ。

眼の歌晴をもて知べし。六ツ丸く四八瓜さね五と七と玉子なりにて九ツは針。○猫島ハ加賀ノ国の沖にあり。今昔物語に見ゆ。○猫間ノ斎院ハ高倉院皇女範子内親王也。

(「倭訓栞前編」二十二「柙の部」)

*『説苑』は中国前漢の故事・説話集。『野客叢書』は南宋の王楙(王勉夫)撰。中国の故事成語集。『西陽雜俎』は中国唐代、段成式の手になる隨筆。異事奇談集。八六〇年ごろ成立。

*なお、同書は「ねこ」の前に「ねう」を立項、「源氏に猫の声をねう／＼といとらうたけになけハと見えたり。今にやを／＼といふがごとし」と記す。

○ねこまた 徒然草に、奥山にありて人を食ふといへるものハ、採挺をまたと訓ぜし物なるべし。山ならねども、こゝらに猫のへあがりて猫またになるといふは、今俗いふ所のもの也。四国辺の賤民にハ、ねこまたをつかふ犬神の類あり。○金色に光りて毛ハ一條もなく、髭ハ長く、尾ハ兩岐にわかれ、爪の鋭き事、劍を欺き、牙ハ狼に似、頭より尾まで九尺に及べり。死して兩眼を閉ず、光る事星のごとし。奥州猪狩氏の兒驚かされし者也。津輕の者いふ。山猫の数百歳を経て狒々びびに類せる物也。松前には折々殺して捨る。人を喰者とぞ。○応仁紀に公方儀も又猫打て是非の沙汰こそなかりけりと思えたるも是にや。よくばけるをもてあたらぬ事にいへる諺なるべし。西土の書にも猫鬼野

道など見えたり。

〔倭訓栞 後編〕 卷之十四「那尔奴祢能之部」

*後藤秋正「猫と漢詩」札記——古代から唐代まで」〔北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）五七一、二〇〇七・二〕

によれば、隋の初代皇帝文帝（楊堅）の開皇一八年（五九八）五月の詔に「蕃猫鬼・蠱毒・厭魅・野道之家、投於四裔（猫鬼・蠱毒・厭魅・野道を蓄うるの家は四裔に投ず）」とある。これは猫鬼等妖怪に仕え、呪術などを使うような輩は「四裔（国土の四方の果て）」に捨てる（国外追放に処す）ということだが、いわゆる「ねこまた」も唐土の「猫鬼野道」と同じ、ということだろう。

*引用本文は谷川士清編、井上頼圀・小杉榎郎増補『増補語林 倭訓栞』全四卷（名著刊行会、一九七三・五）に拠る。

谷川士清（一七〇九〜一七七六）の『和訓栞』は前編・中編・後編の三部からなる。同書は全九三巻に及ぶ大部の辞書だが、刊行が始まったのは著者の没後、安永六年（一七七七）である。全編の完結は明治二〇年（一八八七）で、刊行開始から完結まで百年以上も要したことになる。同書はその後、明治三二年（一八九八）、井上頼圀・小杉榎郎によって増補刊行されたが、その際『和訓栞』の「後編」は『増補語林 倭訓栞』に収録されておらず、名著刊行会本でも活字による翻刻本文ではなく影印が収録されている。なお、通読の便を考慮して、私に句読点や読み仮名、濁点等を補つ

た。また、活字本の漢文については製版本（影印資料）に
あたり、一部返り点を改めたところがある。

（この稿つづく）

『白き手の獵人』における三木露風の〈象徴〉

青 木 優 佳

はじめに

¹三木露風は兵庫県揖保郡竜野町（現在のたつの市）で父節次郎と母かたのもとに生まれた詩人である。露風の実母かたは明治二十八年二月ごろ、実父節次郎の不身持と放蕩が原因で、露風がまだ幼稚園に通っている時期に弟の勉をつれて鳥取の実家に帰っている。その後露風は十六歳で岡山県和氣の私立中学閉谷校に転校するまで祖父母のもとで育てられた。このように、露風は幼年期に父母の離婚と実母との別れという経験を経て育った。

特に実母と引き離された生育環境について²森田実歳は「露風の人間性、芸術性の形成に影響があった」と指摘しており、同時に露風と実母の関係について³「母を思う詩歌は幾つもあり、幼時に、その頭を寄せるべき母の胸を失ったことは、何ほどか、露風の胸に、母性憧憬の思いをかき立てたかと思われる。が、この大いなる欠損が、露風においては、かれの思慕の永遠性、深さに働きかけたことも否み得ぬ事実であろう」と述べている。つまり、幼年時に実母と引き離されて育った経験が、後の言動だけでなく露風の詩作及び世界観の形成にも影響していると考えられる。

その後露風は数えて十五歳の時に郷里兵庫県立竜野中学校に首席合格し、小学生時代から続けてきた雑誌『小国民』への投稿を終えて新進への道を歩み始めた。第一詩集『夏姫』（明三八・七 血友会）を自費出版したのがこの時であり、詩人としての早熟性が窺える。

しかし露風は、藤村や泣菫、有明などに比べると十分な学業を積むことができなかった。中学校は前述した岡山県にある私立中学閉谷校に転校後中退し、その後早稲田大学と慶応大学に在籍するも、学資調達に悩まされ、慶応大学

は一年で退学している。⁴ 森田はこのような不十分な学業環境がかえって露風の文学的形成に幸いしたと指摘し、同時に「露風は、その中学生生活をも十分には全うし得なかつた教養の不備によつて、その詩心を、もしくは詩的直観を素直に伸縮させることが出来た。かれは洋学に大いに関心を示したけれども、もつと読み易い、会得もし易い日本古典に先達を求める気配があつた。(略) また、自然主義—印象詩—象徴詩の知解を持ちながら、ボードレルやヴェルレーヌ、あるいは『海潮音』の新声に傾倒し、脈絡をいつかそこに繋いだとしても、歌う詩がその心から生れてくるのであるなら何ら愧ずべきものはないのであつた」と述べた。このことから、露風は自身の教養の不備や学習との希薄な触れ合いから生じた隙間を、日本古典や西欧詩人に学びながら独自の世界観の構想を深めることで補つたであろうと考えられる。西欧の影響・啓発と日本の馴染みやすい伝統が交わるなか、露風はあえてどちらにも固執することなく、また拒絶することもなく、様々な影響を素直に取り入れながらまったく独自の世界観を作り上げることができたのではないか。

以上に示したように恵まれたとは言い難い難い生育及び学習環境を経て育つた露風は、明治四十二年に第二詩集となる『廢園』（明四二・九 光華書房）を、その後第四詩集となる『白き手の獵人』（大二・九 東雲堂書店）を刊行する。

『廢園』は、中島洋一が「『廢園』を象徴詩集として認めることには問題があるとしても、その象徴性には十分注目すべきものが含まれている」と指摘するように、露風の象徴性の素地と象徴詩に至るまでの過程を含んだ詩集であるとされている。また『白き手の獵人』は露風の作品の中で最も高く評価された詩集であり、近代詩史のなかでも象徴詩集として位置付けられ、その象徴性を高く評価された。

それではこれらの詩集に表出された、露風の〈象徴詩〉の内実とは一体何なのか。本稿では象徴詩集として特に高く評価された『白き手の獵人』に焦点を当て、露風の〈象徴〉の世界について考察し論じていきたい。

(一) 『白き手の獵人』が成立する過程、精神の模索と回復

まず最初に『白き手の獵人』が成立するまでの過程を見ていきたい。『白き手の獵人』以前に露風が刊行してきた詩

集として、第二詩集『廃園』と第三詩集『寂しき曙』（明四三・十一 博報堂）がある。

『廃園』での制作年代と作品の変化の過程の關係について。中島は、「内的世界の相違、發展とも深く関わっている」と述べている。同時に「例えば最も顕著なのは「二十歳までの抒情詩」で、『夏姫』の明星派的な浪漫性とは異なり、一部には自然主義的な発想さえ見えるが、全般的には明るく、温雅で、健康的で、自然と調和した世界が多く、表現技法では他の模倣的要素も少なくない。そうして象徴的要素の少ない作品群であるといえよう。これに対して『廃園』篇や『暗い扉』以下）及びそれに続く「涸れたる噴水」などには、次第に憂愁の色が深く内在化し、象徴的要素もかなり多く認められる」と指摘した。

同様に『三浦仁は』初期田園浪漫詩における自然が、より複雑に心象化されることによって『廃園』の印象派的自然につながり、同時に前者のロマンチズムが本来の健やかさや明るさを失って、（略）『廃園』詩の基調をなす感傷的ロマンチズムに変質して行く様が、鮮やかに見て取れる」と述べている。

以上のことから、『廃園』の制作時期と構成からは、露風が「明るいローマン的な抒情詩」から次第に「内的な苦渋に満ちた作風」へと作風が変化・展開していく過程が読み取れる。つまり露風は『廃園』刊行期に、明るく生命を賛美する抒情詩から、象徴詩的要素を含んだ、しかし象徴詩とは言い難い（露風独自の象徴詩）という詩風を確立したのである。このような露風の（象徴）への歩みの過程を孕んだ詩集として、『廃園』には重要な意味があると考えられる。

続いて『廃園』の成立した背景にも着目しておきたい。作中では「追憶」という語の頻出を筆頭として、西欧詩人や上田敏の影響を大きく受けたであろう露風の姿が認められる。この影響を受容することによって、露風は『廃園』で主に自己陶醉を孕んだ抒情性・象徴性を表出することができたのではないか。またその表出には、露風の象徴詩の萌芽と素地を認めることができると言えるであろう。

また『廃園』に収められた作品「ふるさと」では自身の悲恋に終わった恋愛体験が背景にあることが。家森長治郎によって指摘されている。露風は明治三十七年十一月に岡山県の私立中学閑谷校に転学しているが、ここで太田茂代子という女性と知り合い、恋愛関係を築いた。太田とは結婚の話も出るほど親しい関係になったが、露風の父節次郎によ

る反対を受け、明治三十八年十一月頃二人は別れることになった。その後太田は別の男性のもとへと嫁ぎ、露風は明治三十九年七月に『廢園』二十歳までの抒情詩一篇に収める作品の制作を始めた。明治四十年一月に太田は長男を出産したが、同年十月、露風は「ふるさとの」を制作している。

このような背景があり制作された「ふるさとの」を受け、「露風は「ふるさとの」によって初めて現実的存在の彼方に美的存在を仄知し得た」のではないかと、森田は述べている。露風が太田との悲恋の経験を経たことよって「ふるさとの」を制作できたと考えた時、「ふるさとの」に認められる美的情緒や憂愁の陰りといった詩的性質は、以上に示した太田との恋愛という実体験によってもたらされた産物と考えることができるであろう。

またそのように考えた時、前述した「明るいローマン的な抒情詩」から次第に「内的な苦渋に満ちた作風」へと展開する『廢園』について、露風に「内的な苦渋」を授けたものが以上に示した悲恋の実体験であったと考えられるのではないか。

露風はここまで述べた上田敏らによる影響や自身の悲恋という経験を素直に受け止め、第二詩集『廢園』を刊行した。この影響と体験は『廢園』に多様な性質・詩的性格をもたらしたと同時に、露風に象徴詩の構築及び〈象徴〉という精神への歩み寄りを可能にしたのではないか。

さて、その後露風は本稿で取り上げる第四詩集『白き手の獵人』（大ニ・九 東雲堂書店）を刊行し、ここでその象徴性が高く認められた。¹⁰『白き手の獵人』の序文（大ニ・初秋）には明治四十三年から大正二年の夏までのおおよそ三年間の作品を集めたことが記されており、このことから『寂しき曙』（明四三・十一 博報堂）と『幻の田園』（大ニ・五 東雲堂出版）の間に位置する過渡期の詩集であることが分かる。そのため象徴性が認められる『白き手の獵人』の作品には、『寂しき曙』で得た性質との連続性があると考えられる。

以上を踏まえ、本節ではまず『白き手の獵人』に至るまでの展開整理として『寂しき曙』に主に焦点を当て、詩的性格の変化の過程を明らかにしたい。『寂しき曙』の詩的性格を探ることで、地続きとなっている『白き手の獵人』の性質と詩的性格、そして「最も象徴詩的」と評された『白き手の獵人』の象徴性の内実を考察していくことがねらいであ

る。

『寂しき曙』は一年三ヶ月という短期間に制作された詩集であるが、露風は詩作について¹¹「私が第三詩集『寂しき曙』を出した時、私は敬虔な精神に充されてゐた」、¹²「四三年前後は余が人生の最も悲しき方面に足を向け初めし頃の作にして、今日より謂えば余が象徴の作風は、この頃の感情にその根をおけり」と述べている。¹³佐藤房儀は当時の露風の実生活が「かなりデカダンだったらしい」ことを指摘し、またそのような生活から「自己蔑視や反省」が生まれていたのであらうと述べた。

このような精神的背景について、¹⁴岡崎義恵は「『寂しき曙』になつて露風の詩境は著しく幽暗の中に沈み、思想詩・冥想詩の風を帯びるに至つた」と評している。同時に「私はこの集に現れた深刻な精神の苦悶を、藤村にも晩翠にも、泣菫にも白秋にも見出すことはできないと思う。(略)むろん、白秋・朔太郎の官能や神経には近代色が著しく、それは露風の比ではない。また、光太郎にはデカダンスからヒューマニズムへの脱離が、力強く歌われており、その強健な力感、露風の及ぶところではないであらう。しかし、近代自我の内部の分裂・相剋を、深く深く内部に探り入つて、喰い入るように把握した詩人は、『寂しき曙』の作者の外に求められないのである」と述べた。露風はこの時期に自身の精神を深く探り見つめ、そこで得た精神の苦悶、苦悩を『寂しき曙』に表した。

以上のような精神状況を背景として制作された作品は、『廢園』で見られた甘い感傷的な自己陶醉的情調の性格を取り去り、より深く、苦悩に満ちた陰鬱な性格を打ち出した。それを表す作品として、例えば「神と魚」(明四三・二『スバル』初出。初出時の題は「魚」)がある。以下に本文を記載する。

神と魚

つねに曙の寂寥に棲む。

太陽は海の彼方をめぐり、

夜はまたこのところを忘れ去る。

神の名を彫りてその石を埋め、
その石埋れてふたたび見ず。

ああ！ 雪は単調なる世界を築く。

葉もなき木は、

凍れる池の上に影を映せり。

長き時を費せども、その影うごかず。

いま見よ。魚は下より浮びいづ。

魚は下より……事もなく外をうかがふ。

この作品について¹⁵ 中島は「この詩はやはり露風の当時の内的心象の風景化である」とし、「絶望的な心情の底から、絶対者を、信仰を望み見ようとする発想は、近代詩史の中でも特筆すべきものであると評した。同時に、露風はここで「初めて真の被象徴内容を掴んだものといえよう」と述べている。前述したように、露風はこの時自身の精神を見つめ探ることで、自身の陰鬱と苦悩を発見した。そこからの救済を神という絶対者に求めた点は、〈絶望〉と〈救済〉という観念を〈神〉という被象徴対象を登場させることによって具現化した、ひいては象徴詩へと押し上げようとしたことが考えられるのではないか。中島の指したような、露風がここで得たであろう「真の被象徴内容」とは、絶望や救済の観念を前にした神という存在ではなかったか。

また続けて中島は「青春の頹唐により肉体的・精神的に疲労の極に立ち尽くした露風が、やがて深く自己を内省し、その滅びてしまった心に、(略)曙光を見出した」ことを表しているとも述べている。葉も木もなく雪に埋もれて凍った大地を、池の下からじっと見つめる魚の様子には、確かに露風の精神的圧迫感と絶望、苦悩を見出すことができるであろう。そして神という存在に身を寄せ救済を求める魚の姿は、中島の言うように「特筆すべきもの」であったと同時に、露風の信仰心の発露であったと考えられるのではないか。

さて、ここで露風と宗教の関係について触れたい。後年の露風は洗礼を受け北海道のトラピスト修道院で講師となるなど、信仰心を篤くして神や宗教、ひいては宗教詩に傾倒していくのだが、この段階での露風と宗教の関係について¹⁶三浦は、露風が「『寂しき曙』から真つ直ぐに信仰に入れたわけではない」ことを指摘している。同時に「露風は、四二年末から翌年初めにかけての作品で、世紀末感情の高ぶりと急速な宗教への接近の姿勢を示した。がそれが直接詩の表面に現われるのは前記のわずか数編の作品においてであった。これ以後『白き手の獵人』の後期(大正二年)に至る期間に再び神が語られることはなかった」と指摘している。

宗教への傾倒と信仰の発露を見せながら、その後なぜ神の名が作中に現れることがなかったのか。その理由について、三浦は続けて露風の確立した美意識に着目し、「彼が『廃園』において確立した美意識というものは、対象ないしは主観そのものをつきつめて行くのではなく、対象が主観に反映して生ずる情緒の漂いの中に詩を見出しそこにおほれるという種類のものであった。(略)たとえば愛を歌う時、激しい恋愛感情それ自体がモチーフとなるのでなく、その周囲にまつわる気分・雰囲気そのまま分析されずに一つの詩の世界を形作」¹⁷っていることを指摘した。

この三浦の指摘をもとに、『廃園』で認められた抒情性と象徴性の視座から考えてみたい。前述したように『廃園』期では西欧詩人らから受けた大きな影響により、「追憶」の語の類出などそのまま自身の作品に落とし込む面が見られた。そこからは露風の受容したもの、影響を受けたものに対する素直さ、言い換えれば模倣性が指摘できる。

このように『廃園』期から持ち越された模倣性によって、露風の詩作の目とも言える美意識は被象徴内容を分析・分解し得なかったのではないか。つまり三浦の言葉を借りれば、露風の作品は彼の美意識がまさに情緒・雰囲気に「おほ

れる」こと、情緒に陶醉することで成立したと考えられる。

更に三浦は続けて、「こうした美の意識は『廢園』の印象派風の佳作を成す基となったが、同時に『寂しき曙』のかかえていたテーマを究極までつきつめることなく再び愛と追憶の抒情に引き戻す要因ともなった」と述べた。『寂しき曙』で露風が発見した性格は、前述したように精神の模索による陰鬱と苦悩であり、これらは同時に同作の主軸的テーマとなって露風の美意識という基盤を経て打ち出された。

しかしここで得た苦悩と陰鬱は、露風の精神に根付き内面化したものではなかった。ここで露風の『白き手の獵人』に記載された¹⁸散文「湖畔より」（明四十四・十二）を見ていきたい。

あとの一年間は君の知るとほり僕の生活は悲劇に落ちてゐる、悪い文明が中毒をあたへた。僕の感情はその結果いやが上にデケーしてしまったのだ。でも幸なことに生なか助からなくて僕の心は滅びてしまったが、純潔は灰色の中に芽をふいた、ウオルフは去つた。今僕の形骸ばかりの胸には僅かに消ゆるばかりの恍惚の焰が纏はつてゐる。正直に僕は云ひたいが悪い文明を目的にして歌ふのではない、素朴な純潔な涙を少しでも持たないといふなら、悪い文明そのものに何の価値もない。一体悪い文明そのものが嘘である、僕はもつと純白な深い境地のあることを知つて居る。

「悪い文明」によつて苦悩し、精神を模索した露風は、その過程で失つたものもあつたが得たものもあつたようである。そしてその〈得たもの〉によつて拓けた新しい境地に幾らかの希望・新しい詩作の境地を見出したようであつた。

この時期の露風の実生活についての詳細は不明だが、明治四十三年の六月にあつた大逆事件に着目したい。この事件は時代そのものに大きな影響を及ぼし、詩人や表現者に閉塞と圧力を感じさせた。露風はその五ヶ月後の十一月に『寂しき曙』を刊行、そして四十四年には慶応大学を一年の在籍期間を経て退学している。これらの事から、露風もまた大逆事件に影響を受けた表現者の一人であつたであろうことが考えられる。この影響が露風の精神に陰りをもたらし、苦

悩と陰鬱の種を撒いたのではないだろうか。

以上の散文について中島は¹⁹「青春性の喪失にまつわる肉体的・精神的な病の恢復と共に癒え去って行くのであり、深い近代的な自我分裂の相克に悩んだ、云わばテカダンの魂の悲劇を味わい尽したものの言葉ではない。(略)それは真の思想詩ではなく、どこまでも思想的な、瞑想的な、情調のための情調といった性格を免れるものではないといえよう」と述べている。つまり露風の精神の模索と苦悩という〈悲劇〉は一時的であり、〈得たもの〉によって精神状態が回復するものであった。この〈悲劇〉からの回復には、陰鬱と苦悩が露風の詩的性格に定着し得なかつたことが読み取れるであろう。また同時に精神の回復、〈悲劇〉や苦悩からの脱出は、露風の確立してきた情調と雰囲気²⁰に陶醉し「おほれる」美意識によって行われたのではないか。

ここまで『寂しき曙』に焦点を当て、露風の精神の模索と苦悩による陰鬱な詩的性格の表出を明らかにし、そこからの脱却として信仰と神への希求があつたことを考察・指摘してきた。しかしこの時期、続いて宗教・神へと傾倒しなかつた点からは、露風の苦悩が一過性のものに過ぎなかつたことが考えられる。

精神の模索と苦悩は『寂しき曙』に陰鬱という詩的性格をもたらししたが、同時にそれが一時的であつたこと、「おほれる」美意識によって苦悩した精神の回復が可能であつたことから、陰鬱や苦悩が真に内面化することはなかつたと考えられる。そしてそのような陰鬱の非内面化・陶醉する美意識への回帰こそが『寂しき曙』から『白き手の獵人』に持ち越された性格であり、問題であつた。

このような精神的背景により成立した『寂しき曙』の性格は、どのように『白き手の獵人』へと繋がり、『白き手の獵人』を「象徴詩集」としたのか。本節を踏まえたうえで、次節では『白き手の獵人』に焦点を当て考察していきたい。

(二) 『寂しき曙』から『白き手の獵人』へ

『白き手の獵人』は露風詩集の中で最も象徴性の高いものと評されている。本節では『白き手の獵人』の作品を取り

上げ、前節で述べた『廃園』『寂しき曙』から続く詩的性格に着目しつつ『白き手の獵人』に見られる象徴性について考察していききたい。

まず『白き手の獵人』は以下の五篇に分類できる。分類はおおよそ作品の発表年月・制作年に従っているとされ、このことから『白き手の獵人』が前述したように『寂しき曙』と『幻の田園』の過渡期の作品であり、詩的性格を前集から引き継いでいること、あるいは次集に繋がっていることが言える。以下は²⁰中島を参考とした『白き手の獵人』の分類である。

「谷間の風」…『寂しき曙』に続く。全て明治四十四年に発表され、青春性の喪失に纏わる苦悩とそこからの脱出の情調が主題を成す。

「血の嬰児」…全て明治四十五年に発表。人生と自然に対する最も深い蠱惑的情調が形象化された、特に象徴性に富んだ群といえる。

「僧の娘」…集中唯一の劇詩的発想を採ったもの。

「知恵」…主観的だが知性によって捉えられたことがうかがえる。他篇よりもドライで思索的認識性を有していると考えられる。

「想曲」…最後の五篇を集めたもの。心中の醸された想いの世界を自然の叙景を通して表現したものなど、心の想いを中心にしている。

中島は以上のような分類を成す『白き手の獵人』について「『寂しき曙』において認められた青春性の喪失に纏わる苦悩、悔恨、救済に関する詩情に始まり、やがて青春や人生に対する深い情感が情調象徴として形象化され、更には自然の洞察へと進展していく」と述べている。つまり『白き手の獵人』は、前述した『寂しき曙』で得た青春への喪失・苦悩・悔恨を核として情調的・象徴的な世界を形成し、後に自然へと意識を独立させ（自然そのものの本質的生命）を

捉えようとした、露風の精神的展開をも示していることが考えられる。本稿では露風の象徴詩について取り上げるため、自然や生命へと意識を向けていく以前の「谷間の風」篇と「血の嬰兒」篇に特に焦点を当て論じていく。

まずはこの時期の露風の精神と生活について触れておきたい。前出した『寂しき曙』期の露風には、悪い文明による悲劇や陰鬱・苦悶を抱え、自身の精神を探り見つけた姿があったことを述べてきたが、『白き手の獵人』でもそのような精神状況があったと述べている。²¹以下は『詩歌の道』「我が詩作の径路」(大十四・七 アルス)という露風の自著に記載された、露風が当手を振り返った際に書かれたものである。

(略)『白き手の獵人』を出すまでの三年といふものは、私にとつては陥没の時代であった。(略)

その頃私は、非常な懐疑に落ちてゐたので、詩も殆ど遠ざかつたようになっていた。沼津で公協会へ時々行つて暮してゐたことや、京都での僧房生活などは、私にとつては寔に意味ふかい記憶である。

で、ともかくも、三年たつて後、初めて其三年間の巡礼生活の様な間の詩を集めて見る気になつた。それは丁度向ふの峰からこちらの峰へわたるのに、非常に深い谿があつたように、さういふ時期を経たけれどもやはり眞実を求むる心の行途を追ふといふ気分、同じ連続にちがひなかつた。そして「雪の上の鐘」「雪の上の郷愁」といふやうな詩を書いたのである。純白な何もない雪の降り積つたしんとした——さうした境が、夢寢に通よつてゐたのである。

このように、『白き手の獵人』刊行以前の露風はその精神を「陥没」「非常な懐疑」というように表している。しかしここからの回復については、「眞実を求むる心」があつたことを述べている。

鬱屈した精神の回復と露風の回復する美意識の問題については前節で述べたところである。ここではその精神、回復と回復を経て表出された作品について触れていきたい。以下は前述の自著に記載されている「雪の上の鐘」(明四四・一『新潮』初出)の本文である。

雪の上の鐘

心の上に暮れ方の
追憶おもひでの雪は静にふりつもる。
単調にしてあぢきなく
柔らかに顫へつゝ。

埋うづもるゝ愁は下に眠りたり。
わが声は閉ぢ、覆はれて、
燃ゆる墓標に胸ををく。

されども響く鐘の音の美しさ、
晴れし涙の涼やかさ、
静に。静に。うち揺らぐ。

わが心はうち夢む、
はてなくあゆみ行かんとぞ。

あ、彼方なる谷間の風
ゆるく幽かすかに我が胸をよびさます……

愁の銀の日没は、

わが身に深くほゝゑめり。

かよわき雪の青草よ、

あゝ青草よ。汝のごと募ひいでん——

彼方に。彼方に。手も纖弱かよわく。

「雪の上の鐘」は『白き手の獵人』の巻頭を飾った詩で、前集『寂しき曙』に続く「谷間の風」篇に分類される。『寂しき曙』から続く詩的性格である苦悩と悔恨の表出について、作中に登場する「燃ゆる墓標」に着目して考えていきたい。これについて²²佐藤は「憂いや嘆きの声といった過去のものが埋まっていることを示す標である」と指摘した。過去苦悩と悲しみに苛まれ、精神の模索を経たことで生まれた「わが声」は「追憶の雪」が静かに降り積もるなか、「燃ゆる墓標」という目印を残してともに埋まっていくなか、

「燃ゆる墓標」という表現を見たとき、そこに「墓標」という明確な標をもって埋まっている苦悩や悔恨を発見することができる。それらは前集『寂しき曙』で発見・確立された詩的性格であり、その存在を示す「墓標」は『寂しき曙』からの繋がりを表すものであったと同時に、露風の過去の精神の模索と苦悩を象徴するものであったのではないか。次に「雪の上の鐘」と同時期に発表された「白き手の獵人」(明四四・一 『三田文学』初出) について触れたい。以下に本文を記載する。

白き手の獵人

太陽は、かがやく絹につゝまれ
終をほりのほゝゑみは白く熱したり。

そは我らの上、
草木そうもくと恋との上に。

身は深き憂うれひの中につゝまれて
すゝり泣く風景の、

光の陰をさまよひたり。

あゝ君が白き手の獵人よ、

君が手は何か探りし。

優しき胸のみだれたる草叢くさむらに、
黄金こがねなす草叢に。

君が手はかくも告げなん、

『百合はくげがつくりし罍たいの中

宝石の胸やぶれて

傷きし小鳥はそこに死したり』と。

かくて今、太陽は終りに呼吸す。

われらが野よりの小逕せみちに、

日は美はしき靈魂の如くにまた。

「白き手の獵人」でも「身は深き憂の中につゝまれて」や「傷きし小鳥はそこに死したり」といった箇所箇所に喪失

と苦悩、悔恨の情を見出すことができる。しかしそれらの陰鬱は「かがやく絹につゝまれ」ている「太陽」や「黄金なす草叢」、「恋」によって柔らかく包み込まれる。陰鬱を柔らかく美しい情調で包みこんだ表現からは、露風の腹想性と幽女の美といった性格が見て取れる。

以上のように、この時期の作品では前集に続く苦悩や悔恨、喪失といった陰鬱が見られる。「白き手の獵人」ではそれを柔らかく美しい情調で覆い、「雪の上の鐘」では「されども響く鐘の音の美しさ」というように展開していく。これらをふまえて次は「雪の上の鐘」の「鐘の音」に着目し、二作品に見られたような陰鬱と美しい情調の表すものについて考察していきたい。

「雪の上の鐘」に突如登場する「鐘の音」について²³中島は、「寂しき曙」の頃とは違って、明確に救いの鐘の音と希望の谷間の風とを見出し、涙に濡れつつも明るいほほえみの境地に至²⁴っていると指摘した。同時に福島朝治は「激しい情念は影をひそめ、穏やかな追憶の情は「燃ゆる墓標に胸をおく」ばかりで、しつとりとしたいとおしみの気が支配している。(略)彼の視線は、むしろ強く未来へ投射されていることを次の連は示している。(略)「鐘の音」の響きに心洗われ、その音にうながされるように、彼は新たな人生に向かって「はてなく歩み行かんとぞ」思うのである」と述べた。つまり苦悩と陰鬱を内包した「燃ゆる墓標」は、次の瞬間に「鐘の音」によって救われ、希望をもって未来、福島の言うところの「新たな人生」へと向かうのである。

以上をふまえると、作中の「鐘の音」は苦悩からの回復の象徴であったと同時に、未来への希望を表す象徴でもあったことが考えられる。そして〈苦悩からの回復〉は、前述したように『寂しき曙』で陰鬱や苦悩が露風に内面化しなかった要因であった。「鐘の音」という表現から苦悩からの救済、回復の象徴という要素を読み取ったとき、そこには陰鬱・苦悩の非内面化という問題が『寂しき曙』から持ち越されていると考えられるのではないか。

さらに苦悩や陰鬱からあつさり²⁵と救済される点には、露風の『廃園』時代に築いた甘い陶醉の潜在と回帰を認めることができる。同時に中島は「露風の内的・思想性の限界が示されている」と指摘している。前節で述べたように、露風は陰鬱や苦悩を内面化することができなかつた。その非内面化を表し、また補完するように用いられたのが

美しい優雅な情調や言葉による救済と回復であったと考えられる。そして安易な救済と回復に作品の舵を切った点に、中島の言うところの「露風の思想性の限界」を認めることができるのではないか。

(三)「血の嬰兒」篇に見る二つの面、精神の陰り

「谷間の風」篇で苦悩と陰鬱から優雅に回復し、その点に「思想性の限界」を垣間見せた後、露風は「血の嬰兒」篇を制作・発表する。「血の嬰兒」篇について中島は「最も象徴性に富み、集中の白眉であるだけでなく、我が国の象徴詩の最高峰を示すものといえ得る」と高く評価し、「その被象徴内容はいずれもわが人生に対する内なる想いであるが、その発想にはやや異なった二つの面が認められる」と述べた。

それでは「最も象徴性に富んだ」とされる「血の嬰兒」篇に見られる〈二つの面〉とは何か。本節では「血の嬰兒」篇の作品を取り上げ、この〈二つの面〉という特徴と性質を考察し明らかにし、露風の構築した象徴詩の詩的性格、ひいては露風の象徴詩の内実について考えていきたい。

まず一つ目の面として、「自己」の心情を中心とした幻想的情調²⁶がある²⁶とされている。これについて「苦悩の歌」(明四五・二二)を取り上げ考えていく。以下は「苦悩の歌」本文である。

苦悩の歌

暮れてかゞやくわが胸に、

夜の潮の寄する時。

死のほめうたか、蒼ざめて『苦悩』がよばふもろごゑか、
緑いろなるあこがれの

船の帆ばしら音にひゞく。

のすたるぢあよ。満潮みちしほに、

うねりも痛くおそろしく

悪しき願ひのもろつばさ

影のごとくにはらみたる。

あたりは金の朧ろめき、

秘密の青のおほろめき、

悩みの天にさしゝめす

雲の旗手はたての星じるし。

飢ゑてかゝやく霊の

黒のなやみの星じるし。

あやしき海よ。わが船は、

燦爛として遅々として

ながめのなかにおしすゝむ。

されば悲しき形なまがら体も、

さみしき恋の幽霊も、

ほのほのごとくすゝり泣き

かの鳥かげになほたのむ

恍惚をこそ慕ひたれ。

夜は群青のびろうどの

波の上へのりあぐる。

不言ふごえの嵐渦まける

波のゆめぢへのりかける。

のすたるぢあよ。なほ強く

わが胸の上にこゑあげよ、

悲しみに酔ふそのこゑを。

のすたるぢあよ。いと強く

暮れてかゞやく夜の潮に。

この作品では『寂しき曙』及び「谷間の風」篇で見られたような陰鬱、苦悩の性格がよく見られる。そこには苦悩と陰鬱という内面化し得なかつた詩的性格への回帰と、その際に安易に回復と救済に走つた反動が見て取れる。

また『寂しき曙』や「谷間の風」篇の作品とは異なり、苦悩や陰鬱、悲劇的な精神の陰りが救われず、回復・救済の兆しが作中には見られない。そのような救済と回復の代替として、作中には本軸に据えて描かれる苦悩や悲しみすらも超越するかのような、強く胸にこみあげてくる「のすたるぢあ」の恍惚と陶醉の姿がある。

これについて²⁷三浦は「長い間彼を犯した精神の病がついに彼を滅ぼした時に生まれた、いわば放心に近い一種の恍惚感とでも呼ぶべきものであった」と述べている。露風は苦悩や陰鬱の内面化による作品への昇華・投影には至らなかつたが、精神にはその苦悩と陰鬱といった精神の陰りそのものが長くあつたのではないだろうか。その陰りこそが作

品に苦悩や悲しみ、陰鬱の性格を少なからずもたらした要因となったであろうし、前述した安易な回復と救済・神への希求からは、その陰りと真向から対面することを避けた露風の姿を見出すことができる。これらのことから、苦悩と陰鬱を昇華できなかったという露風の不徹底さが、「血の嬰児」篇で〈ただ感情を叫び恍惚する姿〉を表すに至った要因であると考えられる。

同時にこの作品からは、露風が自身の内に眠る陰鬱・苦悩といった己の感情の叫びを被象徴内容としていたことが考えられる。自身の内なる心情を〈叫び〉として、それを放心したように恍惚と情調的にうたった点が〈一つ目の面〉の特徴ではないか。

次に二つ目の面として「浪漫的憧憬とアンニユイの虚無的信条とが、自然の風物の中に融け合わされ、一元化して表現されたもの」が挙げられている。これについて「死のねがひ」(明四五・一『朱欒』初出)を取り上げ考えていきたい。

死のねがひ

香^{なほ}へる国の日没は

遠きはてよりよびぎます、

衰^{おとろ}へし身のくれがたの

金紗^{きんしゃ}の夢に落つるこゑ。

のぞみ溺るる空あひに

秘密の光かがやけり、

焰はいつか蒼ざめて

花の香ひを焦がす時。

幽かに、幽かに薄暮くれがたの
我が風景は泣きよばん
よるめく森の悩ましく
死の恍惚のきたるまへ

心の内にいと惨むじき、優しき力我は知る

夜中となれど日は落ちず、

空は皺だむ練絹に、

金と黒との死の願ひ

燦めきながら、揺れながら。

この作品の「衰へし身」や「金と黒との死の願ひ」といった箇所には、前述した「苦悩の歌」のような陰鬱な詩的性格を認めることができるが、「香へる国の日没」や「花の香ひ」といった自然や風景の登場、またそれらによつて与えられる生命の印象が「苦悩の歌」と異なる点である。陰鬱・苦悩という精神の陰りが自然の風物と融合し表現され、アンニュイとも虚無とも捉えられる独特で微妙な情調を読み取ることができる。このことから、苦悩や陰鬱と自然の情景との融合が〈二つ目の面〉の特徴であると考えられる。

ここで作中に登場する「恍惚」という語に着目したい。²⁸ 前述した四十四年十二月に書かれた散文「湖畔より」に立ち返ると、『白き手の獵人』を制作する以前の精神状況について露風は「今僕の形骸ばかりの胸には僅かに消ゆるばかりの恍惚の焰が纏はつてゐる」と記している。

「消ゆるばかりの恍惚の焰」は、露風の『白き手の獵人』を制作する意欲そのもの、あるいは苦悩と陰鬱の精神を経

て生まれた露風の詩作状態を表すのではないだろうか。その精神によって露風は象徴詩集として高い評価を得た『白き手の獵人』を制作した。²⁹三浦はこの精神について『消ゆるばかりの恍惚の焰』は、『黄昏のゆめ』『窓』あたりから明確に作品に表れ、「死のねがひ」（明45・1）「苦悩の歌」（明45・2）（略）などにおいては、一種の幻覚・幻想を生むに至るのである」と述べ、露風の有していた「消ゆるばかりの恍惚の焰」の「谷間の風」篇後期に作られた作品からその精神が認められること、そして「最も象徴性に富んだとされる「血の嬰兒」篇では、その精神により生まれ得る効果として幻想と幻覚の世界があることを指摘している。

「苦悩の歌」でも「恍惚をこそ慕ひたれ」のように「恍惚」という語の登場がある。また精神の苦悩と陰鬱による感情の叫びの様子に〈恍惚〉の状態・詩的性格を見出し、それが一種の苦悩と陰鬱による放心の状態かつ〈二つ目の面〉であることを述べた。

「死のねがひ」では「死の恍惚のきたるまへ」のように「恍惚」の語が登場する。同作は精神の陰りと自然の情景の融合が認められ、それがアンニュイで独特な情調を生み出して〈二つ目の面〉となっておりであろうことを述べた。

二作には同語が登場すること、また制作時期が近いこと、散文の書かれた時期から間もない時に制作された作品であることなどから、恍惚と放心、自己陶酔の精神は二作に共通する詩的性格であると考えられる。苦悩や陰鬱といった精神の陰りを内面化できなかつた露風は、そこから『廢園』時代に築き上げた幽玄の美意識によつて救済と回復を得、神への希求を覚え、『白き手の獵人』『血の嬰兒』篇で恍惚の境地を見出した。そしてその恍惚の境地は、「苦悩の歌」や「死のねがひ」のような露風独自の象徴詩をもたらしただけではないか。

おわりに

ここまで『廢園』『寂しき曙』から『白き手の獵人』へと続く過程を明らかにし、そこに地続き的に存在した陰鬱や苦悩、悔恨といった精神の陰影、またそれらの非内面化を軸として『白き手の獵人』に見られる詩的性格を考察して

きた。

（精神の陰り）について、露風はこれ以上苦悩や陰鬱を内面化し作品に投影・昇華することができなかつた。そしてその非内面化を「おぼれる」美意識への回帰による美しい情調に溢れた救済と回復によって補完しようとしたことは、作品に漂うムードあるいは叙情性の性格を強めたと考えられる。それは露風独自と評価された（露風の象徴詩）の内実であり一端ではないだろうか。

これについて³⁰佐藤は『白き手の獵人』では、はかなくとらえどころのない観念を、表現しようとしている」と述べ、同時に「その傾向は、明確に認識できるものをも、情緒的にぼかしてしまう結果になった」と評している。

これらのことから、『白き手の獵人』に見られる象徴性の内実には、精神の陰りの非内面化と「おぼれる」美意識による回復と救済があつた。また（精神の陰り）は放心的・恍惚的な感情の叫び、さらに自然情景との融合によるアンニュイな情調という（二つの面）をもたらしたと考えられる。

その後、露風は次第に自然や生命といった人間を超越した存在へと意識を向け、第五詩集となる『幻の田園』（大四・東雲堂書店）を刊行する。ここでは象徴詩から遠く離れて、神や信仰、宗教へと傾倒する露風の姿が認められる。露風の象徴詩は『白き手の獵人』が頂点となつたと同時に終点を迎えたのである。

注

- 1 露風の概略について、『三木露風研究…「廃園」の成立』（昭五二・五 明治書院）森田実歳 p 5—p 16、『日本の詩歌』二 土井 晩翠・薄田泣菫・蒲原有明・三木露風』（昭四四・三 中央公論社）松村緑 p 403—404を参考にした。
- 2 『三木露風研究…「廃園」の成立』（昭五二・五 明治書院）森田実歳 p 7
- 3 2に同じ p 15—p 16
- 4 2に同じ p 3—p 4
- 5 『象徴詩の研究——白秋・露風を中心として——』（昭五七・九 桜楓社）中島洋一 p 131

- 6 ページとも5に同じ
- 7 『研究 露風・犀星の抒情詩』（昭五三・三 秋山書店）三浦仁 p 22
- 8 「へふるさとの」成立考——そのモデルをめぐる——」（昭四三・九 稿）家森長治郎
『続・三木露風研究』（昭五八・九 光洋社）安部宙之介 p 28に寄稿したものを引用した。
- 9 2に同じ p 202
- 10 『三木露風全集 第一卷』（昭四七・十二 三木露風全集刊行会）p 96
- 11 『我が歩める道』（昭三・七 厚生閣書店）
- 12 『三木露風全集 第二卷』（昭四八・七 三木露風全集刊行会）のp 203を引用した。
『露風集』（大ニ・十二 東雲堂書店）序 三木露風
10のp 132を引用した。
- 13 『現代詩鑑賞講座三 美を夢見る詩人たち』（昭四三・十一 角川書店）佐藤房儀鑑賞 p 245
- 14 『近代日本の詩歌』（昭三七・八 宝文館出版）岡崎義恵 p 95
- 15 5に同じ p 159—p 160
- 16 7に同じ p 107—p 109
- 17 ページとも16に同じ
- 18 10のp 104を引用した。
- 19 5に同じ p 172
- 20 5に同じ p 174—p 175
- 21 『三木露風全集 第二卷』（前出）のp 78を引用した。
- 22 13に同じ p 257
- 23 5に同じ p 177—p 178

24	『三木露風 人と作品』(昭六十・四 教育出版センター) 福島朝治 p 248—p 249
25	ページとも23に同じ
26	5に同じ p 181—p 183
27	7に同じ p 114—p 115
28	18に同じ
29	ページとも27に同じ
30	13に同じ p 231—232

*引用に際して原則として旧字体は新字体に改め、振り仮名は適宜省略した。

*本稿における詩作品の引用は全て『三木露風全集 第一巻』(昭四七・十二 三木露風全集刊行会)を用いた。以下に引用ページを記載する。

「神と魚」	p 74
「雪の上の鐘」	p 96
「白き手の獵人」	p 97—p 98
「苦悩の歌」	p 106
「死のねがひ」	p 106—p 107

地を這う透谷——「亡友反古帖」より見えるもの——

九 里 順 子

初めに

近代文学の先駆者、北村透谷（明治元・一八六八—明治二七・一八九四）は、完成されなかつた数多くの構想を残している。透谷没後に『文学界』の元同人によつて編集された『透谷全集』（文武堂 明35・10）には、島崎藤村が保管していた一部を抜き出して紹介した「亡友反古帖」が収められている^{註1}。

「桃太郎遠征記」「四条畷」（以上、十九歳または二十歳頃）「人間村漫遊記」「別乾坤搜索日記」「地獄極楽巡遊日記」「平家行」「常盤曲」（以上、二十二歳より二十三歳頃）等、御伽草子、戯作、謡曲を思わせる題名は、透谷の関心の幅と伝統的な文芸への親炙を窺わせる。中でも、藤村が、二十二歳より二十三歳の頃と推測する中にある「荒野の戦ひ」は、その破天荒な筋書きが印象に残つたと見えて、次のように記されている。

（其脚色は非常に豊饒なる野ありてこゝに曾て蛇を平げたる一の大なる蛭蝮が野の長となり、でん／＼虫が箱をか
ついで配権を執行し居り、其臣下には虻、蜂、とんぼ、螢、芋虫、毛虫、蚯蚓、蜥蜴、まつ虫、すゝむし、くつは
むし、蛙、きり／＼す、蟬、蜻蛉、赤とんぼ、蝨、ばつた、ひぐらし、かじか、虱、蚤、宮守、蟻、油虫、蠅、蚊、
げじ／＼、百足、わらじ虫、けら、ふくろぐも、くさひばり、玉虫、黄金虫、などありて双蝶を主人公となし、
こゝに蛇外より来りて彼等と戦ひ全く荒野となるの趣向）

蛭蝮が蛇を討ち破つて野を支配するという着想も荒唐無稽だが、登場する夥しい虫に驚かされる。成敗された筈の蛇

がやって来て、戦乱の果に全てが壊滅するという結末も、「石坂ミナ宛書簡草稿 一八八七年十二月十四日」に、「蓋し未来の結果を想像する時ハ、再びのあの洪水を来たすか然らざればあまたのくりすとを出すにあらざれば、到底社界の破滅を免れざらん」と書かれている透谷の虚無的な世界観が、依然として根底にあったことを感じさせる。蝶というモチーフは、短い晩年に書かれた「蝶のゆくへ」（『三籟』7号 明26・9）「眠れる蝶」（『文学界』9号 明26・9）「双蝶の別れ」（『国民之友』204号 明26・10）という一連の抒情詩に見られるように、透谷の魂の表象であるが、次から次へと多種類の虫を挙げていく透谷の筆の運びには、憑かれたような昂揚感が感じられる。透谷が記しているのは、虫という概念ではなく、それぞれの生身の存在としての虫である。透谷の虫へのこのこだわりは何であるうか。

一、自己投影と俳句

「亡友反古帖」には、題名は記されていないが、「戯曲」として、「蚯蚓を見て感あり／蚯蚓、鼠、猫、狐、等いろいろのもの人間位の大きさにして、形を造りて各その思ふところを言はしむべし、／而して之を人に比較すべし。／智情意の動物をして各其性質を顕はさしめば妙」という覚書もある。異類譚の趣もあるが、「而して之を人に比較すべし」と人間を相対化する存在として設定されている。これは、創作上での着想にとどまらない透谷の指向性である。透谷の日記の抄出である「透谷子漫録摘集」（前出『透谷全集』所収）を読むと、「○地龍子／行脚の草鞋紐ゆるみぬ。胸にまつはる悲しの恋も思ひ疲るゝまゝに衰へぬ。と見れば思ひもうけぬ所に目新らしき花の園。人のいやしき手にて作られし物と変りて、百種の野花思ひ／＼に咲けるぞめでたき。何やらん花の根にうごめく物あり。眼を下向けて見れば地龍子なり」（明24・5・9）と透谷の視線は、野の花の根元に這い出した蚯蚓に向かう。翌明治二十五年一月十五日には「コーサンド氏より愈々免職の相談あり帰途歩上作あり。／ぬらく／＼とからはなれた蝸牛」と伝道師のコーサンドが一時帰米するため、通訳の仕事を罷免されることになり、新たな決意を示す句を詠んでいる。この場合も、「から」という保護を脱ぎ捨てた剥き出しの蝸牛に自分を擬えている。橋詰静子が「透谷は、蛭・蝸など」「地を這うもの」に自

分を擬すことがある。」と指摘しているように、地中に棲み、地を這う虫に透谷は自己投影しているのである。これは、小説「我牢獄」(『女学雑誌』甲の巻 320号 明25・6)の「デンマルクの狂公子を通じて沙翁の歌ひたる如くに我は天と地との間を蠕ひめぐる一痴漢なり」という自己把握に直結している。虫に共振する身体感覚は、そのまま形而上的な位置付けに昇華されるのである。「人生に相渉るとは何の謂ぞ」(『文学界』2号 明26・2)では、「力^{ポウリス}」としての自然は、眼に見へざる、他の言葉にて言へば空の空なる銃鎗を以て時々刻々「肉」としての人間に迫り来るなり。」と、死が不可避である人間の肉体の儚さが鋭敏に感受されている。死に到る肉体という点で、透谷は、虫も人も等しく非力な存在であると捉えていたのであろう。透谷は、そこから「吾人は吾人の靈魂をして、肉として吾人の失ひたる自由を、他の大自在の靈世界に向つて縦に握らしむる事を得るなり。」と、有限の肉体を「美妙なる自然」に跳躍し得る契機へと反転させる。地に棲み、地を這う卑小な生き物は、透谷にとつて、人間の実存を見る思いであつたのだから。

虫は俳句の季語である。透谷は、一月に夏の季語である蝸牛を詠んでいるが、心象の句なので季節のずれにこだわる必要はない。注意すべきは、心象が虫の句として詠まれたことである。橋詰によれば、透谷は生涯で二十二句を遺している。早逝したとは言え、決して多い数ではない。しかし、自由民権運動の地、川口村を再訪した折の紀行文「三日幻境」(『女学雑誌』甲の巻 325、327号 明25・8、9)では、知友で民権運動の支援者でもあつた秋山国三郎宅に宿泊し、「七年を夢に入れとや水の音」と民権運動離脱後、「一種の牢獄」「幾多の苦獄を経歴したる」と回想する七年間を印象的に詠んでいる。中山栄暁は、この句を含めた「(略)翁も亦たねがへりの数に夢幾度かとぎれけむ、むくく」と起きて我を呼びこれより談話俳道の事戯曲の事に關にしていつ眠るべしとも知られず。われは眠りの成らぬを水の罪に帰して／七年を夢に入れとや水の音／と吟みけるに翁はこれを何かと読み変へて見たり。」という記述に着目し、「批評や指導を受けたことは勿論のこと、「俳道」について学ぶところ、大なるものがあつたにちがいない。」と推測している。透谷の中に俳句は根を下ろしていたと考えられる。

国三郎、俳号龍子の句集『安久多草子』(明22・10)は、小沢勝美によつて解説され、労作「透谷と秋山国三郎 附秋山龍子句集「安久多草子」(私家版 昭49・7)に「約三千五百三十句のうちから、約二千句をえらんで収録」され

た。虫を詠んだ中で気になるものを挙げてみる。

雨らしき鐘の響きや火取虫
蟻の塔爰に尊し大三十日
灸^{やじ}する背を迂りけり冬の蠅
雛の首並へる椽や冬の蠅
冬の蠅真綿に足をつられけり
世に愛の愁も云ハす蝸牛
白桃や蛎^{かざ}の生るゝ雨後の畑
落てから蜂の出て行椿哉
て、虫の小粒になりて初時雨
蚊の声や気短に置筆の音
きりくす鳴や琵琶引袖のうら
花屑に這ハせて捨る毛虫哉
てふに成者とハ聞けと毛虫哉
吹落て丸う成たる毛虫哉
糸引た蜘蛛も落けり芥子の花
世界中見る氣て這ふか蝸牛
雷に向ふさま見ゆ蝸牛
うき世にハさハラぬ角や蝸牛
引込ハ世の中の丸し蝸牛

気配りの角に見へけり蝸牛

腹立つハ立程丸き毛虫哉

捻し向た毛虫に志さるひよこ哉

虹もはき兼ね顔して蝸牛

顔へ来た蠅の冷たき小春哉

逃る気のなきにしあらず冬の蠅

蝶程の影さす秋の藪蚊哉

生活の中で目と心に留まったものを率直に詠んでいる。『三冊子』（服部土芳、執筆は元禄十五、六年頃^註）の「詩・歌・連・俳はともに風雅なり。上三つのものには余す所も、其の余す所まで俳はいたらずといふ所なし。（略）見るにあり、聞くにあり、作者感ずるや句となる所は即ち俳諧の誠なり。」の実践とも言うべき詠み方である。観察眼が利いており、「花屑に這ハせて捨る毛虫哉」「蝶程の影さす秋の藪蚊哉」など、「俗の中の雅」である。

中でも、蝸牛の句が多いのが注意される。「て、虫の小粒になりて初時雨」は季節の推移を細やかな眼差して詠んでいるが、その他は、擬人化である。明治二十二年と言えば、二月に大日本帝国憲法発布、三月に第一回帝国議会開設と近代日本の体制が整備された年であった。それは、明治十七年の川口村困民党による八王子警察署襲撃（九月）、加波山事件（同）、秩父困民党蜂起鎮圧（十月）、翌十八年の大阪事件（朝鮮独立計画及びその資金調達のための強盗事件）と自由党員の逮捕（八月十一月）という自由民権運動の瓦解の後の成立でもあった。透谷は、明治十七年晩秋から翌十八年初春にかけて、川口村の国三郎宅で、国三郎、盟友の大矢正夫と三人で共同生活を送った。^註「三日幻境」で、「おもむろに庭樹を眺めて奇句を吐かんとするものは此家の老崎人、剣を撫し時事を慨^{うれ}ふるものは蒼海、天を仰ぎ流星を数ふるものは我れ、この三個一室に同臥同起して玉兔幾度か欠け幾度か満ちし。」と回想されており、一步引いた立場から見守っていた国三郎、透谷に強盗計画参加を要請し（この拒絶が、透谷の民権運動離脱の契機となった）自らは強盗を

決行して捕縛された大矢正夫、形而上的な志向性を持ち、運動から離脱することになる透谷、とその後の彼等の歩みも含めて三者三様の姿を描き分けている。国三郎にとつても、遙かに年若い二人と過ごした生活は忘れがたい日々であっただろう。「世界中見る氣て這ふか蝸牛」「雷に向ふさま見ゆ蝸牛」「うき世にハさハラぬ角や蝸牛」「引込ハ世の中の丸し蝸牛」という一連の蝸牛の句は、民衆の権利主張が弾圧されお上に楯突くことは許されない状況への鬱屈と、それでも気概は持ち続ける姿勢が投影されている。蝸牛は、龍子の心情を託すモチーフであり、透谷の「ぬら／＼とからをはなれた蝸牛」は同様の詠み方であると言える。

ハルオ・シラネは、「十七世紀前半、俳諧は日常の小さな虫を句に詠み、庶民の社会のありさまを表現するようになる。たとえば、前述の『毛吹草』（引用者注：松江重頼著 正保二・一六四五）には、蟻、シラミ、ケラ、カタツムリ、ナメクジ、ノミ、蠅など日常生活で出会う虫が登場する。連歌で付句をするために縁のある言葉をとめた「付合」の表では、シラミは乞食、病人、舟、藪、古い布子、花見頃などと結びつけられ、これらが俳諧におけるシラミの詩的連想となった。」と述べており、和歌が捨象した俗なるモチーフを俳諧が開拓し、新しい季語は、庶民の生活の比喩としても用いられたことが窺える。

正岡子規が「室町時代の連歌の発句から江戸時代末期の俳諧の発句までを集めて、季語別その他、いくつかの観点から分類整理した」遺稿を、高浜虚子、河東碧梧桐、寒川鼠骨が校訂し刊行した『分類俳句全集』（アルス 昭3・3〜4・9 全12巻）を見ると、「蝸牛」は、（雨）／（天文）（動物）／（動物）／（木）（竹）／（草）除竹（葉）／（地理）（器物）／（衣冠）（神人）（土木）（飲食）／（角）除肢体等／（殻）（人事）除体角等／除肢体角殻人事等、と詳細に分類され、収録された句数が多い。身近に棲み、自分の家を背負って歩むような姿が、古から興趣を誘って来たのだからか。「梅雨晴や垣ふち咭る蝸牛」（除来）「五月雨や物干竿に蝸牛」（也有）「たのみなき角とし思へ蝸牛」（晝台）「身一つは容るゝに安し蝸牛」（貫支）「心には翅もあらめ蝸牛」（午心）と、龍子の観察及び感慨に通じる。「蝸牛」の次には「なめくしり」が立項されており、「五月雨に家ふりすて、なめくしり」（凡兆）「我道を付しよ壁のなめくしり」（半魯）「なめくしりはふて光るや古具足」（風雪）「身の果はいつくなるらん土蟪」（牧人）等が挙げられている。こちらの

方が観察が鋭く繊細であり、心象としても深い。シラネによれば、「江戸時代後期になると、自然の文化的、視覚的なイメージは本草学の影響を強く受けるように」なり、一八〇三（享和三）年に、曲亭馬琴が季節と月ごとに分類された二千六百以上の季語と句例を含む『俳諧歳時記』を出版する。一八五一（嘉永四）年には、改訂増補版の『俳諧歳時記 栗草』^{註12}を藍亭青藍が出版する。この増補版は、『栗草』という名で知られ、明治以降も広く用いられたという。『俳諧歳時記 栗草』の「蝸牛」は「此月より五月二至て、霖雨あるとき、蝸牛多く出て、或は床に登り、又壁に黏く、高く登るときは其涎随て尽れば随て落つ、其貝にありて、人を見るときは蜎縮ス、児童聚りて出出虫々々と云、出ざるときは釜を打破らむといふ（略）」、「蝸蝓」は「附蠃は、皆殻を負ふ蝸牛といふ、殻なきを蝸蝓と云」とあり、両者は殻の有無で区別される同類であると捉えられていたことがわかる。

「蝸牛」の項目には、「〔夫木〕牛の子にふまるな野べの蝸牛角あればとて身をなたのみそ 寂蓮、「五元集」文七にふまるな庭のかたつぶり 其角、○文七は髻結師なり」と和歌と俳諧の用例も挙げられている。植木朝子は、寂蓮のこの歌について、松永貞徳『新增犬筑波集』（寛永二〇・一六四三）の「ふみころされなよなかたつぶり」の句の注として引用され、「天神の御歌となむ」と記されていることを紹介し、江戸時代の俳諧の世界でも強く意識されていたであろうと推測している。更に、『栗草』が挙げている其角の句も含めて、「俳諧においては、踏みつぶされる蝸牛が相当数現れる」が、『梁塵秘抄』今様のように、蝸牛の動きに関心を寄せ、「舞ふ」と擬人化して明るい作品に仕上げるよりも、踏みつぶされたり高所から落ちたりする姿や懸命に歩く姿を、ユーモアにくるみながらもある哀感をもって捉えていることが多い。」と俳諧に特徴的な蝸牛の詠まれ方に注目している。^{分類}『俳句大観』（第五卷）には、「重々と引き行く家や蝸牛」（志昔）「這出ても付きまとふ家や蝸牛」（才之）「おのが家を足手まとひや蝸牛」（麦翅）と桎梏としての殻を背負う存在として、蝸牛が詠まれてもいる。凡兆の句に見られるように、我が身を保護する殻も持たず、蝸牛より一段と脆弱なイメージを持たれつつも、それを束縛から解放された姿に反転し得る蝸蝓の方が、蕉門の俳人たちには漂泊の身を投影するに相応しい季語だったのかも知れない。

国三郎の「うき世にハさハラぬ角や蝸牛」「氣配りの角に見へけり蝸牛」も、寂蓮の「角ありとても身をなたのみそ」

を踏まえて「角」に焦点化している感があり、『葉草』を手許に置いていたことは十分に考えられる。しかし、それは、寂蓮とは異なり、自分の進むべき道の触知も容易ではなく、用心深く構えていなければならない「角」である。国三郎に蝸牛の句が多いのは、先人に倣ったという以上の意味があるだろう。小沢は、明治十代以降の国三郎の経済状況について、足柄上郡の官員をしていた透谷の父快藏の月給や透谷の神奈川県会臨時書記の日給と比べつつ、桑仲買、旅籠屋、炭焼、織物と多角経営をしつつ家族や使用人を養っていた実状は、「豪農」とは言え、決して富裕ではなかったと推測している。国三郎は、家を背負い続けた立場と国家権力が増大していく中で閉塞を強いられる民衆の姿を重ねて投影していたのであろう。

透谷は、『秋窓雜記』（『女学雜誌』甲の巻 330号 明25・10）で、当代の人氣俳諧宗匠であった其角堂永機について触れている（第十一）。永機は「我庵を隔つること杜ひとつ」に住む「名宗匠」であるが、「一日人に誘はれて訪ひ行きつ閑談稍久しき後彼の導くまゝ、に家の中あちこちと見物しけるが、華美を尽すといふ程にはあらねど、よろづ数寄を備へて粹士の住家とは何人も見誤らぬべし。問数も不足なき程にあれば何をか啣つべきと思ふなるに、俳翁頻りに其の狭陋なるをつぶやきて止まず。」と家屋の狭さに不満を漏らして止まなかつたという。透谷は、「俳士をして俗に媚ぶるの止むを得ざるに至らしめたるものあるは余と雖も之を知らぬにあらねど、高達の士の俗世に立つことの難きに思ひ至りて黙然たること稍しばしなりし。」とある程度は世間と妥協するのは止むを得ないと認めはするものの、永機の俗人ぶりは度を過していると思つて述べている。透谷は、この文章の冒頭で「今の世の俳諧士は隣れむべきものなるかな。」と言い切っているが、物質的欲望が何よりも優先している「名宗匠」への幻滅が余程深かつたのであろう。

永機の句については、小沢が著書の中で引用している勝峯晋風『明治俳諧史話』（大誠堂 昭9・12）が言及している。晋風が、安田雷石が編集した年間俳句集『作明家五十鈴川集』（明15・3）から抄出している永機の句を挙げてみる。晋風によれば、『俳家五十鈴川集』は、当代の著名俳人五十四人の句を、一人一季十句ずつ、即ち四季四十句採録したものである（「俳壇の静態と点取調の流行／明治俳家集を鳥瞰して」。晋風は、雷石が選んだ俳人について、「東京の其角堂永機、雪中庵梅年、香楠居幹雄、太白堂呉仙、一具庵尋香、大阪の黄花庵南齡、出雲の釣年庵曲川は、当時一流の俳

諧師として指を折られ、」と記述している（「俳壇の静態と点取調の流行／明治俳家集を鳥瞰して」262頁）。

春の夜もふるびて昼のはつ蛙

さしておく花もひとへや衣更

白露や夕やみつくるもの、はし

時雨来よ竹のあみ戸の青きうち

晋風は、「観念的な句作態度に厭味を感じるが、風雅人として或る侘びた境地を持つてゐる。個人的にも水平線以上の作家たるを領かせる。」と一定の評価をしている（同／「売出し作家とその句評」263頁）。「観念的」だが「風雅人」たる境地に到っているとは、洗練された見立てと機知とも言えるだろう。永機の句は、永機没後に其角堂機一と雪中庵字貫が編んだ旧派のアンソロジー『正明治俳句集』全四冊（双樹庵発行 明43・5、11、44・11、45・7）にも収められている。『明治文学全集57 明治俳人集』（筑摩書房 昭50・10）には、「新年の部」のみ収録されているので、その中から幾つか挙げてみる。

元日や暮まつ星の早や一ツ

御降りや一年中の花の露

日の影や雑木も洩れぬ花の春

昇る日の唯一輪や年の花

鴉にはぬかり乍らも屠蘇湯哉

餅の粉に化粧もす也嫁か君

透谷が、永機の住いを「よろづ数寄を備へて粹士の住家とは何人も見誤らぬべし。」と評していたように、季感を念頭に置きつつ、それに相応しい言葉を組み合わせ、響き合いを楽しむという遊び心が窺える。青木亮人によれば、永機は、幕末の「今紀文」と称された細木香以のサロンの一員であり、九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎とも懇意であった「洗練されたディレクター」である。青木は、永機を「身を持ち崩さず、人間関係の機微をすくいつつ、教養と見識を保ちながら句をひねり続けた俳諧師」であると見、俳句を「文学 (literature)」たらしめんとした正岡子規の変革を相対化する存在として捉えている。永機は、明治三十一年の『都新聞』の俳人人気投票で第一位、翌三十二年の『太陽』でも一位だったという¹⁶ことで、紛れもない人気俳人であり、大衆の趣味趣向は洗練された言葉遊びを通して季節を楽しむ俳句にあったことが窺える。

永機の句を置いてみると、秋山国三郎龍子の句は、暮しの実感に基づいており、異質であることがわかる。小沢は、龍子が、弘化二（一八四五）年及び三年の、南街堂文巡、太白堂弧月が選者である「月次混題句合」に龍子の句が頻々と選ばれていることから、若き日の龍子の句は、蕉門の流れを汲む太白堂系統の六世太白堂弧月に大きな影響を受けていると推測している。小沢は、弧月は渡辺崋山と親交があったことに注目し、吉沢忠『渡辺崋山』（昭31・11 東京大学出版会）に描かれた、崋山が、太白堂の紹介で俳諧を嗜む地方の豪農の家に宿泊しながら厚木地方を旅した時の様子と両者の交流の意味に触れて、「子供頃から、大藩の者に抑えられて、そこから発憤して人一倍の苦勞を重ねた崋山。町人出身で、武士の間にあつて一歩もひけをとらなかつた太白堂葉石。剣道の達人で三多摩にもひろく俳諧をひろめた大衆的な太白堂弧月。これらの人たちのつくり上げた伝統が、平民出身で、一生反骨の精神をつらぬいた龍子に引き継がれ、それが透谷に、地底の水脈というものの存在を実感させなかつたとは誰が断言できよう。／それはともかくとして、これらの人たちに、自然や、庶民の生活への凝視が、人一倍強いのは、決して偶然とはいえぬものがあるように、私には思われるのである。」と述べている。

小沢が感じ取ったものは、都の洗練された遊芸とは異なる、暮しの声としての俳句であり、そこに時代や世相への批判精神も胚胎していく。透谷の句も後者の系譜に連なる。龍子の俳句が透谷に「地底の水脈」の存在を実感させたとい

う小沢の直観は的を射ているように思われる。先に挙げた蝸牛の句、及び「捻し向た毛虫に志さるひよこ哉」は、ままたらぬ現実の受容という認識と卑小な存在が孕む抵抗の可能性の両方が詠み込まれている。透谷の「ぬらくと殻をはなれた蝸牛」、および『蓬萊曲』（養真堂 明24・5）の見返しに墨書して戸川秋骨に送った句である「折れたまま咲いてみせたる百合の花」は、龍子の句が内包するものを継承している。

二、本草学と生育環境

透谷が詠んだ蝸牛は、中世の今様や寂蓮の歌を受けて、十七世紀後半の俳諧が開拓した俗なるモチーフであり、時代が下って、本草学の影響を受けた「百科事典的な歳時記」（ハルオ・シラネ）である『俳諧歳時記葉草』にも形態が詳述され、好んで詠まれた季語である。龍子を介して「作者感ずるや句となる所は即ち俳諧の誠なり。」（『三冊子』）という俳句の本道が実践されているとも言える。

透谷が「荒野の戦ひ」で挙げていた虫について、『俳諧歳時記葉草』で見ると、「蜂」（春・二月）「蛇蠍地虫の類穴を出る」（同）「蝶」（同）「蛭」（同）「蚕」（春・三月）「蠅」（夏）「蛭」（同）「蛇」（同）「蚕蛹」（夏・四月）「蚊」（夏）「蝸牛」（同）「蚰蜒」（夏）「蚤」（同）「蜘蛛の子」（夏・四月）「毛虫」（夏・六月）「黄金虫」（同）「蚯蚓出」（夏）「蟬」（夏・五月）「蛭」（夏）「火蛾」（夏・六月）「ちゝろ虫」（秋・七月）「稻春虫」（秋・七月）「蟲蝻」（同）「蝗」（同）「芋虫」（同）「蠨螂」（同）「鼯馬」（同）「絡線虫」（同）「繫蝨」（同）「蛇穴に入」（秋・八月）「蜻蛉」（秋・七月）「虫」（秋）「常山の虫」（秋・七月）「鎌虫」（同）「蛸蟻」（同）「松虫」（同）「馬追」（同）「秋津虫」（同）「秋の蝶、秋の蚊、秋の蚤、秋の蠅、秋の蟬」（同）「蟋蟀」（同）「鈴虫」（同）「蚯蚓鳴」（秋）「蓑虫」（同）「蛴」（秋・七月）と続々と掲載されている。子規の『分類俳句大観』では、春の部に「寄居虫」「蛇出」「蜥蜴出」「虫出穴」（以上第二卷）、夏の部に「熊蟬」「山蟬」「夕蟬」「螻」「芋虫」「はだか虫」「毛虫」「蚕」「蚕蛹」「鼓虫」「蝸牛」「なめくしり」「蚯蚓出」「蛭」（以上第五卷）、秋の部に「蛇穴に入る」「穴惑ひ」「いと、」「稻の虫」「蝻」「芋虫」「はたおり」「尻こき虫」「蜻蛉」

「羽ぎれ蜻蛉」「川蜻蛉」「つるみ蜻蛉」「赤蜻蛉」「茶立虫」「螳螂」「かけろふ」「玉虫」「つゝり虫」「つくくほうし」「虫」「轡虫」「松虫」「ちんちろり」「筆つ虫」「蟬」「秋の蠅」「秋の蜂」「秋の蚊」「残る蚊」「晚稻蚊」「秋の蝶」「秋蟬」「さりくす」「蓑虫」「灯取虫」「蜉蝣」「蛸」「藻虫啼」「鈴虫」「蚯蚓鳴」（以上第八卷）と子規の氣迫と執念が結実しているが、『葉草』を踏襲していることが窺える。

透谷も、明治以降も広く用いられたという『葉草』に目を通していたことが考えられる。第一節で引用した「地龍子」は、花の根元に顔を出した蚯蚓に目を留めているが、『葉草』の「蚯蚓鳴」（三秋）には、「雨ふるときは先づ出、晴るときは夜鳴、或はいふ結ぶときは化して百合となる、蟲蝨と穴をおなじくして雌雄（めを）になる」という記述がある。シラネは、中世以来の「四生」という生物の分類を紹介しているが、それは、「母胎から生まれる胎生、卵から生まれる卵生、湿気から生まれる湿生、どこからともなく生まれる化生」である。虫は、湿生あるいは化生と考えられていたという。交合すると百合になるとは、「化生」という捉え方であろう。これに透谷の句、「折れたまま咲いてみせたる百合の花」を重ねてみると、百合は蚯蚓が変化した姿、即ち地を這う透谷が昇華された姿であると読める。百合は、「三日幻境」で、川口村を再訪した折の国三郎の老母のもてなしとして、「老婆は後庭に植へたる百合数株惜気もなく掘りとりて我が朝餉の膳に供し、その花をば古びたる花瓶に活けて我が前に置据へぬ。」と描かれている。透谷にとって仙境の花であり、この句は、二度と戻らぬ至福の時間を内包させた、透谷の重層的な生を象徴している。それにしても、「亡友反古帖」に見られる書きながら昂揚していく列挙の仕方は、歳時記から得た知識以上の只ならぬものを感じさせる。和歌の伝統的な秋の情趣に連なる季題もそうでない虫も並列的に挙げられ、「げじく、百足、わらじ虫」という季語の外にあるものも引きずり出されてくる。

透谷は、あるいは、『千虫譜』を読んでいた可能性があるのではないだろうか。『千虫譜』は、本草学者で幕府の侍医でもあった栗本丹洲（宝暦五・一七五六〜文政五・一八三四）が、文化八（一八一）年に作成した虫譜である。小西正泰は、「新旧多くの写本がつくられてきており、おそらく江戸期の虫譜のなかでは最も伝本の多いものである。このことは本書の価値をよく示している。」と述べており、『千虫譜』が重宝され、活用されて来たことが窺える。小西に

よれば、『千虫譜』の材料となった動物標本は、丹洲自身が採集、観察したものの他に、同定依頼や贈呈されたものも少なくなく、採集地は、丹洲が住んでいた江戸を主体として、北は北海道から南は八重山諸島に及んでいる。微小な虫については顕微鏡を使って写生し、「化生」即ち自然発生という考え方を基準に発生を考察し、生態を観察している。また、医師であった丹洲は、薬物としての虫の利用を重視しており、当時の習俗に関わる内容も記述している。科学的、実用的、民俗的に得るものが多い書物であると言える。

透谷は、後に妻となる石坂ミナ宛の書簡（一八八七年八月十八日）草稿で、「明治六年生の父母は生を祖父母に託して東都に去れり、十一年まで五年間生は全く祖父母の膝下に養育せられけり、」と述べているが、明治六年秋、透谷の父快蔵は大蔵省に出仕するため、五月に生まれた垣穂を連れて上京、母ユキは日本橋照降町の自宅で呉服屋を開いたという。^{注23}「生の祖父は凡そ世にめづらしき厳格の人にして活発に飛はねることを好む少年をこらすの術に苦しみたる事今もしばしば祖母の物語に聞き得る事どもなり、」（同書簡草稿）と、透谷の祖父快蔵は、少年透谷の腕白ぶりに手を焼いていたようである。小田原藩医であった玄快（文化一二・一八一五〜明治一七・一八八四）について、平岡敏夫『北村透谷研究 評伝』（有精堂 平7・1）^{注24}は、「いつの頃からかは不明だが、外科医であり、玄快製造の火傷の薬金明膏は小田原では有名であった。ゴマ油を原料とし、はまぐり詰めであったという。」と記している。平岡は、透谷と同時期に小田原の小学校に入学した坂本易徳（紅蓮洞）の回想（『故北村透谷』『明星』明39・10）から、「此霜焼や火傷の薬が北村氏の祖父の玄快といふ漢方医の創製になつて居つて、郷里では有名な薬で、金明膏と云ふ其の実名を呼ぶ者は無く、北村のやけどの薬、玄快さんの膏薬といつて有名なものでありました」という件を引用している。平岡も触れているように、「此の薬を僕が北村氏の家に貰ひに行くやうになりましたして北村氏と懇意となり、一所に遊ぶやうになりました。」と玄快の薬は二人の少年を近づける程、各家庭で用いられていたのだろう。薬も創意製造した玄快が、本草学の虫に関する事典とも言うべき『千虫譜』の写本を所蔵していたことは考えられるし、少年透谷が好奇心に任せて、そこに描かれていた虫の生態、形態を眺めていたこともあり得る。透谷は、先のミナ宛の書簡草稿で、「偕て明治十一年の春となり我がやかましき祖父は中風病にかゝりて其性質は全く一変し生を叱責するの性は変じて生を憐愛するの情とな

れり、」と回想している。透谷は続けて、「然れども生は遂に温良なる性質を養ふの暇はなかりけり」と、自分の天性や遺伝から「憐愛」の薰陶を否定しているが、「憐愛」という言い方から、玄快に対して否定的な感情のみを持つていた訳ではないことが窺える。

『千虫譜』（栗氏千虫譜^{注25}六）を見ると、「ゲシと カチハラ」「蚰蜒一名蟻衝一名人耳」「蜈蚣 ハカチ」、文化十二（一八一五）年に豊前国小倉中津村で採集され、「何ト名謂スルコトヲ不知」と命名されていない「其色五彩長三四寸許」という足が四十本前後ある長虫、文化壬午（文化五・一八二二）に西丸で採集された、尾と頭にそれぞれ四本の長い足を持つ虫、「一寸ムカデ 蜈蚣」「馬蚊」「赤足蜈蚣 一名百足」というゲジゲジ、百足の類が詳細に描かれている。「げしと」には、長門、周防、陸奥、大隈、仙台、加賀の方言が、「蜈蚣 ハカチ」には「古訓ナリ日本紀に出今上総ニテハガチと云古ノ称ヲ不失」と古訓と方言の繋がりも記されており、書き手の興味関心の広がりも表れている。『栗氏千虫譜五』には、斑猫、カミキリ虫、蒼蠅、「青蠅 キンバイ」、「扁前 アカバイ」「牛蝨 ウシバイ」、油虫、屁こき虫、金亀子の類、蝨の類と来て、二頁を用いて、「蚤 顕微鏡ヲ以テ写」と巨大な蚤、同じく二頁を用いて顕微鏡によつて観察した巨大な蝨が描かれている。「荒野の戦ひ」における大小の虫の等価な列挙の一因が、実際の大きさを攪乱させる『千虫譜』にあつたとしたら、面白い。

「荒野の戦ひ」には、「曾て蛇を平げたる一の大なる蛭蚰が野の長となり、でん／＼虫が箱をかついで配権を執行し居り」と、現実の弱肉強食を転覆させる設定がされている。『栗氏千虫譜八』には四種の蛭蚰が記載されているが、「安永八年十月山中ノ人姜醋ヲ以テ浸シ食フト云フ山ナマコと云フ」と、むっくり太った巨大な蛭蚰が描かれ、次のページには「蛭蚰 一種大者」として同じく巨大な蛭蚰が描かれ、「大宮八幡林中陰地ニテ獲之尋常ノモノト別ナリ」との注釈がある。続くページには蝸牛が記載され、小児の五疳の虫を治療する薬としての処し方（塩を振って泥を吐かせ、肉を出して串に刺して炙つたものを食べさせる）が説明されている。異形の蛭蚰と実用的な蝸牛の記述も、破天荒な構想を形成する糧になつていたとすれば、詩人は、一見関係がないと思われる地点からも着想を汲み上げてくることが窺える。透谷がミナ宛書簡草稿で、幼少期の腕白ぶりを回想していたことは先に述べたが、具体的には、「其頃生の最も好み

たる小説は楠公三代記、漢楚軍談、三国史、等にして、日夜是等の小説を手離す事能はざりし程なりき又た生の最も喜ぶたる遊戯は多数の小児を集めて軍事をまねる事にてありし、生は常に自ら軍師となりて進退運転を司どりけり、是等の遊戯は我やかましき祖父の最も厳禁する所にてありしにもか、はらず、清く快よき浜辺の砂上にあつまりてかしのつ、みこ、の丘を城堡と定め、伏兵を隠す可き場所をも見極めて、軍略をめぐらし知勇を奮ひ、砂礫を飛ばして銃丸に代へ、長短の棒片は、刀鎗を代用せり、^註という熱中ぶりである。軍記物語に読み耽り、玄快に禁止されても戦争遊戯に没頭していたことがわかる。幼少期の体験、記憶が後年の創作に発想源として流れ込んでいくのである。中山右尚^註は、『毛吹草』に記されている「蛙・蛇・蛞蝓」の「三竦(さんすくみ)」が、「国家老妾殿さま三ンすくみ」(柳多留・八七)、「なめくじの夢で蛇の子おびえてる」(同、一二〇)のように雑俳川柳など江戸文芸に好んで用いられた^註こと、『地雷也豪傑譚』では、「悪賊大蛇丸に対して、尾形周馬が蝦蟇の妖術、その妻綱手が蛞蝓の妖術を使って三竦みの妖術乱闘を展開する」ことを紹介している。少年透谷が、川柳や『地雷也豪傑譚』から蛙・蛇・蛞蝓の三竦みを知り、長じて「荒野の戦ひ」の蛇と蛞蝓の闘争の着想になったことは考えられる。また、植木^註は、中世の人々と虫との関わり方が現れている文芸として、『古今著聞集』六九六話の虱に報復された田舎人、御伽草子『俵藤太物語』の、大蛇に頼まれて仇敵大百足を退治した俵藤太秀郷の物語を挙げている。当時の出版状況を調べてみないと何とも言えないが、あるいは、御伽草子の百足退治や仏教説話の人に報復する虱も透谷の脳裏にあったのかも知れない。物語における異形の力を持つ虫と本草学的な観察の対象としての虫が、共に透谷の着想を促したのであるとすれば、荒唐無稽な「荒野の戦ひ」には、明治初年代という近世と近代が交錯する時代相が刻印されていることになる。

終わりに

透谷の「ぬらくとからをはなれた蝸牛」は、民権運動離脱後、収入の途も保証されない中で、剥き出しの自分に肚を括つてこの世を生きていこうという決意の表れであった。蝸牛への自己投影は、俳諧の系譜に連なると共に、敬愛し

た秋山国三郎が蝸牛に託した卑小なるもののリアリズムと可能性も受け継ぐものであった。地を這う姿は、「ハムレット」にも触発された、透谷の実存の表象である。「蝸牛」を未完の戯曲構想「荒野の戦ひ」の数多の虫たちに広げてみると、地を這う虫たちの戦闘とその果ての荒廃という設定には、幼少期の軍記物語の耽読、戦争遊戯、近世の川柳や物語、目に触れていたかも知れない本草学の書物といった体験から自由民権運動離脱を経ての社会批判という透谷の半生が凝縮されていると考えられるのである。

注一覽

- 注1 引用は『明治文学全集29 北村透谷集』（筑摩書房 昭51・10）による。
- 注2 橋詰静子「校本北村透谷句集」〔北村透谷研究〕25号 平26・6）
- 注3 注2と同論文の注（3）。
- 注4 中山栄暁「透谷と俳句」〔解釈〕13巻4号 昭42・4）
- 注5 小沢勝美「透谷と秋山国三郎 附 秋山龍子句集安久多草子（復刻版）」〔教文社 平12・9）による。
- 注6 引用は『新編日本古典文学全集88 連歌論集・能楽論集・俳論集』（小学館 平13・9）による。『三冊子』の校注・訳は復本一郎。
- 注7 注5と同書の「秋山国三郎年譜」による。
- 注8 ハルオ・シラネ『四季の創造 日本文化と自然観の系譜』（角川選書 令2・5 北村結花訳）の「第七章 季節のピラミッド、パロディ、本草学」。208～209頁。
- 注9 『分類俳句大観 別巻』（日本図書センター 平4・4）の「解説」（山下一海）。4頁。
- 注10 引用は「新編纂の別巻一卷を加え」（山下一海）た『分類俳句大観』（注9に同じ）を用いた。
- 注11 注8と同書の222～223頁。
- 注12 引用は『生活の古典双書9 増補俳諧歳時記萩草（上）』（八坂書房 昭48・11）『生活の古典双書10 増補俳諧歳時記萩草

(下)『(八坂書房 昭48・11)による。

注13 植木朝子『虫たちの日本中世史——『梁塵秘抄』からの風景——』(ミネルヴァ書房 令3・3)の「第一章 中世芸能に舞う虫——蟪蛄・蝸牛／4 寂蓮と蝸牛の今様」。33～36頁。

注14 注5と同書の「透谷と秋山国三郎」。20～21頁。

注15 青木亮人『その眼、俳人につき 正岡子規、高浜虚子から平成まで』(邑書林 平25・9)の「其角堂永機 江戸の残照」。

注16 注5と同書の「透谷と秋山国三郎」の第八節(30～36頁)。

注17 『透谷全集』第3卷(岩波書店 昭30・9)の「解題」(勝本清一郎)。645頁。

注18 注8と同書の223頁。

注19 注18に同じ。

注20 『江戸科学古典叢書41 千虫譜』(恒和出版 昭57・12)の「解説／三、『千虫譜』の成立」(小西正泰)。8頁。

注21 注20と同書の「解説」。9頁。

注22 注20と同書の「解説／四、『千虫譜』の概要と特徴」。

注23 透谷の年譜は『明治文学全集29 北村透谷集』の「年譜」(小田切秀雄編)による。

注24 平岡敏夫『北村透谷研究 評伝』(有精堂 平7・1)の「第一章 生いたち／3 祖父母と祖母／祖父玄快」。39頁。

注25 小西によれば、『千虫譜』原本は、栗本家に伝えられてきたが、関東大震災で焼失してしまったという。『江戸科学古典叢書』収録の『千虫譜』は、『栗氏千虫譜』全十冊(曲直瀬愛旧蔵)を底本としている(「解説」9頁)。

注26 『古典文学動物誌』(國文学 解釈と教材の研究)39巻12号 平6・10 臨時増刊「蛞蝓」項目執筆 中山右尚。

注27 注13と同書の「第二章 中世の信仰と刺す虫——蜂・虱・百足・蚊／3 虱の遊びと発心」及び「同／4 俵藤太の百足退治」。

付記 透谷のテキストは『明治文学全集29 北村透谷集』(筑摩書房 昭51・10)を用いた。引用に際して、原則として旧字体は新字

体に改め、振り仮名は適宜省略した。

〈研究ノート〉

「国」字体小考——日本における使用字体の変遷——

菊 地 恵 太

一. はじめに

現在常用漢字として使用される「国」という字体は、いわゆる旧字体「國」に対して略字と見なされるが、この「國」という字種は異体字の変種が多いことで知られ、資料としては様々な字体が残されていることが分かっている。しかし、果たしてこれらの字体全てが日本に受容され、使用されてきたのかと言うと、疑念が残る所であろう。

「國」の異体字については既に山田俊雄（一九六九）、笹原宏之（一九九二）に詳しい論考があるが、これらは実用字体の歴史的な変遷について述べたものではないため、本稿では「國」及び異体の使用実態について、日本における古辞書や典籍類の写本（主に近世初期以前）を対象に調査を行い、通時的な記述を試みたい。

二. 先行研究と略字「国」の字源説

山田俊雄（一九六九）は、クニガマエ（口）に「玉」「王」や「民」を書く字体（国・国・國）が草体に基づくものであるという説を示し、「国を解して王の統治するところの意とし、國を解して人民の支配するところの意と解するのは、字源の新解釈であって、いはゞ字源俗解だといふこともいへるであらう」とするが、笹原宏之（一九九二）は「国」を「六朝時代に乱造された（中略）会意式の異体字であるとも考えられる」と述べ、「国」が漢印の隸書において現れ

ていることや、金石文や漢代木簡において「國」から「国・国」に移行しうる形が既に見られることを示している。その上で「国」には「國」の崩し字を楷書体化させたものと、「国」に点を打ったものとの二つの成立の系統が想定できると解している。なお同様の趣旨は大修館書店ウェブサイト「漢字文化資料館 漢字Q&A」にも示されている¹。

三. 使用字体の確認

三. 一 規範字体の変遷

では、中国の楷書において規範と呼ぶべき字体にはどのような例があるか。漢字字体規範史データセット（以下「HNG」）によって、中国における標準（規範）的な字体を確認してみると、次のような字体が見られた（中国・日本における規範字体及びHNGについて詳細は石塚晴通（一九九九）、同編（二〇一二）等を参照）。

図一 HNGの例

南北朝・隋唐期写経



P. 2160

摩訶摩耶經



守屋本妙法蓮華經（宮廷写経）

開成石経・宋版



開成石経孝経



北宋版通典

南北朝・隋唐期の写本は後の康熙字典字体「國」に似るが、クニガマエ内部の「口」の部分を「ム」のように作ったり（國）、或いは「ム」と下の横画を繋げて「么」のように作った形（國）が主流である。一方開成石経・宋版の字体は康

¹ 「Q0088「国」という漢字はどういう成り立ちでしょうか。またいつごろから旧字体の「國」に代わって使用されているのでしょうか。」
 （執筆者・時期不詳） <https://kanjibunka.com/kanji-faq/jitar/q0088/>

熙字典本「國」とほぼ一致するものが多い（北宋版金剛般若經のみ「國」）。

唐代写本のうち守屋本華嚴經卷八ではいわゆる則天文字「圀」が用いられているが、この写本には他にも「㊦」（日）「匚」（月）「壑」（地）等の則天文字が見られ、武則天の在位期（六九〇・七〇五年）の写本と見られる。それ以外の中国写本・刊本では「圀」を始め則天文字が用いられることはなく、あくまで一時的な規範であったと考えるべきである。またHNGGの日本の文献では、鴨脚本日本書紀卷二において「国」が十七例現れているが、これは異体字率が3・03%（石塚（二〇一二））と比較的字体の揺れが多い文献であり、これを以て直ちに規範的な字体であると見なすことはできない。また石塚（一九九九）において日本の字体規範（標準）の指標として用いられる、兼方本日本書紀では、次のような字体が専ら用いられている。



兼方本日本書紀卷二

これを除けば、日本の写本における字体は概ね隋唐期の規範（國・國）に従っていると見て良いであろう。

三・二 字体の分類

笹原（一九九二）では実に五十種を超える字体が示されている「國」の異体字であるが、実際の書例を見た限りでは使用字体はその中でもごく数種類に限られる。

今仮に、HNGGの規範字体に近い形（國・國に類する例）を「A類」、A類の点画を直線的に省略したような形を「B類」とする。B類がさらに崩され字体の判断を付け難いものは「C類」として分類する。

具体例として、漢代木簡及び中国の書家の手によるものとされる草書の例を見ても、次のような字体が見受けられる。

図二 漢代木簡の書例(佐野光一編『木簡字典』(雄山閣出版)より)



居延漢簡



敦煌漢簡

図三 草書の例(赤井清美編『行草大字典』(東京堂出版)より)



王羲之



歐陽詢

確かに 図二の漢代木簡の例や図三の欧陽詢の書例は、「國」の草書体から「国」に移行しうる例と言えそうだが、一方で「国」や「國」の字体を明確に書いたものとも思われず、「国・國」とは区別して捉えるべきであろう。本稿では、図一に挙げた書例及び図三の欧陽詢の書例のような形をB類として扱う。図三の王羲之の書例は草書体ではあるが「國」の「戈」の形を残していると判断され、ここではA類に分類する。なお崩しの度合いが大きくA・B類いずれとも判断し難い例(前出の兼方本日本書紀の例など)はC類とする。

さらにクニガマエの内部に明確に「王」を書く「国」を「D類」、「玉」を書く「国」を「E類」とする。また近世にはD類もしくはE類のクニガマエを二点に省略した形(王)も見られるため(例えば日本文学オープンデータ共同利用センター「日本古典籍くずし字データセット」の検索)、これを「F類」とした。なおクニガマエを二点で省略するのは、「国」に限らず散見される手法であり、今後詳細に調査したい例である。

B・C類はA類の「國」の形を比較的残したものであって、略字か非略字かという観点で見れば非略字のA類に準ずるものである(無論、A類に比すれば略字と見ることできる)。一方D・E・F類は明らかにA類とは異なる字画によって構成されているもので、明確な略字と考えられる。

四、調査結果

四・一 『宋元以来俗字譜』

まず中国における「國」の字体を概観し、宋・清代の小説刊本における異体字を集めた『宋元以来俗字譜』（中華民国中央研究院歴史語言研究所、一九三〇年）を見てみると、『通俗小説』『嬌紅記』を除く全ての底本において「国」（D類）の形が見られた。中国ではこの字体が略字として古くから定着していたものと考えられる。その反面、この他の字体（E類「国」、則天文字「圀」等）の使用は全く見られず、中国の略字使用ではE類「国」よりもD類「国」字体の使用が優勢であったと見ることが出来る。

四・二 中国漢字字書・字様書の掲出字体

中国字書における掲出状況は、表一の通りである。これらの字書類においてB・C類字体は出現していないため表から省いた。また参考として「圀」の出現状況も掲げた。

『正名要録』においてはA類「国」が〈正体〉と示されるのに対し、D類「国」は〈訛俗〉とされる字体であり、やはりこのD類字体は当時から既に定着していた字体であったと考えられる。それ以降もD類「国」は多くの字書に掲出されるものであり、いずれも〈俗〉との字体註記がある。しかしD類「国」に点を附したE類「国」の形はどの字書にも見えず（現代中国での簡化字であるにも拘らず）、字書に現れるのは一貫してD類「国」であった。

また則天文字「圀」については唐代より後年の字書全てに掲出があるが、「国」とは異なり〈古作〉や〈古文〉という字体註記が与えられることがある（竜龕手鏡は〈俗〉）。「圀」が武則天の命による字体であるという説明は『集韻』に見られるが、これが〈古文〉として扱われているということは、既に「圀」は通常用いられない字体であったのではないかと思われる。

四・三 日本漢字字書の掲出字体

一方日本の字書における掲出状況は、表二の通りとなった。
 日本側の字書でも、A類「國」が見出し字として掲げられるのは当然としても、異体字として掲出されるのは一貫してD類「国」であり、E類「国」は全く見られない。なおD類「国」の字体註記は、新撰字鏡では〈訛作〉、類聚名義抄では〈或〉となっている。

表一 中国字書・字様書

資料	成立年代	A (國)	D (国)	E (国)	囿
正名要録	初唐	○	○	×	×
群書新定字様	初唐	×	×	×	×
干祿字書	774年	×	×	×	×
龍龕手鏡 (高麗本・宋本)	997年?	○	○	×	○
大広益会玉篇	543年成 (原本玉篇) 1013年校刊	○	×	×	○
集韻	1039年	○	×	×	○
五音類聚四声篇海	1208年成 (四声篇海) 1467年校刊	○	○	×	○
字彙	1615年	○	○	×	○
正字通	1670年	○	○	×	○
康熙字典	1716年	○	○	×	○

表二 日本字書

資料	成立/刊写年代	A (國)	D (国)	E (国)	囿
高山寺本 篆隸万象名義	9世紀成 1114年写	○	×	×	×
天治本 新撰字鏡	900年頃成 1124年写	○	○	×	○
観智院本 類聚名義抄	1100年頃成 鎌倉中期写	○	○	×	○
世尊寺本字鏡	鎌倉時代成・写	○	○	×	○
天文本 字鏡鈔	鎌倉前期成 1547年写	○	○	×	○
寛元本 字鏡集	鎌倉前期成 江戸後期写	○	○	×	○
篇目次第	室町中期写	○	○	×	○
夢梅本 和玉篇	1605年刊	○	×	×	○

則天文字「囿」もまた新撰字鏡から掲出されているもので（註記は「未詳」）、こちらの字体も既に日本で認知されていたものと見られる。

四・四 字書以外の古辞書における出現字体

続いて単漢字を掲出する字書ではなく、種々の語句の漢字表記を掲出した言語辞書類における各字体の出現状況は、表三に示すとおりである。
 漢字字書ではE類「国」

表三 言語辞書(見出し字)

		A (國)	B (A略)	C (B略)	D (国)	E (国)	F (王)	他
前田本 色葉字類抄	鎌倉中期写	4	7	2		11		
大東急本 伊呂波字類抄	室町前期写	112	6		1	47		(2?)
筑波大本 下学集	室町中期写	6						
文明11年本 下学集	15世紀末写	5						
明応5年本 節用集	1496年写	2			1	2		2
広本節用集	16世紀初写	154						1
黒本本 節用集	15世紀末-16世紀写	8				1		
元亀2年本 運歩色葉集	1571年写	18	3	2		28		
静嘉堂文庫本 運歩色葉集	室町末期写	46				6		
天正18年本 節用集	1590年刊	7				4		1
饅頭屋本 節用集	室町末期刊	7				2		
易林本 節用集(原刻版)	1597年刊	23						
慶長板行書本 節用集	慶長年間刊		3	19	1		1	

字体が全く見られなかったのに対し、鎌倉時代書写の前田本色葉字類抄において全二四例中十一例と、E類の使用が半数近く認められる。室町時代前期書写の大東急本伊呂波字類抄においても、一六八例中四七例がE類の字体を取っており、その反面D類は僅か一例に留まっている。それ以降の文献でも、使用頻度にはばらつきがあるもののE類の使用が認められるのであって、辞書類の記述から見るとD類よりもむしろE類が広く定着していたものと言える。F類が出現するのは近世初期の行書本節用集(国会図書館亀田文庫蔵の無刊記本、『節用集大系』第二巻影印)であって、書体(崩しの度合い)による影響も考えられる。

この他、明応五年本節用集・天正十八年本節用集では則天文字「囧」が一例ずつ見出し字で用いられ、さらに明応五年本節用集では「國」も一例見出し字に出現する(表では「他」に分類)。これらはいずれも「クニ」という項目で、「國」の異体字(乃至は同訓字)を示そうとしたものと思われ、他の熟語では例がない。黒本本節用集では、見出し項目ではないものの、「國(クニ)」の割註に「囧」「国」が示されている。

なお大東急本伊呂波字類抄では、「國人(カトモリ)」「(卷三・カ人倫部)」「國人(コン)」「(卷七・コ量字部)」という表記が見られたが、ここで本来「カドモリ」に充てられる用字は「閨人」と思われ(前田本色葉字類抄にも「閨人(カトモリ)」とある)、この箇所は誤写と見るべきであろう。前田本のコ量字部には「閨人」の掲出はないが、大東急本における振仮名「コン」は「閨」の字音と一致する。従ってこれ自体は「國」の異体字と

して「國」を記したわけではないが、このような誤写が生じた背景には、当時既に「國」という字体が認知されていた可能性も考えられよう。

また『広本節用集』ク態芸門では、次のような例が見られた。

治^{ヲムクニモノハズ}戠^{アエテテ}者^{カワシラシモレカシラシヤ}弗^{シシ}敢^シ侮^シ毎^シ於^ニ鰥^シ寡^シ而^シ況^シ於^ニ士^シ民^シ乎^ヤ （影印²五二六頁）

「クニ」の傍訓がある「戠」字は『集韻』で「國」の（古作）とされている字体に該当するものである。当該の漢文は孝経孝治章第八からの引用であり、「國」の異体であることも明白である。引用元の底本がこの字体を使用していたものをそのまま書写した可能性はあるが、当時日本において広く認知されていた字体とも思われず、何故この箇所だけに当該の字体が現れたのかは不明である。

四・五 上代木簡資料の書例

続いて上代の書例として、奈良文化財研究所編『日本古代木簡字典』（改訂新版）において掲出される例を見てみる。同著における「國」字の書例は一六〇例に上るが、その字体を分類すると表四の通りとなる。

表四 日本古代木簡字典

A (國)	10
B (A略)	78
C (B略)	
D (国)	50
E (国)	2
分類不可	20
計	160

木簡の書例では、字画が大きく崩され字体が不明瞭になってしまった例も多く、表四では先に示したいずれの分類にも当てはめられない書例を「分類不可」としている。字体を判別できる書例の範囲で見ると、明確にA類の形と判断できるものは十例に留まり、それを崩したB類の形が七八例と最も多くなっている。次いで多いのがD類「国」の形であり、

² 中田祝夫編『文明本節用集研究並びに索引』勉誠社

表五 その他古典籍

		A (国)	B (A略)	C (B略)	D (国)	E (国)	F (玉)	他
東大寺諷誦文稿	9世紀前期写		1		28			
大谷大本 三教指帰注集	1133年写		31		3	4		
前田本 日本靈異記	1236年写			79		2		
鈴鹿本 今昔物語集 卷2,5,7	鎌倉中期写	1	434			2		
蓬左文庫本 続日本紀 卷11-14	13世紀後期写	68	87		38			
俊海本 沙石集 卷1,7,10上	鎌倉末期写	1	42			21		
真福寺本 古事記	1371-72年写		290	1	7	6		
延慶本 平家物語 卷1本~2本	1420年頃写		163					
神田本 太平記 卷1,2,7	15世紀写			96				
屋代本 平家物語 卷1-3	室町後期写	133				20		
玄玖本 太平記 卷1-3	1554年?写	91	10	1		3		
藤井本 沙石集 卷1,3,5	室町後期写	17		1		42		
義輝本 太平記 卷1,3,5	室町末期写	11	62	5		9		
米沢本 詩学大成抄 天文部	室町末期写	2				57		
国会本 玉塵抄	1597年写	1	1	1	115	68		
京大本 論語秘抄	室町末-近世初期写	4			3	146	1	
小城本 平家物語	慶長頃?書写	18				84		
前田本 古事記	1606年写	31	133	4		136		
蓬左文庫本 続日本紀	1614年写	199	1	64		8		
寛永版 中華若木詩抄	1633年刊	12				74		

既にD類が略体として定着していたことが木簡の書例からも窺えるのである。クニガマエ内部に「玉」を書いたと思われるE類字体も見受けられるが、この時点では「國」を崩したB類の他にD類「国」の使用が優勢であって、D類は略字体としての地位を得ていない。

四. 六 その他の古典籍での使用状況

辞書以外の古典籍における各字体の使用例数は表五に示す通りである。

平安前期の東大寺諷誦文稿ではほとんどの書例がD類「国」であって、D類字体が当時既に略体として広く受容されていたことは、前節で見た上代木簡の書例からも窺えることである。

一方、一一三三年写の三教指帰注集ではD類「国」と共にE類「国」の字体も見える。それ以降の資料でも、鎌倉後期の蓬左文庫本（金沢文庫旧蔵）続日本紀ではD類が使用されるが、鎌倉末期の写本である俊海本沙石集ではD類ではなくE類が使用されていることが分かる。D類「国」とE類「国」字体は、「國」の略体として長らく併存していたものと考えられる。

ところが、時代がさらに下り室町末期に至ると、D

類「国」はほぼ用いられなくなり、E類「国」に統一されるようになる。一五五四年頃書写の玄玖本太平記以降、「国」の略体として使用されるのはほとんどがE類「国」である。例外的なのが国会本玉塵抄（一五九七年書写）で、この時期の写本としては珍しくD類「国」が高い出現頻度を見せる（全一八六例中一一五例）のだが、E類「国」の使用例も六八例に上る。

一方で節用集の諸本に掲出ある「囧」「國」といった字体は、これらの古典籍においては全く書例を見ず、「囧」「國」は殆ど実用されないものであったと考えられる。漢字字書等においては、「國」には多くの異体字が示されてはいるものの、実際に使用されるのはその中でも数種類に限られており、ここに字書類の記述と実用例との間に大きな乖離を認めることができる。

五. 「国」略字使用の展開（臆説）

A類「國」及びそれに準ずるB・C類字体を見ると、言語辞書類ではB・C類の使用例が少なく、明確にA類の形で書かれることが多いようであるが、辞書以外の古典籍では崩れた形の例も多く、書記態度に影響された可能性もある。

一方A・B・C類とは明確に異なる「略字体」に関しては、中国字書にも典拠のある「国」（D類）は、中国において古くから存在する略字であり、当然日本にも夙くに齎されたものと考えられるが、一方で「国」に点を附した「国」（E類）字体も、日本では言語辞書類やその他の古典籍等でも古くから使用されていたようである。日本の単漢字字書においては専ら「国」（D類）のみが掲出され、ここに中国字書の影響を見ることができ、実際には中世初期より「国」（E類）の使用も多く見られるのであって、漢字字書と実際の使用例との間にも差異を認めることができる。

両者が共に混在する文献もあれば、文献によって略体がどちらかの形に統一されている文献も見られ、両者は長らく併存していた状況にあったと言える。「国」（D類）から「国」（E類）へ移行したものは単純に説明できない。しかし室町末期には、「國」の略体は「国」（D類）から「国」（E類）に固定される傾向にある。「国」「国」のように複数

存在した略字使用を一方に統一しようという意識の変化があった可能性も想定されよう。

なお近世の版本で散見される「王」(F類)は、今回の調査文献では使用が僅少である。この略記法の萌芽は中世でもさほど夙くないものと推測されるが、他のクニガマエの字種、さらには他の分野の文献も含めて書例を集める必要がある。

六. おわりに

以上の結論は簡便な調査に拠ったもので、古記録・古文書等といった別の位相ではまた別の字体が現れる可能性もある。特に古文書は「國」字種の使用頻度も高いことが予想されるため、多彩な異体字が出現しても不思議はないと言える。今後の課題としたい。

「國」字種の略字使用が最終的に「国」ではなく「国」の方に傾いていった理由として、「王」という字を用いることが日本での情勢にそぐわなかったとか、或いはデザイン上の好みの問題であるとかといった勝手な臆測は可能であろうが、ここでは妄言に止めるべきであろう。

参考文献

- 石塚晴通(二九九九)「漢字字体の日本的標準」『国語と国文学』七六一—五
- 石塚晴通(二〇一一)「漢字字体史研究 ―序に代えて―」石塚晴通編『漢字字体史研究』勉誠出版
- 笹原宏之(二九九二)「字源説、字源意識、文字に対する意識が字体に与えた影響 ―「國」の異体字に関して―」『国語学研究与資料』十六
- 山田俊雄(二九六九)「国」と「国」についての臆説」『成城文芸』五三

辞典類

赤井清美編『行草大字典』東京堂出版／北川博邦編『章草大字典』雄山閣出版／佐野光一編『木簡字典』雄山閣出版／奈良文化財研究所編『改訂新版 日本古代木簡字典』八木書店

調査資料

〈漢字字書・字様書〉『異体字研究資料集成』(干祿字書・宋元以来俗字譜) 雄山閣／『唐代字様』二種の研究と索引』桜楓社／『龍龕手鏡』『集韻』『大廣益會玉篇』中華書局／『正字通』中国工人出版社／『高山寺古辞書資料第一』(篆隸万象名義 東京大学出版会)／『新撰字鏡 天治本 附享和本・群書類従本』臨川書店／『類聚名義抄 觀智院本』(天理図書館善本叢書) 八木書店／『字鏡集 白河・寛元本 研究並びに総合索引』『字鏡鈔 天文本 研究並びに総合索引』『倭玉篇 夢梅本 篇目次第 研究並びに総合索引』勉誠出版(勉誠社)／『古辞書音義集成 字鏡(世尊寺本)』『倭玉篇 五本和訓集成』汲古書院

〈言語辞書〉『古本節用集六種 研究並びに総合索引』『印度本節用集古本四種 研究並びに総合索引』『文明本節用集研究並びに索引』勉誠出版(勉誠社)／『色葉字類抄 研究並びに総合索引』『古本下学集七種 研究並びに総合索引』『中世古辞書四種 研究並びに総合索引』風間書房／『伊呂波字類抄 室町初期写十卷本』雄松堂出版／『運歩色葉集 元龜二年京大本』臨川書店／『色葉字類抄 一 三卷本』(尊経閣善本影印集成) 八木書店／『節用集大系』大空社

〈その他の古典籍〉『三教指帰注集の研究』朋友書店／『古事記 国宝真福寺本』桜楓社／『日本靈異記』『日本書紀』『古事記』(以上、尊経閣善本影印集成)『続日本紀 蓬左文庫本』八木書店／『鈴鹿本今昔物語集 影印と考証』京都大学学術出版会／『東大寺諷誦文稿』(勉誠社文庫)『太平記 玄玖本』『太平記 義輝本』『玉塵抄』『八天眼目抄』勉誠出版(勉誠社)／『太平記神田本』『沙石集』(以上、古典研究会叢書)『平家物語 延慶本』『平家物語 小城鍋島文庫本』汲古書院／『屋代本平家物語』角川書店／『論語抄の国語学的研究 研究・索引篇』武威野書院／『平松家本平家物語』『詩学大成抄の国語学的研究 影印編・研究篇』清文堂出版(清文堂)

〈ウエブサイト〉(令和三年六月現在)

漢字字体規範史データセット <http://www.hng-data.org>
奈良文化財研究所 木簡庫 <http://mokkan.konabunken.go.jp>

附記

本稿は、筆者が修士論文（二〇一六年度）執筆の際に調査を行った内容を基に補訂を加えたものであるが、一論文として発表するには憚られると判断し、一つの備忘録として公開する。御批正や御意見を頂ければ幸いである。

育研究会論文集』(25)、pp.68-75

阿部裕子 (2013) 「学習者オートノミーの育成——『映像で学ぶ日本語』の授業実践からの考察」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』pp.1-9

URL : http://www.nkg.or.jp/pdf/jissenhokoku/2013_P19_abe.pdf

伊藤秀明・石井容子・前田純子 (2019) 「継続的な学習につなげる日本語学習サイト『ひろがる もっといろんな日本と日本語』」『ICT×日本語教育——情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践——』ひつじ書房、pp.222-234

小島裕子 (2008) 「教室内と教室外活動を繋げる試み——個人プロジェクトを通して——」『桜美林言語教育論叢』(4)、pp.141-148

島崎薫 (2010) 「日本語学習者の『日本語使用者』としてのインターネットを通したりソース使用に関する調査」『言語科学論集』14、pp.129-142

田中望・斉藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際——学習支援システムの開発——』大修館書店

トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』(7)、pp.17-29

山元淑乃 (2011) 「学習者主体の活動型授業——学習者オートノミーの育成を目指して——」『留学生教育』(8)、pp.73-92

<実践研究に使用したリソース>

日本語学習webサイト「ひろがる もっといろんな日本と日本語」

国際交流基金関西国際センター「ひろがる もっといろんな日本と日本語」

URL : <https://hirogaru-nihongo.jp/> 閲覧日 : 2020年12月3日

CEFRの「自己評価表」

Council of Europe, 吉島茂、大橋理枝 (訳・編) (2014) 『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』追補版、朝日出版社

Learning,teaching,assessmentの略であり、日本語では「ヨーロッパ言語共通参照枠」などと訳される。複数の言語についての学習、教育、評価のための共通の枠組みであり、外国語の習得状況を測る際の大きな目安となる。本研究では、学習者の技能別のレベルを確認できるCEFRの「自己評価表」を使用した。

- 4 「ひろがる」の各トピックに用意されているコンテンツの一つである。トップ動画ではトピックの概要を知ることができる。例えば、第2回で視聴した「寺・神社」のトピックのトップ動画では、神社での参拝の仕方や日本の神について紹介している。なお、このトップ動画は字幕をつけたり消したりすることができる。
- 5 「ひろがる」の各トピックに用意されているコンテンツの一つである。コメントには、各トピックに関する質問が3つ用意されており、学習者はその質問に対する答えをコメント欄に投稿したり、他の学習者のコメントを見たりすることができるようになっている。例えば、「寺・神社」のコメントには「寺や神社に行ったことがありますか。」「あなたの国や地域には寺や神社がありますか。」などの質問があり、さまざまな国と地域の学習者がコメントを投稿している。
- 6 「ひろがる」の各トピックに用意されているコンテンツの一つである。記事では各トピックに関連する記事が10個ほど用意されており、読み上げ機能もついている。また、学習者が自分自身で記事の内容が理解できたかどうか確認できるようにクイズも用意されている。例えば、「武道」のトピックでは、「剣道の道具」「居合道」などの記事がある。
- 7 青木（2016）では、学習者が自分の学習について振り返り、これからの学習について考えるのを手助けするために教師が問いかけることを「アドバイジング」とし、この「アドバイジング（問いかけ）」が学習者の自律的な学習を助ける一つの方法であると述べている。

<参考文献>

- 青木直子（2008）「学習者オートノミーを育てる教師の役割（特集 自律的学習者を育てるための教師の役割）」『英語教育』56（12）、pp.10-13
- 青木直子（2016）「第25回小出記念日本語教育研究会 講演 教えるのをやめる：言語学習アドバイジングというもう一つの方法」『小出記念日本語教

のクイズの活用方法を記憶していたからこそ、その後の学習活動でもクイズを使うことを考えることができたといえる。このことから、過去の学習内容を記録し、学習者が必要に応じて参照できるものが、学習者の自律的な学習を助ける可能性があると考えられる。

以上のことから、教師の問いかけと過去の学習を記録できるものが学習者の自律的な学習を助ける可能性があると考ええる。

6-2. まとめと課題

本研究の課題は、「ひろがる」を使用した授業を行うことで、学習者オートノミーを育成し、自律的な学習を促すことができるかを明らかにすることであった。Sさんは、最初は自分で自分の学習を考えることができず、自律的な学習を行っているとはいえない状態であった。しかし、自分で学習を考えるということを計9回行うことで、学習者オートノミーを発揮し、徐々に自律的な学習ができるようになった。このことから、自律的な学習を促すことができたと考えられる。また、筆者の問いかけや過去の学習を記録したものが学習の助けになる可能性があることがわかった。

最後に、本研究では、学習者オートノミーの育成を目的にしていたが、学習目標や学習活動を自分で選択するという学習者オートノミーに限られており、比較的長期の学習計画を立てたり、学習後に自分の学習を評価したりするような学習者オートノミーの育成については扱うことができなかった。学習者が自律的な学習をする上で、中長期的な目標や学習方法を考えられることは、学習者に自分の学習を管理する能力を与えることや、さまざまな学習を可能にすることを意味する。また、学習後に自分で自分の学習を評価できることは、自分の能力を把握することや、次の学習をより充実したものにつながる。そのため、これについての実践研究は今後の課題としたい。

¹ パソコンやスマートフォンを使用して、インターネット上で行う学習のことである。

² 例えば、国際交流基金が、日本語学習者や入門初級学習者を主な対象に、インターネットを通して日本語学習ができるサイト「JFにほんごeラーニング みなと」を2016年から公開している。

³ CEFRとは、Common European Framework of Reference for Languages:

Sさんは、最初は自分で学習活動を考えることができず、考えようとする姿勢もあまり見られなかったが、第4回以降は筆者の助言を参考にしつつ、自律的に学習活動を考える様子が見られた。この実践を通して、Sさんにリソースの活用方法を示したり、学習活動を自分で考えてもらったりすることで、Sさんの学習活動の選択における自律性が育まれたといえる。学習活動を自分で考えるという学習者オートノミーを発揮することができ、自律的な学習の萌芽が見られたと判断できる。

6. おわりに

6-1. 学習者の自律学習をサポートするもの

ここまでは、Sさんが自律的な学習をすることができたのかを時系列で述べてきたが、ここでは、Sさんの自律的な学習をサポートしたと考えられるものに焦点を当てて考察する。

まず、本研究では、筆者の問いかけがきっかけとなり、Sさんが自分の学習について主体的に考えるようになった様子が見られた。例えば、5-14で示した会話データ④である。ここでは、筆者の「(Sさんにとって) 何が一番必要?」、「聞くことが必要?」という2つの問いかけによって、Sさんに自分の学習目標について考える機会を与えることができ、Sさんの自律的な学習を助けることができた。このとき、Sさんは、筆者が最初に問いかけた「何が一番必要?」に対して、「聞くことです。」と答えていたが、筆者はそこで問いかけをやめずに、再度「聞くことが必要?」と問いかけた。このように、筆者が何度か問いかけることによって、Sさんの思考を促すことができたと考えられる⁷。

筆者の問いかけ以外にも、Sさんの自律的な学習を助けたと考えられるものがある。それは、過去の学習目標や学習活動などを記録した学習記録シートである。例えば、5-34で述べたように、第6回では、Sさんが第2回と第3回の学習記録シートを参照し、それを参考に学習活動を考えることができた。このことから、過去の学習目標や学習活動などを記録しておくことができるものが学習者の自律的な学習を助ける可能性があると考えられる。

また、Sさんは、第4回の学習活動でクイズを活用して以降、第5回、第7回、第9回の学習活動でもクイズを学習活動に取り入れた。このときは、Sさんは学習の記録シートを参照してはいないのだが、Sさんが過去の学習活動で

また、第9回では、Sさんがクイズを活用しようとする様子が見られた。第9回では「理解すること」が学習目標だったので、自分の理解度を測ることができるクイズの活用を提案したのである。Sさんは、第4回と第7回の学習活動でもクイズを活用したので、この経験から、クイズを学習活動に取り入れたと考えられる。

以上から、第8回、第9回では、Sさんが筆者と話し合ったり、過去の学習活動を参考にしたりしながら、学習活動を考えることができたことがうかがえる。

5-3-6. 学習活動の選択のまとめ

Sさんの学習活動を選択する過程への関わり方の変化をまとめると図2のようになる。

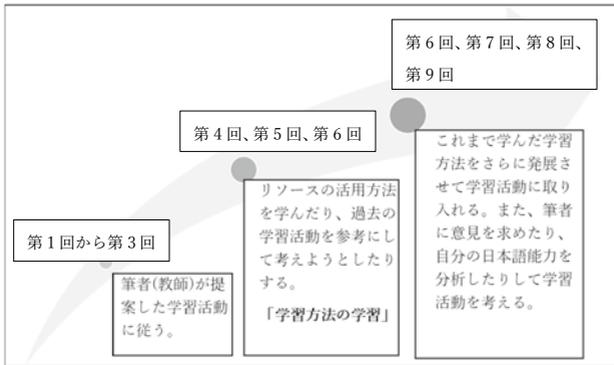


図2：Sさんの学習活動の選択の仕方の変化

第1回から第3回では、Sさんが学習活動を選択する過程に参加しようとする様子が見られなかったが、第4回以降ではSさんが自ら学習活動を考えることができた。特に、第4回では初めてクイズを使ったのだが、そこでクイズの活用方法を学習したSさんは、その後の第5回、第7回、第9回でもクイズを使おうと自ら考え提案することができた。クイズが用意されていない場合は、筆者にクイズを出してもらおうとするなど、学んだ活用方法をさらに発展させて行おうとする様子が見られた。このように、授業のなかでリソースの活用方法を学び、それを他の授業で活かすことができた。

この実践では、毎回の学習目標や学習活動は学習記録シートに記録し、それをファイリングしている。そのためSさんは自分で過去の学習活動の記録を見ることができ、それを参考に学習活動を選択することができるのである。

第6回では、Sさんは学習記録シートを参照し、第2回と第3回の学習活動を参考にして学習活動を選択した。これは、第6回と第2回、第3回の学習目標がすべて同じ「話すこと」だったためである。しかし、まったく同じ学習活動にするのではなく、トップ動画を見るという活動を加えたり、筆者と会話するときに自分からさまざまな話題を提供したりと、第2回や第3回を参考にしつつも、やや活動を発展させて行っていた様子が見られた。

第2回、第3回の学習活動はほとんど筆者が決めてしまったのだが、Sさんはそこで学習活動の考え方を学び、それを参考に第6回では自分で考えることができた。このことから、Sさんが学習方法を学習していることがわかる。しかも、学習者たちが考えがちなインプット中心の学習活動ではなく、筆者とお茶について会話するというアウトプット中心の学習活動を考えることができた。ただ、これは、会話の相手を必要とする学習活動なので、授業時間以外に一人で学習を行う際には、やや困難な学習活動であるのが難点である。そのため、例えば、「ひろがる」にコメントを投稿して他の学習者と交流したり、日本人の友人とそのトピックについて会話してみたりなど、教師のいない教室外ではどうやってアウトプット中心の学習活動をするかということも合わせて考えてもらおうと、学習者に教室外の自律的な学習を促す可能性があると考えられる。

5-3-5. 第8回、第9回：筆者（教師）の意見や過去の学習活動を参考に選択する

第8回では、筆者が学習活動を二つ提案し、Sさんがそのうちの一つを選択した。第3回でSさんは選択肢が与えられても選ぶとしなかったが、第8回では自分に合う学習活動を考え選択できたといえる。

第9回では、Sさんと筆者が話し合っ て学習活動を決めた。Sさんは筆者とともに学習活動を決める過程で、日本語を聞くより読むほうが得意であると自分の能力を分析し、その分析から学習活動を選択しようとする様子が見られた。また、Sさんが筆者の意見を参考に学習活動を考えようとする様子も見られた。

することができたことに、非常に感動している様子であった。この気づきが後の学習活動の選択に影響してくる。

以上から、第4回では、Sさんが自分で学習活動を考えることができたことがうかがえた。Sさんが学習活動を決定する過程に主体的に関わっているといえる。また、クイズを使うことで内容を理解できたかどうかを自分で確認できるということを学ぶことができた。つまり、リソースの活用方法や学習方法を学ぶことができたことがわかる。

5-3-3. 第5回、第7回：クイズ（リソース）の活用方法を学び、学習に活かそうとする

第5回と第7回では、Sさんが第4回で行ったクイズを再び学習に活用しようとする様子が見られた。

第5回では、Sさんは字幕なしでトップ動画を視聴した後、自分が動画の内容を理解できたかどうかをクイズを使って確かめようとした。残念ながら、視聴したトップ動画にはクイズが用意されていなかったのだから、クイズを活用することはできなかったのだが、Sさんが「ひろがる」の活用方法を考え、自ら提案することができたのは大きな進歩と言える。

第7回では、トップ動画を視聴した後に、筆者が動画の内容に関するクイズをいくつか出し、それにSさんが答えるという学習活動を行った。これはSさん自身が考えた学習活動である。第5回と同様に、第7回で視聴したトップ動画にもクイズは用意されていなかったのだが、Sさんは筆者にクイズを出してもらおうことで、自分がトップ動画の内容を聞き取れたかを確認しようと考え、学習活動を工夫したのである

このように、第5回と第7回では、第4回での学習活動を参考に、クイズを使って自分の理解度を確認しようとする様子が見られた。特に第7回では、クイズを学習に取り入れるために、筆者にクイズを出してもらおうという工夫ができたといえる。このことから、本研究が目的としている、インターネットのリソースの活用方法を示し、学習方法を学習してもらおうということが、この点において達成されていることがわかる。

5-3-4. 第6回：学習記録シートを参照し、選択する

第6回では、これまでの学習活動を参考に選択することができた。

5-3-1. 第1回から第3回：自分では考えられず、筆者（教師）の意見に従う

第1回では、学習目標の選択と同様に、Sさんは自分で学習活動を考えることに戸惑っている様子だった。そのため、筆者が考えた学習活動を提案し、それがそのまま採用になった。第2回でも、筆者が学習活動を提案し、それが採用になった。

第3回では、第1回と第2回で学習活動を筆者がすべて考えてしまったことを反省し、筆者がその日の学習目標を参考に学習活動の候補を二つ提示し、Sさんに選択してもらうことにした。しかし、Sさんは選択肢が提示されても自分で選択することをしなかった。

以上のように、第1回から第3回では、自分で考えて学習活動を選択しようという主体性は見られなかった。

5-3-2. 第4回：自分で選択する

第4回では、Sさんが学習活動を考えた。会話データ②はそのときの会話である。

会話データ②：Sさんが学習活動を自分で考えたとき（2020/08/02）

A：できるようになるために何をしますか。どうしようね。

B：うーん。

A：これ（トップ動画）見ますか、最初。

B：最初は、なんか、剣道の記事を見る（読む）。そして、知らない単語、知らない言葉を調べる。

A：調べる。おー、いいね。

B：はい。えーと、その二つでいいですね。

A：ね。その二つでいいかな。

会話データ②から、Sさんは自分で学習活動を選択できたと判断できる。

また、第4回では、Sさんが考えた学習活動に沿って学習を行った後に、読んだ記事の内容を理解できたかどうかを確認するためにクイズを行った。このクイズは「ひろがる」の各記事に用意されているコンテンツの一つである。記事の内容を問うクイズであり、学習者はこのクイズに答えることで記事の内容を読み取れたかを自分で確認できるようになっている。筆者がSさんにこのクイズを紹介したのだが、Sさんはクイズを用いて自分の理解度を確認

いく。表2は各回の学習活動である。Sさんが学習活動を自分で考えて選択することができたかを、×…すべて筆者が考えた、△…Sさんも決定の過程に参加したが、筆者が考えた部分が大きかった、○…Sさんが選択した、◎…Sさんがより自律的に考え選択した、の4段階で示した。

表2：各回の学習活動の内容

回	学習活動の内容	関与の度合い
第1回	1. 紹介するアニメを調べる。 2. 紹介文を書く。 3. 筆者に紹介する。	×
第2回	1. 寺・神社のトップ動画 ⁴ を見る。 2. コメント ⁵ の質問に答える。 3. 質問に対する答えを参考に筆者と寺や神社について会話する。	×
第3回	1. 星・夜空のコメントの質問の答えを考える。 2. 質問への答えを紙に書く。 3. 書いた答えを発表しつつ、筆者と会話をする。	×
第4回	1. 剣道の記事 ⁶ を見て、わからない言葉を挙げる。 2. わからない言葉の意味をインターネットで調べる。 3. 剣道の記事を読む。 4. 記事の内容を理解できたかをクイズで確認する。	○
第5回	1. 水族館のトップ動画を字幕なしで見る。 2. 動画の内容を聞き取れたか確認する。	○
第6回	1. お茶のトップ動画を見る。 2. コメントの質問に答える。 3. 質問に対する答えを参考に、筆者と会話をする。	○
第7回	1. スイーツのトップ動画を見る。 2. 筆者の質問に答えることで、動画の内容を聞き取れたか確認する。	◎
第8回	1. 筆者が一人カラオケの記事を読むのを聞いて紙に書き取る。 2. 答え合わせをする。 3. クイズに答えて内容が理解できたか確認する。	○
第9回	1. スーパー・市場のトップ動画を見て、内容が理解できたか確認する。 2. 「お弁当」、「いろいろなサービス」の記事を読む。 3. 記事の内容に関するクイズに答えて、理解できたか確認する。 4. コメントの質問に答えながら、筆者と会話する。	◎

考え、それを学習目標として選択することができた。Sさんがより主体的に学習目標を考え決定することができたといえる。

5-1-5. 学習目標の選択のまとめ

Sさんの学習目標を決定する過程への関与の変化をまとめると、図1のようになる。

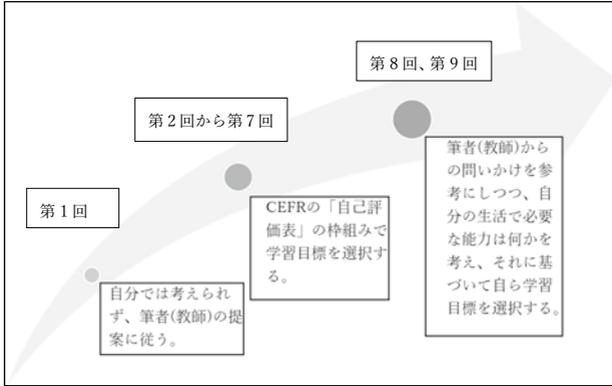


図1：Sさんの学習目標の選択の仕方の変化

第1回では学習目標の決定に参加できなかったが、第2回から第7回（第4回を除く）ではCEFRの「自己評価表」による自己評価をもとに学習目標を決定することができ、第4回では使用するリソースを見て、適切な学習目標を考えることができた。さらに、第8回、第9回では、それまで参考にしてきたCEFRの「自己評価表」の枠組みに囚われずに、日常生活の経験から自分に必要な日本語能力を再度考えた上で学習目標を決定することができたといえる。

以上から、Sさんは実践を重ねることで、自分に必要な日本語能力を考え、学習目標を決定することができるようになったといえる。授業内で学習目標を自分で考えるという学習者オートノミーを発揮することができ、自律的な学習の萌芽が見られたと判断できる。

5-2. 学習活動の選択

次に、Sさんがどのように学習活動を決定する過程に関わったのかを見て

学習塾で、教師の話聞きながらノートにメモを取ることを困難に感じており、それを克服するために、文章を聞き取って書くことを第8回の学習目標にしたのである。第2回から第7回（第4回を除く）ではCEFRの「自己評価表」を参考に、どの技能のレベルを向上させるかを選択するのみであったが、第8回は与えられた選択肢から選ぶのではなく、自ら目標を考えることができたといえる。Sさんが日常生活の経験から今の自分に必要な日本語能力を把握し、それを学習目標にして能力を向上させようという主体性が見え、学習目標を決定する過程への関与が深くなったといえる。

さらに、第9回では、今までの学習目標の立て方を反省し、自分の学習に何が必要なのかを再度考えた上で学習目標を決めることができた。会話データ①は第9回の学習目標を決めるときの筆者とSさんのやり取りである。なお、これから本稿で示す会話データはすべて、Aは筆者、BはSさんである。

会話データ①：Sさんが自分にとってどんな日本語能力が必要なのか再度考え、その考えを新たにしたとき（2020/09/13）

A：何が必要？一番。

B：聞くことですね。

A：聞くことが必要？

B：あ、一番必要なのは、僕は理解です。能力です。あ、理解できるの能力です。

A：あー、そうですね。

B：それは一番大事だと思います。

A：あー、はいはいはい。だから、

B：ただ聞くのも、ただ書くのも、その、理解できないは何もならない。

A：あー、たしかにたしかに。じゃあ、理解することが大事ですね。

会話データ①から、一度は第2回から第7回（第4回は除く）のようにCEFRの「自己評価表」の枠組みから選択して、「聞くこと」を学習目標にしようとしたが、再度自分に必要な能力を考えることで、ただ聞くことや書くことを学習するのではなく、聞いたり書いたりすることによって内容を理解することがSさんにとって一番必要であると考えたことがわかる。このことから、第9回は学習目標を「理解すること」にした。Sさんは、これまでのCEFRの「自己評価表」の枠組みに囚われずに、自分に必要な能力を再度

それは、学習目標を考えるときに、Sさんがどう考えればよいか悩んでいたため、筆者がCEFRの「自己評価表」を参考にして決めるように助言したからである。4.2で述べたように、Sさんは「ひろがる」を用いた授業の実践前に、CEFRの「自己評価表」による自己評価を行った。この「自己評価表」では、日本語能力を「理解すること」、「話すこと」、「書くこと」の3つに分けて評価できるようになっており、さらに「理解すること」は「聞くこと」と「読むこと」、「話すこと」は「やり取り」と「表現」の項目に分けて評価できるようになっている。そのため、Sさんは「聞くこと」「読むこと」「やり取り」「表現」「書くこと」の5つのなかで、自分に足りていない能力は何かをCEFRの自己評価によりすでに把握していたのである。そして、実践ではそれを参考にしようとして学習目標を選択してもらおうと考えたのである。また、「聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のようにいくつかのわかりやすい選択肢を提示することで、Sさんが学習目標を選択しやすくする狙いもあった。つまり、Sさんが学習目標を考えやすいように学習目標の枠組みを与えたということである。このことから、表1で示されている「話すこと」、「聞くこと」のように、学習目標がやや抽象的になったのである。

以上から、第2回から第7回（第4回を除く）では、Sさんが実践前の自己評価によって自分の日本語能力を把握し、それを参考に自分に必要な学習目標を選択することができたといえる。しかし、それはあくまでCEFRの「自己評価表」から与えられた枠組みのなかから選んでいるにすぎない。

5-1-3. 第4回：使用するリソースを参考に選択する

第4回は、学習目標を選択する前に、使用するリソース（トピックとコンテンツ）を選択したため、CEFRの「自己評価表」は参考にせず、選択したトピックとコンテンツ（剣道に関する記事）を使ってどんな学習ができるかを考えてから、Sさんが自分に適切な学習目標を選択した。

5-1-4. 第8回、第9回：日常生活から自分に必要な日本語能力を考え、選択する

第8回では、Sさんが日常生活での経験から今の自分に必要な日本語能力を考え、学習目標を選択することができたといえる。

第8回の学習目標は「聞いて書くこと」であった。Sさんは普段通っている

択した、◎…Sさんがより自律的に選択した、の4段階で示した。

表1：各回の学習目標・トピック及びSさんの決定過程への関与の度合い

回	学習目標	関与の度合い	トピック	関与の度合い
第1回	好きなアニメを紹介できる。	×	アニメ・マンガ	×
第2回	話すこと。	△	寺・神社	△
第3回	話すこと。	○	星・夜空	○
第4回	剣道の記事を読むこと。	○	武道	○
第5回	字幕なしで動画を見ること。	○	水族館	○
第6回	お茶について話すこと。	○	カフェ・お茶	○
第7回	聞くこと。	○	スイーツ	○
第8回	聞いて書くこと。	◎	音楽	○
第9回	理解すること。	◎	スーパー・市場	◎

5-1-1. 第1回：自分では選択できず、筆者（教師）の意見に従う

第1回では初回ということもあり、自分で学習目標を考えることになり戸惑っている様子であった。そこで、筆者がSさんの日本語能力と興味・関心を考慮したうえで学習目標を提案し、それに決定した。そのため、Sさんは学習目標の決定に関わることができなかったといえる。

5-1-2. 第2回から第7回（第4回を除く）：CEFRの「自己評価表」を参考に選択する

第2回では、第1回で筆者のみで学習目標を決定したことを反省し、SさんにCEFRの「自己評価表」による自己評価の結果を参考に学習目標を選択するよう助言した。Sさんは自己評価において、「話すこと」と「書くこと」のレベルが、「読むこと」と「聞くこと」と比べて低いと評価したため、第2回では「話すこと」を学習目標として選択したと考えられる。

その後の第3回、第5回、第6回、第7回でも同様に、SさんがCEFRの「自己評価表」を参考に学習目標を選択した。ここで表1を参照されたい。なぜ第2回以降は具体的な学習目標が書かれておらず、「話すこと」、「聞くこと」、「読むこと」のように4技能のいずれかで書かれている回が多いのだろうか。

4.3. 授業方法

毎回の授業は以下の手順で行った。

I. 学習目標の選択

何を学習したいか、何ができるようになりたいか、学習目標を選択する。

II. トピックの選択

「ひろがる」のどのトピックを使用して学習するかを選択する。

II. 学習活動の選択

目標達成のためにやるべきことを考え、「ひろがる」を使用してどのような学習活動を行うかを選択する。

III. 実行

考えた学習方法に沿って、学習をする。

IV. 振り返り

学習の達成度や新しく学んだ表現を振り返る。

学習の達成度を、「よくできた」、「できた」、「あまりできなかった」、「できなかった」の4段階で自己評価し、その授業で新しく学んだ表現も書く。

これらの学習目標や学習活動などは学習記録シートに記入した。

5. 実践結果と考察

以下では、この実践によって、Sさんの自律的な学習を促すことができたかどうかについて、データをもとに考察する。Sさんが自分の学習を決定する過程にどのように関わったのかを、①学習目標の選択、②学習活動の選択の2つの項目に分けて見ていく。

なお、「ひろがる」のトピックの選択については、以下の表1で示すように、第3回以降はSさんが自分の趣味や興味に基づいて積極的に選択した。

5-1. 学習目標の選択

ここでは、Sさんがどのように学習目標を決定する過程に関わったのか、また、その関わり方はどのように変化していったのかについて考察する。

まず、Sさんがどのような学習目標を考えたのかを紹介する。表1は各回の学習目標とトピックである。また、Sさんが学習目標とトピックを自分で考えて選択することができたかを、×…すべて筆者が考えた、△…Sさんも決定の過程に参加したが、筆者が考えた部分が大きかった、○…Sさんが選

学習者が自ら学習目標を選択し、学習方法や内容を考え、実行することができるようになり、そうすることで、学習者一人一人に合わせた学習が可能となる。このような自律的な学習を行うためには、教師によって決められた教材を使用するのではなく、学習者が自らリソースを選択し、活用することが必要である。近年の情報サービスの発達により、学習者はインターネットを通して、さまざまなリソースに触れることができるようになり、学習者は自分の学習にそれらを活用することができるようになった。しかし、なかにはインターネットのリソースの使用をあくまで趣味として楽しんでいるにすぎず、学習の意識がない学習者もいる。このような学習者たちが、趣味として楽しむだけでなく、そのリソースを活用して自律的に学習することができるようになれば、より効果的に日本語を学習することができるだろう。では、教師はどのように学習者にインターネットのリソースの活用方法や学習効果を提示し、リソースを活用した自律的な学習を促せばよいのだろうか。

また、「ひろがる」は学習者が趣味を通して日本語を学習できるwebサイトであり、学習者の自律的な学習を支援する目的を持つ。では、教師が学習者に対してリソースの活用方法を示したり、自律的な学習を促したりするために、「ひろがる」をどのように活用することができるのだろうか。

以上のような問題意識から、本研究では以下の研究課題を立てた。

課題：日本語学習webサイト「ひろがる もっといろんな日本と日本語」を使った授業を行うことで、学習者オートノミーを育成し、自律的な学習を促すことができるか。

4. 実践の概要

4-1. 対象者と実践の期間

対象者は中国人男子中学生1名（Sさん）である。Sさんは2019年4月から日本で生活している。授業は、2020年7月12日から9月13日にかけて、各回30分から1時間程度で計9回行った。

4-2. 実践前の自己評価

「ひろがる」を使用した授業の実践に入る前に自己評価を行った。自己評価にはCEFR³の「自己評価表」を用いた。

的な学習を促した実践例としては小島（2008）が挙げられる。小島（2008）では、多くの学習者がインターネットを通して日本のアニメや歌をリソースとして選択し、授業時間外にそれらを活用し学習したことが報告されている。小島（2008）によると、学習者はインターネットから得たリソースを聞いたり読んだりすることで活用しており、書く、話すといった学習は見られなかったという。そのため、学習者がより効果的な学習をするために、教師がインプットだけでなく、アウトプットを伴う学習をどのように促すかが課題として挙げられている。

2.4. 日本語学習webサイト「ひろがる もっといろんな日本と日本語」

「ひろがる もっといろんな日本と日本語」（以下、「ひろがる」）は国際交流基金関西国際センターが2016年から公開している日本語学習サイトである。近年、国内外の日本語学習者の増加やインターネットの発達に伴い、eラーニングリソースが増えつつあり²、「ひろがる」もそういったeラーニングリソースの一つである。伊藤・石井・前田（2019）によると、「ひろがる」は、趣味などの自分の好きなことを通して日本語と異文化理解能力の育成を支援するサイトをコンセプトとしており、学習者は自分の趣味や興味・関心に応じて、さまざまなトピックを選択し、日本文化や日本語に触れることができるようになってきている。トピックは、事前に学習者への調査を行い、特に興味・関心の高かった12のトピックが用意されている。「武道」「書道」「アニメ・マンガ」のような日本文化を代表するようなトピックや、「スイーツ」「本・図書館」のような世界共通で趣味として楽しまれているトピックがある。1つのトピックには、6つのコンテンツが置かれており、トピックの世界観を感じられる「トップ動画」やトピックに関連するさまざまな情報を紹介している「記事」、学習者が自由にコメントを書いて投稿することができる「コメント」など、さまざまなコンテンツが用意されている。

しかし、2016年公開という新しさから、「ひろがる」の授業での活用方法はまだ報告されていない。

3. 問題のありかと実践研究の目的

学習者の増加と学習スタイルの多様化にともない、学習者オートノミーの育成の重要性が高まってきている。学習者オートノミーを育成することで、

ネットのリソースに気軽にアクセスすることができるため、インターネットのリソースは学習者にとって自分の自律的な学習に取り入れやすいものなのではないかと考えられる。

だが、トムソン木下（1997）では、インターネットのリソースの授業への活用例として、パソコンを使って日本人学生と通信することしか挙げられていない。現在は、インターネットのリソースが充実してきており、学習者にとって身近なものになりつつある。そのため、インターネットのリソースには他にどのような活用方法があるのかを考えることが課題になってくるのではないだろうか。

2.3. インターネットのリソース使用についての実態調査

島崎（2010）では、日本語学習者が教室外で、どのようにインターネットのリソースを使用しているのかについて調査を行った。そこでは、調査対象の国外の学習者11名全員がインターネットのリソースを使用していることが明らかになった。例えば、SkypeやFacebookを利用して日本人と交流していたり、日本語の動画や音楽を視聴していたり、日本語のサイトでオンラインショッピングをしていたりとその用途はさまざまであった。また、このようなインターネットのリソースを使用した学習に対する意識の違いも明らかになった。インターネットのリソースを使用しているときに、学習を意識している者と意識していない者がいたのである。学習を意識していない学習者たちは、インターネットのリソースの使用をあくまで趣味としており、リソースをどのように活用し、自分にどのような学習効果をもたらすかについては考えていなかったという。一方、学習を意識している学習者は、リソースの活用方法や学習効果を考え、それを自分の学習活動に利用していたことが明らかになった。

以上のことから、島崎（2010）では、教室外でのリソース使用の場面における、学習の意識化を図る取り組みの必要性を述べているが、具体的にどのように学習者に学習を意識させ、リソースの活用した学習を促すかについては考えられていない。このことから、教師がいかに学習者に対してインターネットのリソースの活用方法やその効果を提示し、学習を意識させるかが課題となるだろう。

また、学習者に自分の興味に応じて自らリソースを選択してもらい、自律

法を自分で選択して計画を立て、その計画を実行して成果を評価する力」と定義されている。現在、日本語学習者は増加傾向にあり、学習者の出身国もさまざま、学習の目的や学習環境も多様化しており、学習者オートノミーの育成の必要性は近年ますます高まっている。学習者オートノミーを育成するための実践研究もいくつか報告されている（阿部2013, 山本2011など）。

しかし、インターネットのリソース、特にeラーニング¹のリソースを活用した学習者オートノミーの育成を目的とした授業実践例の報告は少ない。

2.2. 日本語教育におけるリソース

学習者が自分で学習内容や方法を選択して学習を実行するため、つまり、自律的な学習を行うためには、教師や友人の力を借りたり、身の周りのものを活用したりする必要がある。実社会には日本語学習に活用できそうなリソースがさまざまあるが、そのなかから自分の学習に適しているリソースを選び取って学習方法を考える力が、自律的な学習を行う上で重要になると考えられる。

日本語教育におけるリソースの活用については、しばしばトムソン木下（1997）が引用される。トムソン木下（1997）では、リソースを実社会での日本語使用のための学習に使い、実際の日本語使用にも役立ち、また、日本語使用の対象となる、つまり学ぶ材料であると定義している。実社会のなかから自らリソースを選択し、学ぶ材料にすることは、社会言語学、第二言語習得、教育学の面から見ても有意義であると述べており、また、教室内での日本語使用のためにつくられた「教材」ではなく、実社会に存在するリソースを学習に活用することで、学習者は教室空間から解放されるとしている。

トムソン木下（1997）では、リソースを人的リソース、物的リソース、社会的リソース、情報サービスリソースの4つに分類している。人的リソース、物的リソース、社会的リソースは田中・斎藤（1993）を参照したものだが、トムソン木下（1997）では、それに加え情報サービスリソースの項目を設けた。情報サービスリソースとは、特に海外における日本関連の情報源としてのリソースであり、例として、日本映画上映の情報や日本文化関連の展示会の情報などを提供してくれる国際交流基金の日本文化センターが挙げられる。また、日本関連の情報を得たり、交換したりすることができるインターネットも情報サービスリソースの一つであると説明している。現在ではインター

リソースを活用した自律的な学習を促すには どうすればよいか

——日本語学習サイト「ひろがる もっといろんな
日本と日本語」を活用した例——

遠藤 琴 里

1. はじめに

近年、日本語学習者が増加、多様化している。それらの様々な学習目的や学習環境を持つ学習者一人一人がそれぞれのニーズやレディネスに合った学習を行うためには、学習者が自分に合った学習を自分で考え実行することが必要になってくる。そして、教師は学習者が自分の学習を自分で考えることができるようになるために、学習者の自律性を育てることが求められる。

インターネットが普及した現代では、学習者がインターネットを通して、気軽にリソースにアクセスできるようになった。日本語で書かれた資料や日本語音声の動画など、学習に活用できそうなリソースがインターネットから気軽に得ることができ、自由に自分の学習に活用することができる。本研究では、インターネットから得られるリソースが学習者の自律的な学習をサポートするのではないかという考えから、学習者の自律性を育てることを目的に、インターネットのリソースを使用した学習者主導の授業を行った。

具体的には、インターネットのリソースの一つである日本語学習webサイト「ひろがる もっといろんな日本と日本語」を使用した授業を行い、そのなかで、学習目標や学習活動、リソースの活用方法などを学習者自身に考えてもらうことを試みた。本稿ではこの事例をもとに、リソースを活用した自律的な学習について考察していきたい。

2. 先行研究

2.1. 学習者オートノミー

近年、さまざまな教育現場で学習者の自律性を重視した教育が行われている。学習者オートノミーは学習者の自律性を指す言葉であり、青木（2008：10）では「人が何らかの理由で何かを学ぼうと思った時に、学習の内容や方

どちらが好きですか？オンライン授業？教室での授業？

1. オンライン授業はどうでしたか。数字に○をつけてください

わかりにくい ← 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 → わかりやすい

たのしくない ← 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 → たのしい

不便 ← 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 → 便利

もう受けたくない ← 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 → また受けたい

2. どうして もう受けたくないですか

質問ができない/画面が小さい/字が見えない/メモができない

スピードが速い/先生にチェックしてもらえない/目が合わない

インターネットの状況が悪い/音が聞こえにくい/友達に会えない

宿題が多い/おもしろくない

その他 ()

3. どうして また受けたいですか

家でリラックスできる/学校に行かなくていい/movie がわかりやすい

たくさん話せた/わかりやすかった/字が見やすかった

その他 ()

4. オンライン授業の時に使ったものはなんですか

教科書/パソコン/携帯電話/ipad/イヤホン/マイク

注6：ここでいうMicrocultural analysis（文化のマイクロ分析）とは、カメラ、テープレコーダー、ビデオフィルムなどを駆使して撮った Birdwhistell の記録のことで、人間行動を客観的に観察することをいう。

注7：アンケートに協力してもらった32名の学習者の国籍はネパール人16名、ベトナム人12名、中国人4名である。

注8：一週間の学習領域は、文法4コマ、聴解4コマ、読解6コマ、JLPT対策2コマ、作文2コマ、文字語彙2コマである。

＜参考文献＞

岩井朝乃、峯崎知子（2020）「大学の教養科目における初級日本語の同期型オンライン授業——対面授業との比較を通して探る特徴と課題——」『韓国日語文学会夏季オンライン国際シンポジウム予稿集』 pp.35-38

後藤歩（2020）「大学における日本語会話授業実践報告——講義動画及びzoomでの授業を通して——」『韓国日語文学会夏季オンライン国際シンポジウム予稿集』 pp.39-43

久國正吉、田村武志、佐藤博文（1998）「分散協調学習システムの構築とその評価」『電子情報通信学会技術研究報告ET教育工学』 98（259） pp.35-40

藤本かおる（2019）「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究——担当教師へのインタビューを中心に——」『JeLA学会誌』 Vol.19 pp.27-41

文化庁 「令和元年度国内の日本語教育の概要」

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/r01/（閲覧日2020年5月1日）

三宅祐司、久野かおる、小出寿彦、津坂朋宏、波村慎太郎（2021）「zoomによるオンライン授業の振り返りと課題——双方向対話型の授業展開を目指して——」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.27 No1 pp.8-9

Ray L. Birdwhistell（1970）, *Kinesics and Context: Essays on Body Motion Communication*, Univ. of Pennsylvania Press Philadelphia, pp.157-158

専修学校、もしくは各種学校となっている。これらの学校への入学者は在留資格が認められる。文化庁国語課による「令和元年度国内の日本語教育の概要」によると令和元年度11月1日現在法務省告示機関は618校で日本国内における日本語教育機関全体の24.3%を占めている。

日本語学習者数は年々増加傾向にあり、東日本大震災の影響を受けて一時的に減少したが、その後は順調に増加を続けている。「令和元年度国内の日本語教育の概要」によると、日本語学習者数は277,857人となっている。そのうち、日本語学校を含む法務省告示機関で学習する日本語学習者数は11,172人となっている。学生の主な出身地・地域は、中国、ベトナム、ネパール、台湾、韓国などであり、主な傾向としては数年前に比べるとベトナム、ネパールが増加傾向にある。

注2：zoomとは、zoomビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用したWeb会議サービスの名称である。zoomサービス内にミーティングルームを開設し、ミーティングIDやパスワードを共有するユーザー同士で多地点と同時にWeb会議を行うことができるため、今回のコロナ禍において、急遽オンライン授業に切り替えるにあたり使用されたツールの1つである。

注3：teamsとは、マイクロソフトが、Windows、MacOS、Linux、iOS及びAndroid向けに開発・提供するコラボレーションプラットフォームであり、Microsoft365アプリケーションの一部である。会議のスケジュールやアドホックな作成が可能で、チャンネルを訪れたユーザーは現在会議が進行中であることを確認できる。今回のコロナ禍において使用が報告されたツールの1つである。

注4：skypeはマイクロソフトが提供するクロスプラットフォーム対応のコミュニケーションツールである。ユーザー間で、1対1またはグループでの無料音声・HDビデオ通話が可能なため、以前から海外とのオンライン教育で使用が報告されているツールの1つである。

注5：class inは2015年に中国の北京翼鷗教育科技（EEO）が提供を開始したサービスで全世界で2万以上の教育機関に採用され、これまでに1200万人以上の生徒や学生へのオンライン授業に使われてきた。動画による多人数の授業を簡単な操作で行え、中国の北京大学や大手学習塾のほか、海外の大手教育機関とも提携している。

授業を展開できるという特性からオンライン授業の方が効率的に言語能力は伸びる可能性はある。しかし、初級学習者においては「わからない」部分を言語化することが難しく、教師側からの積極的な気付きを学習者側も期待していることがわかった。同時に教師側にも学習者の言葉にならない「わからない」という空気を積極的に感じ取るためにはオンライン授業ではなく対面授業の環境が必要であることがわかった。また、オンライン授業は対面授業に比べて時間のロスがなくなるというメリットがあったが、教師側が感じていたグループワークのために机を移動する時間などの「時間のロス」も、学習者にとっては時間のロスではないのかもしれない。今回具体的な答えは出なかったが、この時間のゆとりこそ、学習者の気持ちを切り替える時間であったり、考えをまとめる時間であったり、なにかしら有効に働きかけているのではないだろうか。そのあたりは今後の課題としたい。

さらに、日本語学校へ留学するということは日本語を学習するだけではなく、「言葉以外の情報を得られるという意味では留学したり日本にいたりするのは大きい。(協力者B)」のではないだろうか。「(技能実習生は)教室で学習したことではなくて実社会でキャッチした情報の量が大きいかもしれない。印象も強いかもしれない(協力者B)」と述べられているように、語学留学といっても、日本で生活することによって、教室で学習すること以上に得られる情報も多いと言えるだろう。

今後オンライン授業等形式がなくなることはないと思われる。その中で、対面授業の意義をオンライン授業にどのように取り入れていけるのかは今後の課題としたい。

6. おわりに

オンライン授業と対面授業という全く別の授業形態に対して同じ教室活動や学習支援を望むことは、当然、無理が生じる。オンライン授業という新たな授業形式が一般化してきた現在において、対面授業でしかなしえない教室活動を再確認し、学習者のニーズと時代にあった日本語教育を目指していきたいと考える。

注1：日本語学校は日本国内外に存在し、日本国内においては法務省より告示を受けた日本語教育機関を特に指しており、学校登録されているものは

で、もし、今後オンライン授業と対面授業を選択できるとしたらどちらを選ぶか」という問いに対して、「対面授業を受けたい」と答えた学習者が圧倒的に多く、「質問ができない」ことを理由にあげていた。中には、「教室だったらわからなくて考えていたら先生が来てくれるけど、オンラインの時はわからなくてもどんどん授業が進む（ベトナム人学生）」と述べており、学習者は教師からの積極的な気付きを待っているということもわかる。これに対して、教師側も、「どこがわからなくて止まっているのかを感じてあげられるのはオンラインよりも対面の方が感じてあげやすい（協力者B）」と述べていることから、オンライン授業では実現できない学習支援であるといえる。

また、コミュニケーションに関しても「目が合わない」ことで、誰に対して発言しているのかわからないために、名前を明言するなどの工夫を施さなければならぬなどのオンライン授業特異のコミュニケーションスキルが求められる。これらに対する不慣れもオンライン授業のやりにくさの一因なのではないかと考えられる。

日本語学校に通う学習者の中にはいつもより（対面授業の時より）「宿題が多い」ことで今後オンライン授業を受けたくないと回答した学生もいた。協力者Aの勤務する大学ではLMS（Learning Management System学習管理運営システム）に課題提出する形式を取ったため完全にオンライン化できていたのだが、日本語学校の場合はそのようなオンラインシステムが構築されておらず、学習者は課題を提出するためだけに学校に定期的に行っていた。普段の対面授業であれば課題を提出するために学校へ改めて行くことはないのだが、今回のオンライン授業では、休校にした時間分を取り戻すために、指定された日に課題の提出をしに行かなければならない。この回答はこのような事情から負担が生じたため得られた回答だと推察する。

5. 対面授業でしか実現できないことと日本語学校の存在意義

今回、多くの日本語教師がオンライン授業に感じた「やりづらさ」は「通常の対面授業をオンライン授業でも置き換えて行おうとしそれがうまくいかないことが多い（藤本2019）」ことにある。そのため、オンライン授業にメリットも感じつつも、画面に限られた情報しか映し出されないことにやりにくさを感じた。また、今回の調査から、日本語学校における対面式授業の存在意義は、「空気を共有すること」に他ならないと感じた。言語に特化した

表4. オンライン授業の時に使ったものは何ですか

	回答者数 (N=32)
携帯電話	18 (78.3%)
パソコン	5 (21.7%)
イヤホン	2 (8.7%)
i-phone	2 (8.7%)
教科書	1 (4.3%)
マイク	0

一方、学習者の中でパソコンや、少し大きめのタブレット端末で受講した学習者からは「画面が小さい」「字が見えない」などの回答はなかった。数回の授業の後、この状況が分かったことから、教師側は画面共有する資料の作り方の工夫を試みた教師もいた。その一人である協力者Bは「学生の使用している端末がスマホだったため（画面が小さくて）、パワーポイントの作り方が大事だと感じた」（協力者B）と述べている。また、「スピードが速い」に関しては、普段の対面授業であれば絵カードなどを手元に準備したり、めくったりする時間が存在するが、zoomの画面共有機能を使いパワーポイントを使用することにより、時間の節約ができたために、授業の進行も実際にスピードが速くなり、「（音声をミュートにさせているため）一方的になりがち（協力者B）」な印象を与えたようである。また「絵カードの代わりにビジュアルエイズがどんどん出せるのはメリット（協力者B）」「時間のロスがなくなる（協力者A）」ために、教師側はスムーズな授業が展開できたと評価している反面、スピードが速いため、学習者は「メモができない」という回答も出てきたものと思われる。また、「質問ができない」という回答に関しても、次々と授業が展開されるために、質問を言語化しなければいけないという負担とともに、質問をするタイミングもなかったのも理由の1つなのではないかと考えられる。さらに、教科書は手元に用意して授業に臨むように指示されていたにもかかわらず表4に示す通り、「教科書」と回答した学習者が少なかったこと、表3に示す「メモができない」の回答が多かったことから、メモを取る時間もないほど授業のスピードが速く、画面に集中してしまったことで、教科書に対する印象は薄くなってしまったものと考えられる。さらに、聞き取り調査において、「今回、オンライン授業を経験した上

表3. どうしてもう受けたくないですか

	回答数（人）（N=32）
音が聞こえにくい	10（31.3%）
画面が小さい	9（28.1%）
インターネットの状況が悪い	9（28.1%）
友達に会えない	8（25.0%）
先生にチェックしてもらえない	6（18.8%）
宿題が多い	6（18.8%）
おもしろくない	6（18.8%）
質問ができない	4（12.5%）
スピードが速い	4（12.5%）
目が合わない	4（12.5%）
字が見えない	3（9.4%）
メモができない	3（9.4%）
その他	・先生の説明が分かりにくい ・学校で課題があって交通費がかかった

学習者が主に感じているやりづらさは、「音が聞こえにくい」という回答が10名で31.3%と最も多く、音声に関することが挙げられた。また、次に多かったのは「画面が小さい」「インターネットの状況が悪い」でそれぞれ9名、28.1%であったが、これは、突然のオンライン化に伴い準備期間もなく、手元にあった端末のみで急遽オンライン授業を受けなければならなくなったという背景がある。日本語学校に通っている学習者のほとんどは、表4に示す通り、パソコンを持っておらず、手元にあった端末はスマートフォンだけであったため、スマートフォンで受講したために画面が小さくて、文字が見えにくいという回答が多かったと考えられる。

い」「たのしくない」方へと回答した学習者の方が「わかりやすい」「たのしい」と回答した学習者より若干多いが大差はなく、全体として、オンライン授業に対して学習者自身も教師同様に、メリットもデメリットも感じているようであった。また、便利かどうかについては「便利」の4、5に回答した学生が15名（47%）、「不便」1、2に回答した学生が9名（28%）で、オンライン授業の利便性を認める回答が得られた。

オンライン授業を経験した結果、「もう受けたくない」と回答している学生が過半数となったことに注目したい。この結果から、オンライン授業にはメリットもデメリットも感じたが、選べるならオンライン授業より対面授業を選択したいという学習者の傾向がわかる。

次にオンライン授業のどのような点を評価しているのかを探るために、どうしてまた受けたいのかを聞いた結果を以下に示す。表2に示すように、また受けたい理由に関して学校に行かなくていいという物理的な利便性が挙げられた。また、フォローアップインタビューで、コロナ禍において安全性が確保されるといった安心感を意味するコメントも得られた。

表2. どうしてまた受けたいですか

	回答数（人）N=32
学校に行かなくていい	6（18.8%）
わかりやすかった	6（18.8%）
家でリラックスできる	5（15.6%）
たくさん話せた	5（15.6%）
movieがわかりやすい	4（12.5%）
字が見やすかった	2（6.3%）
その他	安全

次に、やりづらかったことを探るために、どうしてもう受けたくないのかを聞いた結果を表3に示す。

も限られてくる。ここに対面授業の意義が見い出せるのではないかと考えられる。

4.2 日本語学習者が感じたオンライン授業でやりにくかったことは何か

2020年5月から急遽オンライン化された授業を経験した仙台市内の日本語学校の初級日本語学習者32名^(注7)にアンケート調査を実施した。学習者の言語能力に鑑み協力者A、Bのインタビュー調査結果から抽出されたキーワードをもとに選択式のアンケートとしている。なお、アンケート用紙を回収しながら、口頭でも聞き取り調査を行った結果も以下に記す。

今回、学習者が受けた授業は以下の通りである。授業は通常の対面授業が行われるはずの時間と同じ時間に開始し、1コマ50分の授業を1日4コマ行う。学習領域^(注8)も、対面授業で行われる予定であったものを基本的にそのまま行った。オンライン授業の環境が整うまでの1か月間を休校としていたため、その期間の授業時間分を補うために自習用の課題提出を義務付け指定された提出日に提出させた。

表1. オンライン授業はどうでしたか（単位：人）N=32

	1	2	3	4	5	
わかりにくい	10 (31.3%)	5 (15.6%)	8 (25%)	1 (3.1%)	8 (25%)	わかりやすい
たのしくない	12 (37.5%)	5 (15.6%)	5 (15.6%)	1 (3.1%)	6 (18.8%)	たのしい
不便	4 (12.5%)	5 (15.6%)	4 (12.5%)	2 (6.3%)	13 (40.6%)	便利
もう受けたくない	12 (37.5%)	6 (18.8%)	3 (9.4%)	1 (3.1%)	7 (21.9%)	また受けたい

表中に示す1～5の数字は5段階でどのくらいの程度そう思ったかを示している。

わかりやすさに関して、表1に示すように、もっとも多かった回答は「わかりにくい」が10名で、31%だが、「わかりやすい」に関して、8名であり25%を占めている。「どちらでもない」を意味する「3」よりも「わかりにく

図れる環境であるということである。

4.1.4 コミュニケーションに関すること

「オンラインは言葉でしかコミュニケーションは成立しないが、人間のコミュニケーションは言葉だけではなく空気感とか場の共有とかがオンラインでは出せない」(協力者A)

「言葉以外の情報を得られるという意味では留学したり日本にいたりするのは大きい。言葉以外の情報の面が80%。コミュニケーションはことばだけで行われているわけではない。オンラインでのやりとりは授業に限らず顔見で話すところまではパーフェクトにできていてもその他の部分がない。対面では話はきちんとできるけど、会話が始まる前や終わった後の振る舞いが決める部分もある。」(協力者B)

「(対面授業で)話を意図して聞いているわけではないが、耳に入ってきたことがヒントになって(学習者の)発話が促されている気がするし、(教師も)授業の進行も適宜変えやすい」(協力者C)

協力者A、B双方のインタビューの中に「オンライン授業であれば言語でしかコミュニケーションは成立しない」という回答があった。画面に映っている上半身部分だけではノンバーバルなコミュニケーションの部分はかなりの割合で欠落してしまっていると考えられる。コミュニケーションに関しては、発話によるコミュニケーションと身振りや手ぶりなどの動作や物言いなどによるコミュニケーションに大きく二分される。そのうち後者はノンバーバルコミュニケーションと呼ばれている。ノンバーバルコミュニケーションに関してはRay L.Birdwhistellが、“Our present guess is that in pseudostatistics probably more than 30 to 35 per cent of a conversation or an interaction is carried by the words. Microcultural analysis (注6) offers objective measures of at least a portion of the remainder (Birdwhistell 1970: 157-158)”と述べており、言語による情報判断が3分の1であり、残りの3分の2が、非言語コミュニケーションによる情報判断だとしている。

つまり、オンライン授業においては人間のコミュニケーションの大半を占めているノンバーバルな部分かなりの割合で欠落してしまっていると考えられる。それにより、言語として表れていないものに関しては得られる情報

4.1.3 学習支援に関すること

「時間のロスがなくてやりやすいが、理解度の把握が難しく、一方的な授業になりがち」(協力者A)

「(学習者が) どこがわからなくて止まっているのかを感じてあげられるのはオンラインよりも対面の方が感じてあげやすい。」(協力者B)

「オンライン授業はことばにするから力が付くが、言葉にしなかったら、そのまま流されてしまう。」(協力者C)

対面授業であれば、教師は学習者の手がとまっていたら、学習者が自ら意思表示をしなくても学習者が支援を必要としていることに気付くことができる。一方でオンライン授業では手元が見えない、表情が読みにくいという特性から教師からの積極的な学習支援が困難になる。また、学習者も疑問があったとき、対面授業であれば指で示すなどの方法で質問できるが、オンライン授業では常に言語化して質問をしなければならず負担となっている。

さらに、学習者も疑問があったとき、オンライン授業では常に言語化して質問をしなければいけない。そうすると、質問をするという行為自体のハードルが挙がってしまう。これに関して協力者Bは、「(教えている技能実習生たちが働いている工場での作業中に日本人従業員との他愛もない会話の中から得た方言などに対しての疑問があったときなどは) 対面授業の場合は教師に聞きやすいようだ。(対面授業であれば) 発音が悪いのもクリアできる。」と述べており、対面授業であれば、質問の内容を吟味するなど、正確に言語化しなければいけないというハードルが下がり、気楽に質問できる環境を整えることが期待できる。また、協力者Bは学習者の質問に対して回答するタイミングの問題についても「(対面授業なら) 質問を内容によっては後から答えるというような回避ができる。オンラインだとラインを切ったら終わってしまう関係なので、後から答えるというのは有効ではない。」と指摘している。つまり、時間の制限があって回答ができなかった場合も、対面授業であれば休み時間などに臨機応変に対応することが可能だが、オンライン授業は、場合によってはネットワークを切ってしまったら授業も終わってしまうので、改めて別の時間をとることが難しいと述べている。学校に通うというのは、教師と学生が自然にコミュニケーションがとれ、疑問の解消も気軽に

能力が必要とされるだろう。筆者が勤務する日本語学校においては、日本語での入力方法の指導をしておらず、キーボードで日本語の入力する指導をしているところは、未だに少ないことが予想される。

4.1.2 学習者の自律性に関わるもの

「グループワークも学習者同士で自律的に活動していかなければ成立しない教室活動の一つだった」(協力者A)

「オンライン授業は学生側の自律的な学習態度が要求される」(協力者A)

「オンライン授業は絶対に予習をしておくことを条件にしないと進まない。自主学习ありきの授業になる。自分のモチベーションをキープできるようなシステムづくりをする必要がある」(協力者B)

「協働学習だとしてブレイクアウトルームで学習するとしたら(教師は)ファシリテーター的な役割になる。」(協力者B)

「友達の課題の答えを丸写ししているようだが、チェックする術はない。学生を信じるしかない。」(協力者C)

協力者A、Bが対面授業からオンライン授業に変わったときに感じた「やりづらさ」は学習者に自律的に動いてもらわなければいけないという点であった。対面授業は、教師と学習者双方に一定の緊張感が生まれ、集中を促すことができるが、オンライン授業の場合は、見える部分が限定的であるため学習者の行動が把握できず、教師側が学習者の集中を促すなどの支援がしづらくなる。仮に手元で別の作業をしても教師が確認する術はないため、これは試験などを行う際にもカンニング防止などの観点からも課題となったオンライン授業におけるデメリットであった。画面に映し出されていない手元で仮に携帯電話を操作するなどの学習と関係のないことをしていても教師は気付きにくい。それゆえ、授業中であっても教師が適切なタイミングで助言をするなどの働きかけから学習者の集中力を維持することも難しくなる。

よって、学習者に日本語学習に対するモチベーションや学習意欲のコントロールを委ねることになるのである。モチベーションに関しては、協力者Bは「(日本語学校では)友達に会えることもモチベーションを上げる要因になっているようだ」と述べており、実際に人に会うことが、学習者のモチベーションを維持するための一因となっている可能性も否定できない。

今回の外的な要因からオンラインへの急な変更を余儀なくされたことに起因して、多くの日本語教師が模索しながら進めていたのだが、教師が感じている「やりづらさ」は藤本（2019）に「通常の対面授業をオンライン授業でも置き換えて行おうとしそれがうまくいかないことが多い。」とあるように、多くの日本語教師がこれまでの経験に基づいた対面授業をそのままオンライン授業に反映させようとした。そのため、時間的、空間的な制約から解放されたオンライン授業にメリットも感じた反面、画面に限られた情報しか映し出されないことにやりにくさを感じていた。机間巡視も、zoomであれば手元のボタンで画面がすぐに切り替わるので時間のロスがなく、発表もグループごとに画面共有機能で発表資料を提示できることからグループワークを取り入れやすかった反面、教室全体が見えないことにより、各グループの進捗の確認をするために教師は、各ブレイクアウトルームに入って数回確認作業をしなければいけない。全体が把握できていれば、グループワークの時間を早く切り上げるべきか、もう少し伸ばすべきかなども含めて調整しやすい。

また、教室活動の板書に変わる資料を提示する画面共有システムを使うと、学習者の画面が映し出されないので、説明をしている間に、学習者の表情を読み取るなど様子をうかがうことができないというやりにくさもあった。表情や視点に関しては「Zoomは18名の学習者全員の顔が一覧できるが、どこに視点を置いていいかわからない。（協力者B）」という問題も存在する。

さらに、「担当したのは作文の授業だったため、対面式のように書かせる手元も見えないし、個別対応できないことになる（協力者B）」という問題もあった。学習者の上半身しか映し出されないことで、指導内容によってはやりづらくなるものも確実に存在するのである。対面式の授業でしていた教室活動をオンライン授業に反映させる場合、これまでの教室活動では必要とされていなかった新たなコミュニケーション方法が必要になってくることになるだろう。教室活動の中で、学習者の理解度を確認するために問題を解かせる場面は多々あるが、その際に、「口頭で回答させるかチャットで回答させるか、そもそも学生がキーボードで日本語を打てるのかが課題だった。（協力者B）」これまでの教室活動ではノートやプリントに記入させたり、口頭で答えさせるなどして理解度を確認することが多かったが、オンライン授業では手元が見えないことで、学習者が記入したノートの確認方法が問題となった。オンライン授業の際は学習者がキーボードで、日本語を入力できる

ク』を使用している。中国のオンライン授業は最大6名のグループレッスンでレベルは初級から中級であり、パターンプラクティスが主な教室活動である。

協力者Cもまた、西日本語学校でオンライン化に対応し、それ以前からオンライン教育サービスclass inを使ったオンライン授業の経験もある日本語教師で、教師歴3年、50代女性である。

今回のコロナ禍において協力者Bと同様のタイミングでオンライン化に対応した。担当は初中級クラスである。クラスの人数は17名で、教科書は『みんなの日本語Ⅱ（スリーエーネットワーク）』を使用している。

協力者の選定は以下の理由によるものである。今回のコロナ禍という外的な要因において、オンライン授業未経験でありながらも想定外のタイミングで、急遽対面授業からオンライン授業に切り替えることを余儀なくされた日本語教師は多かったと思われる。その中で対面で行われていた日本語教育を、いち早くオンライン授業に切り替え、取り組み始めたことから、協力者Aに協力してもらった。また、日本語学校の実態調査をするにあたり、日本語学校以外の教育現場ではどのように対応したのかを探るために大学に勤務しているAに協力を依頼した。B、Cについては、すでに構築されたオンラインシステムによるオンライン授業の経験が既にあったうえで、今回のコロナ禍における日本語学校の対面授業からオンライン授業への移行も経験したことから協力を依頼した。

4. 調査結果

4.1 日本語教師が感じたオンライン授業でやりにくかったことは何か

4.1.1 オンライン会議システムzoomの機能に関すること

「(zoomのブレイクアウトルーム機能に関して)全体が見えないので、グループワークが進んでいないグループの確認などがしづらいのがデメリットだった」(協力者A)

「画面共有すると学生の顔が見られなくなるのはzoomのデメリットだった。(中国のオンライン教育システム) class in は画面にテキストが映し出された状態でも画面上部には学生の顔が一覧できるようになっているから」(協力者B)

A)「協力者B」「協力者C」とする)に対してオンライン会議システムzoomを使ってインタビュー調査を行った。調査項目は①授業内容、②オンライン授業で工夫したこと、③オンライン授業で感じたメリット、デメリットである。

また、このインタビュー調査の中から出てきたキーワードを基に選択式のアンケート用紙を作成し、オンライン授業を受けた日本語学習者32名に対してアンケート調査を行った(補足資料参照)。なお、アンケート用紙の選択肢は日本語学習者の言語能力に鑑み日本語母語話者のインタビュー調査結果を基に学習者向けに言葉を変えて選択肢を作成した。さらに10名の学習者に対して聞き取り調査としてフォローアップインタビューを行っている。

<調査対象者>

協力者Aは、2020年のコロナ禍においていち早く韓国でオンライン授業へ切り替え対応した日本語教師で、教師歴18年、30代女性である。協力者Aが担当した授業は、専攻と教養科目の授業があり、専攻の科目としての日本語クラスは大学1年生の初級日本語会話、2年生は中級日本語会話、3年生はビジネス日本語会話であり、それぞれ20名程度の人数構成である。教養科目としての日本語クラスは、いろいろな学科の学生が入ってくるが、基礎的な日本語会話の授業で、クラスは30名である。教材は韓国で発行されているもので、オンラインでも教材は変えずに使用した。文法的なことは韓国人の教師が指導することになっており、日本人教師は会話を中心に教えることになっている。協力者Aが担当している授業はブレンディッドラーニング(反転授業)なので、あらかじめ動画を見ておいて、それをzoomの授業で実践するというのが基本的な流れとなる。教材もあらかじめパワーポイントで録画しておき、それをアップロードして課題としてあらかじめ見ておくことが条件となる。

協力者Bは、東日本の日本語学校で今回のオンライン化に対応し、また、それ以前から中国のオンライン教育サービスclass inでのオンライン授業の経験もある日本語教師で、教師歴3年、50代女性である。今回のコロナ禍において1か月程度の準備期間を経て2020年5月より日本語学校の授業のオンライン化に対応した。担当科目は作文であり、作文の授業そのものはオンライン授業では難しかったので、文法的な要素を含んだ授業に切り替えた。教科書は『留学生のためのここが大切文章表現のルール(スリーエーネットワー

における初級レベルのオンラインでの日本語教育の実践での困難点と利点を述べている。困難点には上に挙げた点であり、利点としては「移動時間が無くなることによる負担軽減」「資料のデジタル化による保管の利便性」「労働環境の効率化」が挙げられている。また後藤（2020：41）は、韓国の大学における会話の授業報告の中で動画による授業（オンデマンド）とzoomによる授業を行った結果、オンデマンドは「即座にフィードバックを返すことが難しく、また学生が教師からももらったフィードバックを見て修正しているのかどうかも不明である。」という問題点が改善されるという意味において、zoomの方が適していると述べている。日本国内のzoomを使用した実践報告としては、三宅他（2021）がオンライン授業の振り返りを通して、オンライン授業の悪い点についてネットワーク環境に関する問題と、学習上の問題を挙げている。学習上の問題としては「対面授業での授業中であれば、すぐに確認できるワークシートの添削にも、オンライン授業では時間を要する。おとなしい学生を参加させながらクラスの一体感を作るのが難しい（三宅他2021：9）」ことを指摘している。

このようにオンライン授業に関しては様々な研究がされているが、オンライン授業の実践の中で垣間見えた対面授業の必要性や対面授業における教師の在り方について言及されているものは少なく、日本国内の日本語学校の教師や学習者を対象にしたオンライン授業の実態調査は管見の限り見当たらない。

今後、オンライン授業もうまく取り入れたハイブリッド型の授業が展開されていくことになることは容易に想像できるが、オンライン授業という存在もある中での対面授業にもとめられている教師の役割や対面授業の在り方はどのようなものだろうか。学習者が対面授業に求めているものは何なのだろうか。オンライン授業で感じた「やりにくさ」を解消する対面授業の役割とはどのようなものなのだろうか。本稿ではこれらの問題意識に基づき、オンライン授業を経験した教師に対するインタビュー調査と、オンライン授業を受講した学習者に対するアンケート調査から日本語学校における対面授業の意義について明らかにしたい。

3. 調査方法

2020年10月に、オンライン授業経験者の日本人教師3名（以下、「協力者

ビュー調査とアンケート調査の結果を報告する。それぞれが日本語学校におけるオンライン授業についてどのように感じたのかを探ることで、日本語学校の対面授業の意義について考察することを目的とする。

2. オンライン授業の実践報告に関する先行研究

オンライン授業の実践報告は現在多数挙げられている。まず、ここでいうオンライン授業を定義しておきたい。オンラインで行われる遠隔授業は、その形態を同期型、非同期型、同期・非同期統合型に分類することができる(久國他1998)。同期型は教師が遠隔地の学習者に対して双方向型のツールを使ってリアルタイムで授業を行う形式である。非同期型は教師があらかじめ録画していた動画教材をオンデマンドで配信し、学習者が遠隔地からその動画にアクセスし、自主的に学習するシステムである。本稿で取り扱うオンライン授業とは教師と学習者がリアルタイムで授業を行う同期型の授業のこととする。

日本語教育のオンライン授業には教師と学習者が1対1で行うプライベートレッスンと、複数の学習者が同時に参加するグループレッスンがある。また、グループレッスンの人数は2～3人程度の少人数の場合もあれば、大人数を対象にした講義型のものまで多岐にわたる。また、使用ツールはweb上の会議システムzoom^(注2)やteams^(注3)、skype^(注4)、中国のオンライン教育システムclass in^(注5)などを使った授業が報告されている。

オンライン授業についてはすでに様々な研究がされており問題が指摘されている。先行研究は大きく分けて2つある。1つはオンラインにおけるコミュニケーションに関するものであり、例えば藤本(2019)は、システムの不具合からの負担が教師のやりづらさという感覚を生んでいると述べており、通信環境や通信速度の差によっておこる問題や、視線の不一致や、見える範囲や動きの制限などにより微妙な感情を読み取ることが難しいことなどが挙げられる。また、岩井・峯崎(2020:37)もオンライン上のコミュニケーションについて「インターネット環境への依存度が高いために起きる問題があり、出欠確認から発言、タイムラグが起きることなど全てに時間がかかる問題、学習者のインターネット環境が悪く接続不良により授業参加が困難になるケースなどが見られた」と述べ、その困難点を指摘している。

もう一つは、授業実践に関するものである。岩井・峯崎(2020)は、韓国

〈報告〉

オンライン授業の実践から見えた
日本語学校の対面授業の意義

志賀村 佐 保

1. はじめに

現在、日本語教育は大きな転換期を迎えている。2020年、新型コロナウイルスの影響により、日本語学校や大学、企業研修などでも、オンラインによる日本語教育の需要が一気に高まった。感染拡大防止策の一環として、世界中の多くの教育機関がそれぞれの場や内容に応じた様々な形のオンライン授業を実施するに至り、現在、多くの研究者によりその事例報告や今後の展望が発表されている。その中でも、日本語学校^(註1)におけるオンライン授業という形態は、これまでの常識を覆す新たな授業形態であり、日本語教師、日本語学習者双方にとってのチャレンジとなった。オンライン授業に関しては日本と海外をつないだオンライン授業を展開する教育サービスが既に数多く存在している。しかし、本来、対面で行われるはずの教育機関での授業が、外的な要因により突然オンライン授業となったのは日本語学校では初めての経験であった。筆者自身も日本語学校に勤務しており、今回のコロナ禍において日本語学校の対面授業を急遽オンライン授業に切り替え、試行錯誤しながらオンライン授業を行った日本語教師の一人である。これまで行ってきた対面授業の経験をもとにオンライン授業を行う中で、オンライン授業のメリット、デメリットを感じる日々であった。オンライン授業は、時間的、地理的、経済的な制限から解放されるというメリットがある一方で、これまでの対面授業を持ち込むには一定の工夫が必要であり、これまでのやり方ではやりにくいというデメリットも感じた。その、オンライン授業で感じたデメリットこそが、オンライン授業では成し得ない教室活動であり、対面授業の意義になるのではないかと思われる。本稿では今回、外的要因によって突然オンライン化された日本語学校の授業の実態と、日本語教師（以下、「教師」とする）、日本語学習者（以下、「学習者」とする）双方に対するインタ

《1010(令和1)年度》

日本文学科卒業論文題目

創作「しつぽの先には幸運を」……………赤間 日菜子
 学校方言における地域差―青森県と宮城県を対象として―…天野 佳奈子
 作品から見る三島由紀夫の芸術と女性―「金閣寺」を中心に―…五十嵐 佳月
 平安時代の和文に見られる漢語の用法の変化…池田 瀬夏
 郡山市方言における天候語彙の体系……………石川 美玖
 三島由紀夫―「金閣寺」を中心に―……………板垣 華穂
 詩集『思ひ出』論―白秋の故郷追憶と象徴的技法―…伊藤 瑞起
 『うつほ物語』における琴を中心とした音楽の効果…五安城 絵美
 『おくのほそ道』に込められた芭蕉の思い……………上 杉 明日香
 高村光太郎にとつての智恵子の存在について…遠藤 陽香
 源俊賴論―『源氏物語』撰取の考察……………及川 暖海
 創作「シセイチヨウ」……………加藤 里菜
 ファンタジーとリアリズムの拮抗と融合……………鎌田 陽菜
 ―高畑勲『かくや姫の物語』(2013)―……………
 地方球団のスポーツ貢献を評価する……………
 ―球団の視点、ファンの視点から―……………木村 優花
 「ヒトガタ」を愛する文学―彼らはヒトガタの奥に何を見たのか―…小泉 まい
 新語・若者ことばに対する意識と消長……………後藤 菜緒
 創作「教壇のマイク」……………斉藤 詩乃

アメリカナイズされたジャンプのニューヒーロー……………齋藤 美咲
 ―漫画『僕のヒーローアカデミア』を中心に―……………
 教師はどのようにして外国人児童生徒の……………酒井 凜
 自発的発話を引き出せるか……………
 接客及び業務に関する言語表現の使用実態について…櫻田 真子
 日本語習者による「の」の習得過程と誤用分析…桜庭 知亜紀
 創作「タルトタタン」……………笹原 佳奈
 私はなぜ岡崎京子に魅力を感じるのか……………佐竹 真帆
 スーパー戦隊シリーズにおける震災表象と……………
 脚本家・小林靖子の震災観……………佐藤 陽
 ―特命戦隊ゴースターズ「烈車隊トキユジャ」を中心に―……………
 石川啄木『一握の砂』に投影された苦悩……………佐藤 若菜
 方言の使用効果―津軽方言を例として―……………神原 清香
 『金閣寺』における美について―「認識」と「行爲」の観点から―…菅 朋実
 つかこうへい論……………鈴木 美玖
 韓国の高等学校における日本語教育としての日本文化の扱い方…高野 沙耶
 有対動詞マチガウ・マチガエルの混同……………高橋 彩奈
 アニメを使用する日本語教育の研究……………高橋 美玲
 ―『僕のヒーローアカデミア』を使った授業で行えること―……………
 三島由紀夫研究―「金閣寺」を中心に―……………田畑 愛実
 三島由紀夫研究―「金閣寺」の美、異性愛と同性愛―…千葉 祐香
 日本語母語話者と外国人日本語使用者間の……………中澤 葉子
 ボイスチャットに関する談話研究……………
 『諸国百物語』における幽霊について……………難波 多恵

三島由紀夫研究―『金閣寺』を中心に……………	新妻 礼菜
『仮面の告白』と『金閣寺』の二作品から見る	…二 唐 夏帆
『正常さの資格』について	… 間 穂乃香
『好色五人女』考―西鶴の描く女性像……………	… 花 洩 ひなの
森鷗外の稀語・難語から見る語彙の特徴……………	… 日比野 愛
日本語の話し方による印象・伝わり方の違い	… 平 山 りほ
―対話における音声の印象に影響を与える要因―	… 毛 利 友 紀
日本語学習者にとっての日本就職の意味とは	… 八 鋏 杏 子
―韓国日本語学習者に対するインタビュー調査を通して―	… 山 尾 祐 生
『古今和歌集』恋歌における女性表現と	… 渡 邊 惇 月
『女らしさ』について	… 渡 辺 日 加 里
若者語のゆれ―日常会話とSNSの比較から……………	… 針 生 奈 々
江戸川乱歩『盲獣』論……………	… 及 川 つ ぐ し
ジャニー喜多川のアイドル思想―選抜・育成の視点から―	… 齋 藤 芽 衣
三島由紀夫研究	… 齋 藤 芽 衣
―『仮面の告白』と『金閣寺』から見た「美」への認識―	… 高 村 光 太 郎
三島由紀夫研究―『金閣寺』を中心に……………	… 高 見 澤 芽 衣
『かけがえない人間』の考察……………	… 赤 井 美 莉 乃
高村光太郎『道程』―自己の確立と智恵子―……………	… 阿 曾 成 美
萩原朔太郎『月に吠える』における孤独の表現……………	
『白き手の狐人』における三木露風の〈象徴〉……………	
日本語教育における「ら抜き言葉」……………	
『楚囚之詩』で見られる「蝙蝠」と「鶯」に隠された	
北村透谷という作者の恋愛観	

2010年代のSNSサイトにおける「パロディ」の在り方	… 荒 関 芽 生
―二次創作作品を中心に―	… 板 橋 由 依
創作「エリアN」……………	… 内 野 日 陽 里
江戸川乱歩の『人間椅子』における手紙の差出人は誰か	… 遠 藤 琴 里
リソースを活用した自律的な学習を促すにはどうすればよいか	… 小 山 田 智 美
―日本語習得サイト「ひるる」もっというんを日本と英語を活用左例―	… 小 山 田 智 美
映画『けいおん!』における「時間」の非/特権性……………	… 小 山 田 智 美
創作「栄門高校よろず相談同好会」……………	… 桂 島 穂 乃 香
漫画『ジョジョの奇妙な冒険』における特殊性と普遍性……………	… 熊 谷 映 美
与謝野晶子論―「君死にたまふことなかれ」を巡って―……………	… 穀 田 有 希
創作「海辺で奏でるコンチェルト」……………	… 佐 藤 菜 月
小文字の歴史としての帝国	… 佐 藤 満 里 奈
―映画『セブツク・バレ』における日本人台湾人の在り方―	… 佐 藤 璃 音
『日本語は生き残れるか』に関する考察……………	… 庄 子 知 花
人の容姿を表す形容詞・形容動詞の変遷……………	… 庄 司 ゆ い
山形県における学校方言の分布……………	… 菅 原 恵 香
創作「月が綺麗でした。」……………	… 平 未 来 花
『源氏物語』―作中歌に見る「涙」―……………	… 高 梨 か れ ん
母語話者の男女差のある言葉から非母語話者の使用可能な	
男ことば・女ことばの扱ひ方について考える	
プリンセス映画から見る女性語の特徴……………	
地域日本語教育においての対話学習の意義……………	
『曾根崎心中』における心中について……………	
―原因と解決を観点として―	

心理学的視点から考える『金閣寺』及び
三島由紀夫を中心とした研究……………太齋 優美

新語の発生と普及―情報通信機器を表す語彙……………田邊 さくら

宮城県方言におけるあいづち表現―会話資料を使用して……………玉澤 明帆

漢字学習の観点から見たICT教材の研究……………足 沢 紫織

『浜松中納言物語』における転生描写について……………津 田 優希

神の使いの動物たち―動物報恩譚から見る神使たち……………手代木 友花

創作「僕らのひみつ」の夏祭り……………東海林 千寛

東北地方における格助詞サの機能拡張について……………富 樫 せりな

『源氏物語』における服飾の色彩―白と紫を中心に……………永 畑 つばさ

創作「花を抱きて」……………花 田 佳巴

雑誌のリード文における文末表現方法……………福 田 天音

創作「風切羽の呪縛」……………古 田 愛奈

石田祐康の作品世界におけるハイブリット性の構築……………松 崎 まどか

―映画『ペンギン・ハイウェイ』を中心に―

創作「約束」ほか三篇……………丸 川 美希子

東北方言の接尾辞「コ」……………三 浦 あさひ

山田尚子のアニメーション世界における不／可視性の転覆……………三 浦 歩

―映画『聲の形』『リスと青い鳥』を中心に―

終助詞の性差における変遷と現代認識……………三 浦 光希

〔F05次元〕の世界……………宮 腰 早葵

―2.5次元ミュージカル『テニスの王子様』の事例を中心に―

情態副詞の変遷について……………宮 崎 真理子

程度性を表す形容詞「やばい」の用法と印象……………村 山 眞子

若者言葉の発生と定着……………森 谷 美緒

古今和歌集「卷第十一恋歌」から「卷第十五恋歌五」の夢……………山 口 華苗

『大和物語』とはどのような物語か……………遊 佐 円香

―女性を足掛かりにして―

小林賢太郎世界の美学―笑いの構築とその本質を中心に……………吉 城 茉海

現代漫画におけるオノマトペの分類と効果……………吉 田 朱里

『金閣寺』研究―「生きよう」という結末に至るまで……………渡 邊 夏鈴

『源氏物語』における六条院―女君と季節の関わりについて……………渡 辺 琴音

漫画『美少女戦士セーラームーン』における……………遠 藤 明日香

フェミニズムの表象

『平家物語』におけるオノマトペの研究……………男 澤 果奈

三島由紀夫研究―『金閣寺』を中心に……………毛 利 咲希

『変わる方言 動く標準語』に関する考察……………田 村 千穂

《1011（令和3）年度》

日本文学科講義題目

深澤昌夫

日本文学史Ⅰ（古典）

日本文化史Ⅰ・Ⅱ（古典芸能史入門）

文学語学入門セミナーA（くずし字で書か

れた「百人一首」を読む）

日本文学・文化演習ⅠB（中世文学を読む）

日本文学・文化演習ⅡB（近世文学を読む）

日本文学発展演習Ⅰ・Ⅱ

東北の文学・文化・ことばⅠ・Ⅱ

卒業研究演習Ⅰ・Ⅱ

澤邊裕子

文学語学入門セミナーD（日本語教育入門）

日本語教育概説Ⅰ・Ⅱ

日本語教育演習Ⅰ・Ⅱ（外国語としての日

本語の基本構造を学ぶ）

日本語教育発展演習Ⅰ・Ⅱ

卒業研究演習Ⅰ・Ⅱ

日本語教育実習Ⅱ

修士論文演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

日本文学史Ⅱ（近代）

文学語学入門セミナーB（『若菜集』を読む）

九里順子

千葉幸一郎

文学語学入門セミナーH（近現代文学入門）

近代文学ⅠA（近代文学に描かれた女性像

を探る）

日本文学・文化演習ⅠC（文学理論の基礎

を学ぶ）

日本文学・文化演習ⅡC（明治三〇～四〇

年代の短編小説を読む）

日本文学発展演習Ⅰ・Ⅱ

卒業研究演習Ⅰ・Ⅱ

文学語学入門セミナーC（現代日本語入門）

現代語Ⅰ（日本語の地域差を学ぶ）

現代語Ⅱ（言葉の多様性（変異）を学ぶ）

日本語学演習ⅠA・ⅡA（日本語方言考察）

日本語学発展演習Ⅰ・Ⅱ

東北の文学・文化・ことばⅠ・Ⅱ

卒業研究演習Ⅰ・Ⅱ

日本文学・文化演習ⅠE（日本映画史）

映像文化論Ⅱ（大衆文学、映画、TVドラマ、マンガ、アニメなど、多様なジャン

李敬淑

ルとメディアの作品を表象文化的観点から分析する)

日本文化発展演習 I

卒業研究演習 I

菊地恵太

日本語概説 I・II

文学語学入門セミナー F (古典籍を読む)

日本語学演習 I B (キリシタン資料「天草

版平家物語」を読む)

日本語学演習 II B (江戸時代の古活字本「伊

曾保物語」を読む)

日本語学発展演習 I・II

卒業研究演習 I・II

山口一樹

文学語学入門セミナー G (くずし字で書かれた『新版源氏かるた』や『古今和歌集』

を読む)

日本文学・文化演習 I A (上代・中古文学

を読む)

日本文学・文化演習 II A (『和泉式部日記』

を読む)

古典文学 I A (『源氏物語』を読む)

古典文学 II A (平安文学「女房」研究)

日本文学発展演習 I・II

卒業研究演習 I・II

J・F・モリス

日本文化論 I (『日本文化論』的な言説を

越えた日本文化を学ぶ)

日本文化論 II (文化ナシヨナリズム)

日本文学・文化演習 II E

世界のなかの日本 A・B (多文化共生)

卒業研究演習 I・II

国語科教材研究

近代文学 I B (太宰治を読む)

近代文学 II B (永井荷風を読む)

異文化コミュニケーション

日本漢字能力検定対策

映像文化論 I

第二言語習得論 I・II

対照言語学

対照言語学

国語科教育法 I・II・III・IV

国語科実践研究 I・II

ニユース時事能力検定対策

創作表現発展演習 I・II

卒業研究演習 I・II

古典文学 I B (『百人一首一夕話』を読む)

日本語検定対策

日本語検定対策 I

社会言語学 (『ものの言いかた』の地域差

研究)

三 鳥 敦 子 音声学（日本語音声学の基礎知識の習得）

日本語教育実習Ⅰ

大 木 一 夫 日本語史Ⅰ・Ⅱ

創作表現演習Ⅰ・Ⅱ

大 沼 郁 子 メディア編集A・B（メディアアコミュニケーション
シヨンの体感）

シヨンの体感）

ITスキル

日本文化発展演習Ⅱ

卒業研究演習Ⅱ

中国文学特殊講義Ⅰ（大学院）

日本語コミュニケーションスキル

比較文学A・B

篠 本 賢 一 身体表現A・B（演劇エクササイズを通し
て、「身体表現」について実践的に考察
する）

て、「身体表現」について実践的に考察
する）

する）

鈴 木 由 利 子 民俗学A・B

キャリアデザイン

高 橋 修 書道Ⅲ・Ⅳ

古典文学ⅡB（『万葉集』を読む）

津 田 大 樹 書道Ⅰ・Ⅱ

中国文学概説Ⅰ・Ⅱ（漢文訓読）

中国文学A（『唐代伝奇』を読む）

中国文学B（『聊齋志異』を読む）

渡 部 東 一 郎

受贈圖書目録（二〇二〇年四月～二〇二二年三月）

- 國語國文學報 78 79（愛知教育大学国語国文学研究室）
 愛知教育大学大学院国語研究 28 29（愛知教育大学大学院国語教育専攻）
 語教育専攻）
 緑岡詞林 44（青山学院大学日文学院生の会）
 青山語文 50（青山学院大学日本文学会）
 紀要 62（青山学院大学文学部）
 大阪大谷国文 49 50（大阪大谷大学日本語日本文学会）
 国語と教育 46（大阪教育大学国語教育学会）
 大阪国際児童文学振興財団 研究紀要 33（大阪国際児童文学振興財団）
 文学史研究 60（大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会）
 言語文化学研究 日本語日本文学編 15（大阪府立大学人間社会システム科学研究科人間社会学専攻言語文化学分野）
 大妻国文 51（大妻女子大学国文学会）
 研究所年報 13（大妻女子大学 草稿・テキスト研究所）
 岡大国文論稿 48（岡山大学言語国語国文学会）
 國文 133（お茶の水女子大学国語国文学会）
 帯広大谷短期大学紀要 57（帯広大谷短期大学）
 香川大学国文研究 45（香川大学国文学会）
 学習院大学上代文学研究 45（「学習院大学上代文学研究会」同人）
 學習院大學國語國文學會誌 64（學習院大學國語國文學會）

- 國文學 104（関西大学国文学会）
 関西学院大学日本語教育センター紀要 10（関西学院大学日本語教育センター）
 日本文藝研究 71 | 2 72 | 1 72 | 2（関西学院大学日本文学会）
 語文研究 129（九州大学国語国文学会）
 和漢語文研究 18（京都府立大学国中文学会）
 金城日本語日本文化 96（金城学院大学日本語日本文化学会）
 国文研究 65（熊本県立大学日本語日本文学会）
 群馬県立女子大学国文学研究 40（群馬県立女子大学国語国文学会）
 高知大國文 51（高知大学国語国文学会）
 神女大國文 32（神戸女子大学国文学会）
 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要 14（神戸女子大学古典芸能研究センター）
 日本文化研究 5（國學院大學栃木短期大學國文學會）
 國際日本文学研究集會會議録 43（国文学研究資料館）
 調査研究報告 40（国文学研究資料館）
 古代文学研究 第二次 29（古代文学研究会）
 相模国文 47（相模女子大学国文研究会）
 實踐國文學 98 99（実践国文学会）
 上智大学国文学論集 54（上智大学国文学会）
 上智大学国文学科紀要 38（上智大学国文学科）
 昭和女子大学大学院日本文学紀要 31 32（昭和女子大学大学院）

- 文学研究 31 (聖徳大学短期大学部国語国文学会)
 国文白百合 51 (白百合女子大学国語国文学会)
 椋山女学園大学研究論集 社会・人文・自然科学篇 各52 (椋山女学園大学)
 成蹊國文 53 (成蹊大学文学部日本文学科)
 成城國文學論集 43 (成城大學學院文學研究科)
 成城国文学 37 (成城大学成城国文学会)
 聖心女子大学大学院論集 42-1 42-2 (聖心女子大学)
 全国文学館協議会 紀要 13 (全国文学館協議会)
 専修国文 107 (専修大学日本文学文化学会)
 日本文学論集 45 (大東文化大学大学院日本文学専攻院生会)
 日本文学研究 60 (大東文化大学日本文学会)
 高岡市万葉歴史館紀要 30 (高岡市万葉歴史館)
 語文論叢 35 (千葉大学文学部日本文化学会)
 中央大學國文 64 (中央大學文學會)
 紀要 言語・文学・文化 127 128 (中央大学文学部)
 中央大学文学会論叢 7 (中央大学文学会)
 中央大学文学部紀要 55-1 55-2 (中央大学文学部)
 中國詩文論叢 37 38 (中國詩文研究會)
 文藝言語研究 文藝篇・言語篇 78 79 (筑波大学大学院人文社
 会科学研究科文芸・言語専攻)
 國文鶴見 54 (鶴見大学日本文学会)
 奈良学研究 22 (帝塚山大学奈良学総合文化研究所)
 日本文化史研究 51 (帝塚山大学奈良学総合文化研究所)
- 山邊道 61 (天理大學國語國文學會)
 学芸国語国文学 52 53 (東京学芸大学国語国文学会)
 東京女子大學日本文學 116 (東京女子大学学会日本文学部会)
 東京大学国文学論集 15 (東京大学文学部国文学研究室)
 同志社女子大学大学院 文学研究科紀要 20 (同志社女子大学)
 日本語日本文学 32 (同志社女子大学日本語日本文学会)
 同朋文化 16 (同朋大学人文学会)
 国語学研究 59 (東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊
 行会)
 言語科学論集 24 (東北大学大学院文学研究科 言語学・日本
 語学・日本語教育学専攻分野)
 文藝研究 ―文芸・言語・思想― 187 188 (東北大学文学部日本
 文芸研究会)
 日本文芸論稿 43 (東北大学文芸談話会)
 日本文学文化 19 20 (東洋大学日本文学文化学会)
 文学論藻 95 (東洋大学文学部日本文学文化学科)
 徳島文理大学文学論叢 37 (徳島文理大学文学部文学論叢編集
 委員会)
 徳島文理大学比較文化研究所年報 36 (徳島文理大学比較文化
 研究所)
 並木の里 89 90 (「並木の里」の会)
 叙説 47 48 (奈良女子大学日本アジア言語文化学会)
 南山大学日本文学文化学科論集 20 (南山大学日本文学文化学科)
 西日本国語国文学 7 (西日本国語国文学会)

- 二松學舎大学人文論叢 104 105 (二松學舎大学人文学会)
 日本近代文学館年誌 資料探索 16 (日本近代文学館)
 國文目白 60 (日本女子大学国語国文学会)
 清心語文 22 (ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会)
 花園大学日本文学論究 13 (花園大学日本文学会)
 阪神近代文学研究 21 (阪神近代文学会)
 言語表現研究 37 (兵庫教育大学言語表現学会)
 弘学大語文 47 (弘前学院大学国語国文学会)
 國文學放 244 245 246 247 (広島大学国語国文学会)
 文教國文學 64 (広島文教大学国文学会)
 玉藻 54 (フェリス学院大学国文学会)
 藤女子大学国文学雑誌 103 (藤女子大学日本語・日本文学会)
 日本文學誌要 101 102 (法政大學國文學會)
 法政文芸 15 (法政大学国文学会)
 作家特殊研究 研究冊子 10 (法政大学大学院人文科学研究科
 日本文学専攻)
 日本文学論叢 50 (法政大学大学院日本文学専攻委員会)
 能楽研究 44 (法政大学能楽研究所)
 三重大学日本語学文学 31 (三重大学人文学部日本語日本文学
 研究室)
 武庫川女子大学言語文化研究所年報 30 (武庫川女子大学)
 武庫川国文 89 (武庫川女子大学国文学会)
 武蔵野日本文学 30 (武蔵野大学国文学会)
 明治大学日本文学 46 (明治大学日本文学研究会)
- 文芸研究 142 143 144 (明治大学文芸研究会)
 日本文学会誌 32 (盛岡大学日本文学会)
 日本文學會學生紀要 28 (盛岡大学日本文学会)
 東北文学の世界 28 (盛岡大学文学部日本文学科)
 米澤國語國文 49 (山形県立米沢女子短期大学国語国文学会)
 論究日本文學 112 113 (立命館大学日本文学会)
 琉球アジア文化論集 6 (琉球大学人文社会学部)
 國文學論叢 66 (龍谷大學國文學會)
 古代研究 53 54 (早稲田古代研究会)
 国文学研究 191 192 193 (早稲田大学国文学会)
 早稲田大学大学院 教育学研究科紀要 31 (早稲田大学大学院
 教育学研究科)
 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊28―1 28―2 (早
 稲田大学大学院教育学研究科)
 稲田大学大学院教育研究科)
 文藝と批評 13―1 (早稲田大学文学部日文コース室内文藝と
 批評の会)
 平安朝文学研究 28 29 (早稲田大学平安朝文学研究会)
 和洋國文研究 55 (和洋女子大学日本文学文化学会)
 宮城学院女子大学大学院人文学会誌 22 (宮城学院女子大学大
 学院)
 2020年度平安文学ゼミ 卒業論文集 (宮城学院女子大学日
 本文学科)
 2020年度創作表現研究Ⅱ作品集 (宮城学院女子大学日本文
 学科)

千葉正昭先生より

『太宰治論 作品からのアプローチ』（雁書館）

秦 恒平様より

『秦 恒平 湖の本』 150（湖の本）

伊狩弘先生より

『近代文学研究における〈資料〉の活用』（日本近代文学会）

『樋口一葉全集』（筑摩書房）

『明治女学校の世界』（青英舎版）

九里順子先生より

『詩人・木下夕爾』（翰林書房）

日本文学ノート 第五十五号 (通卷七十七号)

J・F・モリス教授定年退職記念特集号

目次

三十二年間を振り返って	J・F・モリス	一
J・F・モリス教授略歴	J・F・モリス	六
研究業績	J・F・モリス	八
『保元物語』における〈理〉と〈哀〉		
——『平治物語』『平家物語』と比較して——	阿部 日菜子	一四
中原中也の詩におけるフォルムと内なる宇宙	寺嶋 朝香	五七
北園克衛における視覚詩——「凶形説」と白のイメージ——	梅津 知佳	七四
室生犀星、老年の生の言葉——入院記「黄と灰色の間答」『蝶紋白』——	九里 順子	九五
漢字字体の組織的な略体化		
——略字「尽」の構成素「尺」の場合——	菊地 恵太	一一五
戦時下朝鮮映画における金信哉の女優表象(3)		
——大東亜共栄圏の女優には何が求められたか——	李 敬淑	六七(一四七)
〈報告〉海外の日本語教育とつながるオンラインセミナー		
——Web会議システムを活用した実践事例の報告——	澤邊 裕子	57(一五七)
形容詞の名詞化に使われる接尾辞「み」の用法の変化	田中 幸奈	22(九二)
——ローマ字の規範意識と実態——	大戸 あや香	1(一一三)
——大学生へのアンケート調査から——		
〈報告〉令和元年度第二回日本語検定「文部科学大臣賞」を受賞して	大内 優未子	一一四
二〇二〇年度新入生の皆さんへ	森野 美恵	一一六
深澤 昌夫		一一六
彙報		
二〇一九年度 日本文学科卒業論文題目		一一九
二〇二〇年度 日本文学科講義題目		一二二
受贈図書目録(二〇一九年四月～二〇二〇年三月)		一二五
『日本文学ノート』投稿規定		

日本文学ノート 第五十六号(通卷七十八号)

《執筆者紹介》

山口 一樹 (本学助教)

深澤 昌夫 (本学教授)

青木 優佳 (本学二〇二〇年度卒業生)

九里 順子 (本学教授)

菊地 恵太 (本学助教)

遠藤 琴里 (本学二〇二〇年度卒業生)

志賀村 佐保 (本学大学院生)

編集後記

新型コロナウイルスの流行が収まらない。本年度前期の授業は、はじめオンライン上で行われることになった。学生の登校が可能になったのちも、遠隔履修せざるをえない者がいることから、教室では目の前の学生とパソコン越しの学生に向かつて講義をしている。授業の模様を自分で録画したり、オンラインで配信したり、遠隔授業に対応するなかで身に付いた技術は多いが、本来の授業風景を取り戻したくも思う。

通常と異なる運営が続くなか、日本文学科では新たな先生をお迎えすることにもなった。まず昨年度の後期に、小竹諒先生が着任された。小竹先生は学校司書の人材育成について研究しておられ、本学では司書課程の科目を担当されている。また本年度は千葉幸一郎先生が赴任された。千葉先生は高等専門学校などの様々な環境で教鞭を振られたご経験があり、安部公房を主としながら広域に近代文学の研究を進めておられる。専門を異にする先生方からは新たな刺激を受け、教育のうえで多くを学ばせていただいている。

私自身は本学に務めさせていただいてから、一年半の月日が経とうとしている。異例の状況下にあっても、学生と古文を読む時間は変わらず楽しい。去年の冬、大雪が降ったので『枕草子』の「雪高う降りて」と始まる章段を読んだ。色鮮やかな装束と白い雪の美しい対比が記されたところのだが、ある学生が「今日の私だー」と驚いていた。彼女の着ていた山吹色のコートは、たしかにキャンパスの雪景色に映えていた。古来の美意識で現代を捉え直す瞬間をみた、ような気がした。何かと制約のある状況は続いていくが、少しでも多く新鮮な気づきを学生たちに与えていけたらと思う。

(山口一樹)

『日本文学ノート』投稿規定

1. 投稿資格 日本文学会の会員とする。なお、編集委員会の許可を得たものはこの限りではない。
2. 掲載内容 ①論文・研究ノート ②創作作品 ③講演会原稿 ④書評 など
3. その他、編集委員会において必要と認められたものを掲載する。本誌は年一回発行する。
4. 著作権および電子化
著者は、自らの有する著作権のうち複写権および公衆送信権の行使を投稿段階において日本文学会に許諾したものとす。日本文学会は著者より行使を許諾された複写権および公衆送信権により、その著作物を電子化または複製の形態などにより公開することができる。著者は自らの著作を他に転載することができない。ただし、その場合には事前に日本文学会に申し出るものとする。

日本文学ノート 第五十六号 (通巻七十八号)

二〇二二(令和三)年七月三〇日 印刷

二〇二二(令和三)年七月三〇日 発行

発行人 深澤昌夫

発行所 宮城学院女子大学

日本文学会

仙台市青葉区桜ヶ丘九丁目一番一

〒981-8557 ☎〇二二一二七七一六二二

印刷所 株式会社 東誠社

仙台市宮城野区岡田西町一番五十五号

〒983-0004 ☎〇二二一二八七一三三五一

日本文学ノート 第五十六号 (通卷七十八号)

目次

蜻蛉巻における宮の君の出仕	山口一樹	一
吾輩も猫である——日本文学史の中のネコたち(その一)	深澤昌夫	一五
『白き手の獵人』における三木露風の〈象徴〉	青木優佳	六二
地を這う透谷——「亡友反古帖」より見えるもの	九里順子	八六
〈研究ノート〉「国」字体小考——日本における使用字体の変遷	菊地恵太	一〇三
リソースを活用した自律的な学習を促すにはどうすればよいか		
——日本語学習サイト「ひろがるもっ」といゝろんな日本と日本語を活用した例	遠藤琴里	19 (一三四)
〈報告〉オンライン授業の実践から見えた日本語学校の対面授業の意義	志賀村佐保	1 (一五二)

彙報

二〇二〇年度 日本文学科卒業論文題目	一五三
二〇二一年度 日本文学科講義題目	一五六
受贈図書目録(二〇二〇年四月〜二〇二一年三月)	一五九